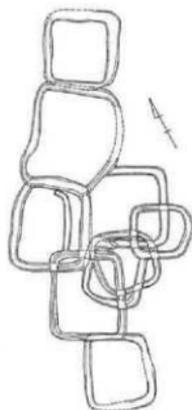


宮崎市文化財調査報告書 第60集

さくらまち
桜町遺跡

宮崎広域都市計画事業 花ヶ島桜町土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



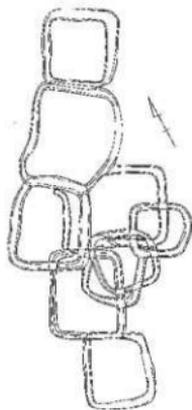
2005年

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書 第60集

さくらまち
桜町遺跡

宮崎広域都市計画事業 花ヶ島桜町土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2005年

宮崎市教育委員会



古代井戸出土 長沙窯水注片

序

本書は、宮崎市花ヶ島町桜町における上地区画整理事業に伴い、宮崎市教育委員会が平成16年1月から平成17年5月まで発掘調査を実施した、同所に所在する桜町遺跡の調査報告書です。

桜町遺跡は水田地帯中の、弥生時代を中心とする遺跡です。発掘調査の結果、多数の貴重な資料と、それに付随した古代の謎の数々が見つかりました。先人たちの残した謎に挑み、その世界に思いを馳せるためには、基礎的なデータをひとつひとつ積み重ねていくことが必要不可欠です。本書のような調査報告書を刊行することでデータを公表し、共有することは、我々、行政の立場から歴史に関わるものにとって、重要な責務のひとつと考えます。

調査の終了後、桜町遺跡は現在に生きる私たちの新たな生活の場として生まれ変わりました。我々が、文字通り、先人たちの積み重ねてきた歴史の上に拠って立っていることを実感いたします。

今回の発掘調査は1年以上の長期にわたるものでした。夏の暑熱も、冬の寒風も、遮るものの何ひとつない発掘現場において、作業に従事して下さった作業員の皆様、ならびに調査に御協力いただき、様々な便宜をはかっていただいた桜町土地区画整理事業組合の皆様には、末尾ながら心より御礼申し上げます。

平成17年12月

宮崎市教育委員会
教育長 内藤泰夫

例 言

1. 本書は宮崎広域都市計画事業 花ヶ島桜町土地区画整理事業に伴う、宮崎県宮崎市花ヶ島町字桜町に所在する桜町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は2次にわたって宮崎市教育委員会が実施した。現地調査は、1次調査が平成16年1月21日～平成16年3月19日まで、2次調査が平成16年6月22日～平成17年5月31日までである。また整理作業は平成17年4月19日～平成17年12月13日の期間実施した。

3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

文化振興課	課 長	小椋 聖 (平成15・16年度)
	"	野田 清孝 (平成17年度)
調査総括	文化財係長	田村 泰彦 (平成15年度)
	"	米良 明信 (平成16・17年度)
調査事務	主任主事	富永 智美 (平成15年度)
	主 事	松木 勇道 (平成16年度)
	主任主事	" (平成17年度)
調査員	技 師 補	竹中 克繁 (平成15年度)
	技 師	" (平成16・17年度)
	嘱 託	井上 誠二 (平成16・17年度)
	"	久保 憲次 (平成16年7月～9月)
補助員	嘱 託	永友加奈子 (平成16・17年度)
	"	稲元久美子 (平成16・17年度)
	"	徳丸 理奈 (平成16・17年度)

4. 掲載した図面のうち、現場における実測は竹中・井上・久保が、遺物の実測は永友・稲元・徳丸・井上が、それぞれ現場作業員、整理作業員の協力を得て行った。
5. 現場および遺物の写真撮影は竹中・井上・久保が分担して行った。
6. 航空写真については有限会社スカイサーベイ九州に撮影を委託した。また、土壌の自然科学分析(第IV章)は株式会社古環境研究所に委託した。
7. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。
SA・・・竪穴住居 SB・・・掘立柱建物 SD・・・土坑
SE・・・溝状遺構 SL・・・周溝状遺構
8. 本書の図で使用する方位記号のうち、M.N.は磁北を表す。
9. 本書の執筆(第IV章を除く)・編集は竹中が行った。
10. 出土遺物および掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会が保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第I章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第II章 調査経過

第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の対象	5
第3節 調査の経過	5

第III章 調査成果

第1節 調査成果の概略	
a. 基本層序	6
b. 遺物包含層	6
c. 調査区の旧地形	10
第2節 弥生時代の遺構と遺物	
a. 周溝状遺構	10
b. 土坑	45
c. ビット	91
第3節 古代・中世の遺構と遺物	
a. 土坑	95
b. 竪穴式住居	101
c. 掘立柱建物	103
d. ビット	111
e. 溝状遺構	111
第4節 近世の遺構と遺物	
a. 溝状遺構	114
第5節 その他の遺構	
a. 土坑	118

第IV章 自然科学分析（株式会社古環境研究所）

第1節 火山灰分析	130
第2節 放射性炭素年代測定	134
第3節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析	136
第4節 花粉分析	147

第5節 珪藻分析	151
第6節 蛍光 X 線分析	154

第V章 総括

第1節 弥生時代の周溝状遺構に関して	
a. 遺構の存続期間	157
b. 遺構の並存	158
c. 周溝状遺構の性格	158
第2節 弥生時代の土坑群に関して	158
第3節 弥生時代桜町遺跡の位置づけ	159
第4節 古代の井戸祭祀に関して	160
第5節 古代桜町遺跡の位置づけ	
a. 古代桜町遺跡の地理	160
b. 古代桜町遺跡の遺構と遺物	161
c. 古代桜町遺跡の位置づけ	162

挿 図 目 次

第1図 桜町遺跡および周辺遺跡位置図	2
第2図 桜町遺跡調査区位置図	3
第3図 遺物包含層出土遺物実測図	6
第4図 遺構配置図	7・8
第5図 遺物包含層セクション図	9
第6図 周溝状遺構集中検出箇所平面実測図	11
第7図 SL1平面実測図・遺物出土位置図・セクション図	13
第8図 SL1出土遺物実測図	14
第9図 SL2平面実測図・遺物出土位置図・セクション図	15
第10図 SL2出土遺物実測図	16
第11図 SL3平面実測図・遺物出土位置図・セクション図	18
第12図 SL3出土遺物実測図①	19
第13図 SL3出土遺物実測図②	20
第14図 SL4平面実測図・遺物出土位置図・セクション図	22
第15図 SL4出土遺物実測図①	23
第16図 SL4出土遺物実測図②	24
第17図 SL5・7平面実測図・遺物出土位置図・セクション図	26

第 18 図	S L 5 出土遺物実測図	27
第 19 図	S L 6 平面実測図・遺物出土位置図・セクション図	28
第 20 図	S L 6 出土遺物実測図	29
第 21 図	S L 7 出土遺物実測図	30
第 22 図	S L 7 セクション図	31
第 23 図	S L 8 出土遺物実測図	32
第 24 図	S L 8・9 平面実測図・遺物出土位置図・S L 6・9 セクション図	33
第 25 図	S L 9 出土遺物実測図	34
第 26 図	S L 10 平面実測図・遺物出土位置図 ・ S L 6・10 セクション図・S L 9・10 セクション図	36
第 27 図	S L 10 出土遺物実測図	37
第 28 図	S L 11 平面実測図・セクション図・遺物出土位置図	38
第 29 図	S L 11 出土遺物実測図	39
第 30 図	S L 12 平面実測図	41
第 31 図	S L 12 遺物出土位置図・セクション図・出土遺物実測図	42
第 32 図	S L 13 平面実測図・遺物出土位置図・セクション図	44
第 33 図	S L 13 出土遺物実測図	45
第 34 図	S D 1・2 平面実測図およびセクション図	46
第 35 図	S D 1 出土遺物実測図	47
第 36 図	S D 4 平面実測図およびセクション図	48
第 37 図	S D 6 平面実測図および出土遺物実測図	49
第 38 図	S D 7 平面実測図およびセクション図	49
第 39 図	S D 7 出土遺物実測図①	50
第 40 図	S D 7 出土遺物実測図②	51
第 41 図	S D 8 平面実測図	52
第 42 図	S D 9 平面実測図およびセクション図	53
第 43 図	S D 9 出土遺物実測図	55
第 44 図	S D 12 平面実測図およびセクション図	55
第 45 図	S D 12 出土遺物実測図	56
第 46 図	S D 13 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	57
第 47 図	S D 14 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	58
第 48 図	S D 15・16 平面実測図およびセクション図	59
第 49 図	S D 16 出土遺物実測図	60
第 50 図	S D 17 平面実測図およびセクション図	61
第 51 図	S D 17 出土遺物実測図	61
第 52 図	S D 18 平面実測図およびセクション図	63

第 53 図	S D 18 出土遺物実測図	64
第 54 図	S D 20 平面実測図およびセクション図	65
第 55 図	S D 20 出土遺物実測図	66
第 56 図	S D 21 平面実測図およびセクション図	67
第 57 図	S D 21 出土遺物実測図①	68
第 58 図	S D 21 出土遺物実測図②	69
第 59 図	S D 22 平面実測図およびセクション図	70
第 60 図	S D 22 出土遺物実測図	71
第 61 図	S D 23 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	72
第 62 図	S D 24 平面実測図およびセクション図	73
第 63 図	S D 24 出土遺物実測図	74
第 64 図	S D 26 平面実測図	75
第 65 図	S D 26 出土遺物実測図	76
第 66 図	S D 28 平面実測図およびセクション図	77
第 67 図	S D 28 出土遺物実測図	78
第 68 図	S D 30 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	79
第 69 図	S D 31 平面実測図・出土遺物実測図	80
第 70 図	S D 32 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	82
第 71 図	S D 33 平面実測図およびセクション図	83
第 72 図	S D 33 出土遺物実測図	84
第 73 図	S D 34 平面実測図およびセクション図	85
第 74 図	S D 34 出土遺物実測図①	86
第 75 図	S D 34 出土遺物実測図②	87
第 76 図	S D 35 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	88
第 77 図	S D 36 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	89
第 78 図	S D 43 平面実測図・出土遺物実測図	90
第 79 図	S D 44 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	91
第 80 図	S D 46 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	92
第 81 図	ビット内出土遺物	93
第 82 図	S D 5 平面実測図およびセクション図	94
第 83 図	S D 5 出土遺物実測図	96
第 84 図	S D 10 平面実測図およびセクション図	97
第 85 図	S D 10 出土遺物実測図	98
第 86 図	S D 11 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	99
第 87 図	S D 25 平面実測図およびセクション図・出土遺物実測図	100
第 88 図	S A 1 平面実測図・出土遺物実測図	102

第 89 図	S B 1 実測図	103
第 90 図	S B 2 実測図	104
第 91 図	S B 3 実測図	105
第 92 図	S B 4 実測図	106
第 93 図	S B 5 実測図	107
第 94 図	S B 6 実測図	108
第 95 図	S B 7・8 実測図	109
第 96 図	S B 9 実測図	110
第 97 図	ピット内出土遺物実測図	111
第 98 図	S E 14・15・16・18 セクション図	112
第 99 図	溝状遺構(古代)出土遺物実測図	113
第 100 図	S E 7・8 出土遺物実測図	115
第 101 図	S E 1・2・6・7 セクション図	116
第 102 図	S E 8・9・10・11・12・19 セクション図	117
第 103 図	S D 19 平面実測図およびセクション図	118
第 104 図	S D 3 平面実測図およびセクション図	119
第 105 図	S D 27 平面実測図およびセクション図	119
第 106 図	S D 40 平面実測図およびセクション図	120
第 107 図	S D 39・42・45 平面実測図	120
第 108 図	S D 41 平面実測図およびセクション図	120
第 109 図	テフラ組成ダイアグラム	133
第 110 図	A 区東壁における植物珪酸体分析結果	141
第 111 図	C 区南壁における植物珪酸体分析結果	142
第 112 図	S D 5 における植物珪酸体分析結果	143
第 113 図	S D 25 における植物珪酸体分析結果	144
第 114 図	S L 2 における植物珪酸体分析結果	145
第 115 図	S D 25 における花粉ダイアグラム	150
第 116 図	S D 25 における主要珪藻ダイアグラム	153
第 117 図	S D 5 における蛍光 X 線分析	156

図 版 目 次

図版 1～40	現地調査	165
図版 41～192	出土遺物	186

表目次

表 1	周辺遺跡一覧	3
表 2	出土土器観察表(弥生時代)①	122
表 3	出土土器観察表(弥生時代)②	123
表 4	出土土器観察表(弥生時代)③	124
表 5	出土土器観察表(弥生時代)④	125
表 6	出土土器観察表(弥生時代)⑤	126
表 7	出土土器観察表(弥生時代)⑥	127
表 8	出土土器観察表(弥生時代)⑦	128
表 9	出土石器・土製品観察表(弥生時代)	128
表 10	出土土錘・土製品・石器観察表(古代)	128
表 11	出土土器・陶磁器観察表(古代・中世・近世)	129
表 12	テフラ検出分析結果	134
表 13	火山ガラス比分析結果	134
表 14	重鉱物組成分析結果	134
表 15	植物珪酸体分析結果①	139
表 16	植物珪酸体分析結果②	140
表 17	花粉分析結果	149
表 18	桜町遺跡における珪藻分析結果	152
表 19	蛍光X線分析結果	155

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

桜町遺跡の所在する宮崎平野（宮崎県の東側中央、太平洋に面した沖積平野。宮崎県都農町から同宮崎市にかけての海岸部一帯）の地形には、その形成順に下田島Ⅰ～Ⅳ面との呼称が与えられている。下田島面群は海成地形のため、各面および各地形単位は日向灘（太平洋）に面して南北に細長く、各面は砂堤、砂丘、堤間低地（旧潟湖）、氾濫原より成る。

最も内陸側（≒高位）に位置する下田島Ⅰ面およびその東側の下田島Ⅱ面上の砂丘（通称、第1砂丘、第2砂丘）には、弥生時代以降の遺跡が多数存在するとともに、現在でも居住地として利用され、多くの民家が集中する。この第1砂丘、第2砂丘は、宮崎市の北に隣接する佐土原町（平成18年1月、宮崎市と合併）の海岸部から始まり、宮崎市のほぼ中央を横貫する県下最大級の河川大淀川の北側においてほぼ収束する。大淀川の北側には、第1砂丘の西側を砂丘列に沿って南進する新別府川があるが、この川は大淀川に合流する直前で東に流れを変えて日向灘に注ぐ。この新別府川が東に流れを変える地点が、第1砂丘、第2砂丘の収束する地点となる。

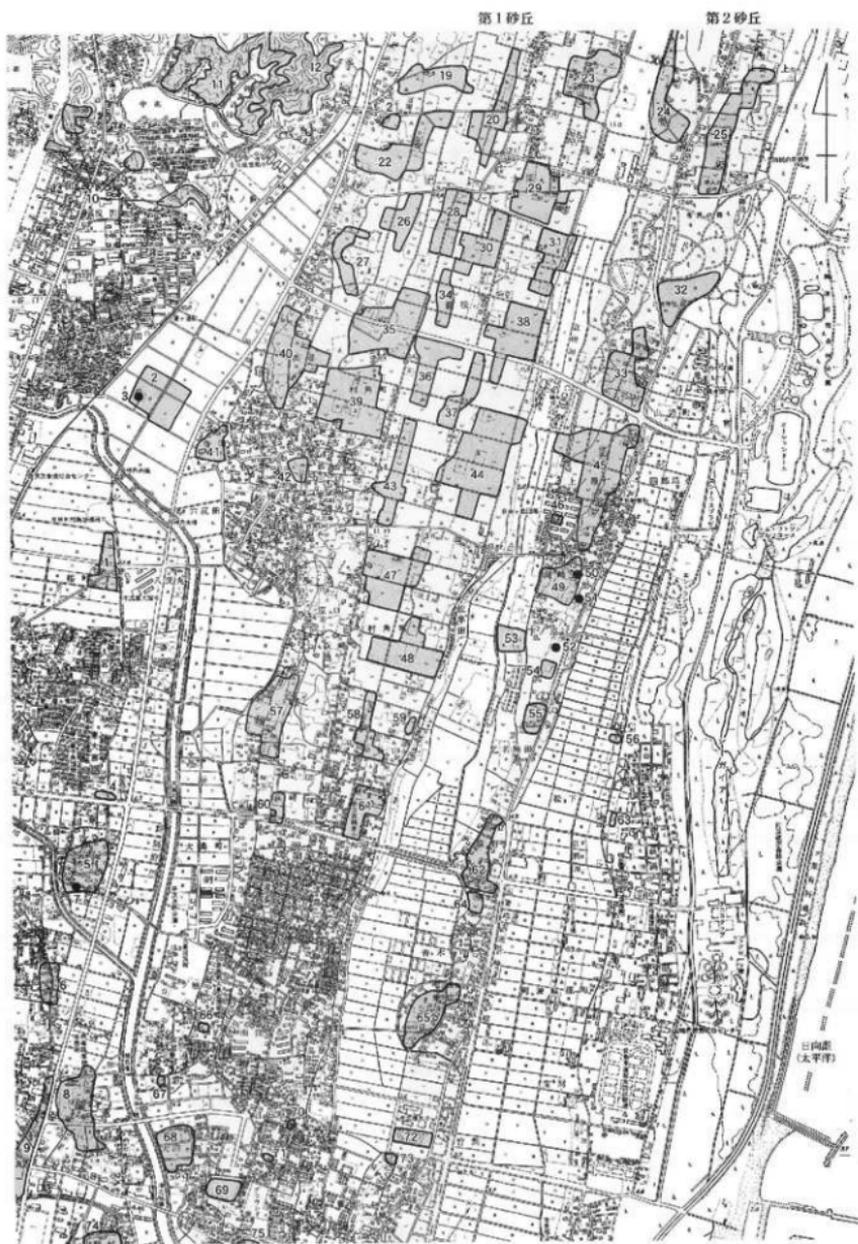
桜町遺跡は完新世以前に形成された内陸側の丘陵地帯と、その東側に位置する第1砂丘との間に形成された標高6.5～7.5mの堤間低地に所在する。現在、桜町遺跡周辺の低地一帯は水田地帯として利用されているが、桜町遺跡はこの低地水田地帯中に存在する南北210m、東西110mの、南北に長い標高8.0m前後の微高地上に形成され、遺跡の北東170mほどの位置には新別府川が流れている。

第2節 歴史的環境

前節に触れたように、桜町遺跡の東方には砂丘列が存在し、弥生時代以降の遺跡が密集している。ただし、その多くは「弥生時代ないし古墳時代の遺物散布地」として認識されているのみで、様相は明らかではない。

桜町遺跡より東に1.0kmほどに位置する第1砂丘上の遺跡のうち、調査によりその様相が明らかとなっているのは萩崎第2遺跡（宮崎市教育委員会 平成7年度）、江田原第3遺跡（宮崎市教育委員会 平成13年度）および砂丘南端に位置する櫛遺跡（日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会 昭和30年代）、櫛1号墳（宮崎大学考古学研究室 平成12～15年度）の4箇所である。櫛遺跡は、現在までに知られている第1砂丘上における最古の遺跡で、弥生時代前期の土器とともに小児用甕棺墓、積石墓が検出されている。他の3遺跡については、古留1～2式併行の土器を出土した櫛1号墳（古墳時代前期）、TK208型式の須恵器が消滅円墳の周溝内から検出された江田原第3遺跡（古墳時代中期）、溝状遺構中より飛鳥時代の甕が出土した萩崎第2遺跡と、すべて古墳時代から飛鳥時代にかけての遺跡である。

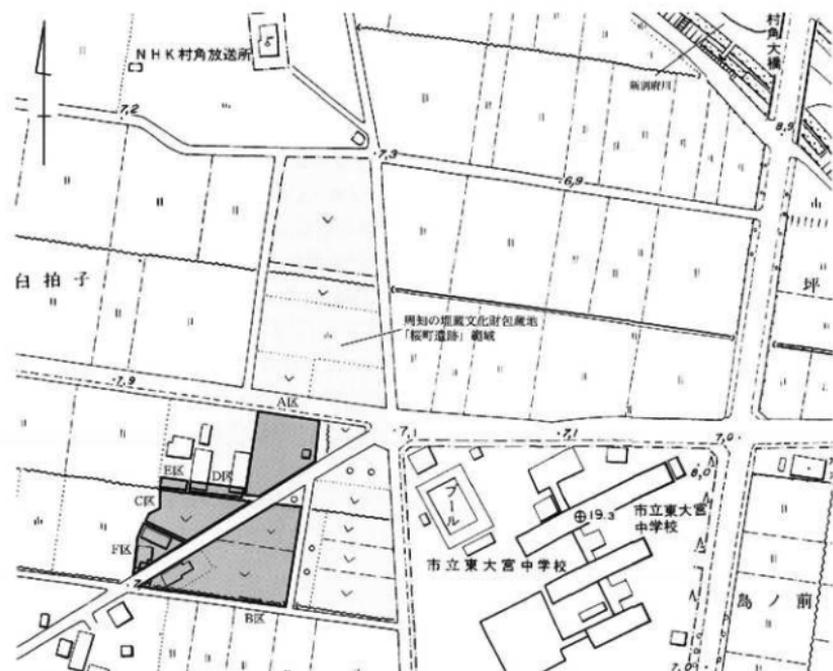
第1砂丘より東に0.8kmほどに位置する第2砂丘上の遺跡のうち、調査が行われているのは石神遺跡（宮崎市教育委員会 昭和46年度）、猿野遺跡（宮崎市教育委員会 平成7年度）お



第1図 桜町遺跡および周辺遺跡位置図 (Scale : 1/20000)

表1 周辺遺跡一覧(※番号は第1図に対応)

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	桜町遺跡	20	高下遺跡	39	水窪第2遺跡	58	長山遺跡
2	地蔵半田遺跡	21	元村遺跡	40	高野遺跡	59	村角第7・8号墳
3	村角第11号墳	22	中ノ原第2遺跡	41	半田中遺跡	60	萩崎第2遺跡
4	東大宮遺跡	23	大原第1遺跡	42	高嶺神社第10号墳	61	大島火切塚遺跡
5	本村遺跡	24	江良ノ上第6遺跡	43	赤兵衛畑第2遺跡	62	猿野遺跡
6	立野遺跡	25	江良ノ上第5遺跡	44	赤兵衛畑第1遺跡	63	前浜遺跡
7	大島第9号墳	26	下ノ原第1遺跡	45	山崎上ノ原第2遺跡	64	宮神遺跡
8	浮ノ城第2遺跡	27	下ノ原第2遺跡	46	山崎遺跡	65	中国遺跡
9	権現町遺跡	28	麓松第2遺跡	47	東原遺跡	66	平原第1遺跡
10	住吉村古墳	29	大原第2遺跡	48	吉十遺跡	67	平原第2遺跡
11	蓮ヶ池横穴墓群	30	麓松第1遺跡	49	山崎下ノ原第1遺跡	68	浮ノ城遺跡
12	丹後城址	31	大原第3遺跡	50	徳第5号墳	69	江田原第2遺跡
13	前田遺跡	32	産母遺跡	51	徳第6号墳	70	江田原第3遺跡
14	鳥居原第1遺跡	33	山崎上ノ原第1遺跡	52	徳第4号墳	71	江田原第1遺跡
15	鳥居原第2遺跡	34	麓松第3遺跡	53	先切遺跡	72	徳北小学校校庭遺跡
16	大久保遺跡	35	水窪第1遺跡	54	山崎下ノ原第2遺跡	73	城元遺跡
17	江良ノ上第4遺跡	36	飯畑第2遺跡	55	石神遺跡	74	中幸田遺跡
18	鳥居原第3遺跡	37	飯畑第3遺跡	56	松下遺跡	75	徳遺跡
19	中ノ原第1遺跡	38	飯畑第1遺跡	57	萩崎第1遺跡		



第2図 桜町遺跡調査区位置図 (Scale : 1/2500)

よび山崎上ノ原第2遺跡、山崎下ノ原第1遺跡（ともに宮崎県埋蔵文化財センター 平成13～15年度）の4箇所である。このうち、最も古い段階のものは、弥生時代中期前半の土器が検出された石神遺跡で、他に古墳時代の堅穴住居址を多数検出した猿野遺跡からも、遺構外から弥生時代中期前半の土器が出土している。山崎上ノ原第2遺跡、山崎下ノ原第1遺跡では埴古墳群に属する古墳の周溝や、金銅張製馬具を出土した馬埋葬土坑が検出されたほか、一辺が3.5mほどで、柱穴を持たない古代の堅穴住居址も検出されている。

また堤間低地を挟んで、第1砂丘の西側に位置する丘陵には、国指定史跡 蓮ヶ池横穴群と、同じく横穴墓である県指定史跡 住吉村古墳、さらに中世の山城である丹後城などが存在する。

以上のように海側の砂丘列上および内陸側の丘陵上には弥生時代から中世にかけての遺跡が多数存在し、いくつかは調査によってその様相が明らかとなっている。しかし前項に述べたとおり、桜町遺跡は内陸側の丘陵と海側の第1砂丘とに挟まれた堤間低地中に位置している。この低地一帯にはほとんど遺跡の存在が知られておらず、桜町遺跡を除けば、桜町遺跡の北方、約0.6kmに位置し、弥生時代ないし古墳時代の散布地として認識されている地藏牟田遺跡、およびこの地藏牟田遺跡中に所在する小円墳村角11号墳がほぼ唯一と言ってよい。

【参考文献】

- 福岡洋道・川原愛編 2002『江田原第3遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第50集 宮崎市教育委員会
- 鈴木重治・野間重孝編 1973『石神遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書 第1集 宮崎市教育委員会
- 早田 努 1997「序章 第1節 県内の地形と地質」『宮崎県史』通史編 原始・古代1 宮崎県
- 第29回九州古墳時代研究会実行委員会編 2003『宮崎半野の古墳と古墳群』第29回九州古墳時代研究会（宮崎県大会）資料集
- 中山豪・鳥枝誠編 1996『猿野遺跡・萩崎第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第30集 宮崎市教育委員会
- 南正覚雅士他編 2003『山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第79集 宮崎県埋蔵文化財センター

第II章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成12年11月24日、土地区画整理事業の実施にともない、宮崎市花ヶ島桜町土地区画整理組合設立準備委員会 [] より、宮崎市花ヶ島町字桜町における文化財所在の有無について、宮崎市教育委員会教育長あて照会がなされた。事業予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地「桜町遺跡」の一部が含まれていたため、市教育委員会では平成13年1月29・30日と平成15年8月5・6日の2回にわけて試掘調査を実施し、事業予定地の東半部において堅穴住居、溝状遺構、土器等を検出した。この結果を受け、市教育委員会では宮崎市花ヶ島桜町土地区画整理組合 [] との間に協議を重ね、現在、微高地として残る4,700㎡を対象とし、本調査を実施することとなった。

第2節 調査の対象

周知の埋蔵文化財包蔵地「桜町遺跡」は、現在、一帯が水田として利用されている標高6.5～7.5mの堤間低地中に存在する、標高8.0m前後の微高地全体をその範囲としている。この桜町遺跡の南半部が今回の事業対象地に含まれているが、事前の試掘調査の結果、対象地に含まれる遺跡南半部の東半部分においては削平により既に文化財の存在していないこと、および事業対象地内において、包蔵地として認識されている範囲外においては文化財の存在しないことが確認されたため、現地における本発掘調査は周知の埋蔵文化財包蔵地「桜町遺跡」の南西部（包蔵地として認識されている範囲のうちの約3分の1）を対象として実施した。

第3節 調査の経過

現地における発掘調査は、区画整理事業における工程との兼ね合いもあり、平成15年度（1次調査）、平成16・17年度（2次調査）の2回に分けて実施した。1次調査は平成16年1月21日から同年3月19日まで、調査対象地の北東部1,500㎡で実施し、2次調査は平成16年6月22日から翌平成17年5月31日まで、調査対象地の残り部分、3,200㎡で実施した。現地調査中は調査対象範囲を6つの調査区に分け、調査実施順にA～F区の呼称を与えた（1次調査：A区、2次調査：B～F区）。各調査区の調査面積はA区1,012㎡、B区1,998㎡、C区661㎡、D区141㎡、E区77㎡、F区250㎡で、調査対象範囲全体での発掘調査総面積は4,139㎡である。

また現地調査終了後の整理作業は、平成17年4月19日から同年12月13日まで実施した。

第三章 調査成果

第1節 調査成果の概略

調査区全体で、周溝状遺構 13 基、土坑 47 基、堅穴住居 1 軒、掘立柱建物 9 棟、溝状遺構 19 条を検出した。

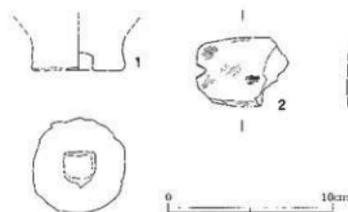
遺構は、調査区西端においては分布がやや希薄ではあるものの、調査区のほぼ全面にわたって検出されている。遺構および遺物は、弥生時代に属するものと古代に属するものに大別でき、他に中世の土坑 1 基、および近世の溝状遺構も存在する。弥生時代の周溝状遺構に関しては、調査区東端における分布の偏重が顕著であり、また近世の溝状遺構に関しては調査区の全面にわたって、ほぼ等間隔に並列しているが、他の遺構に関しては分布の偏重等の目立った傾向は看取できない。

a. 基本層序

基本層序は、I 層表土、II 層暗灰色砂、III 層黄褐色土、IV 層黒褐色土、V 層黒褐色土、VI 層暗灰色土、VII 層暗黄褐色土、VIII 層灰色砂、IX 層明黄褐色粘土、X 層灰白色砂である。I～III 層までは表土および客土で約 30 cm の堆積、5 cm ほどの堆積である IV 層は霧島高原スコリア火山灰（10～13 世紀降灰 霧島火山起源）を含有している（第四章 第1節 参照）。V・VI 層は遺物包含層であり、直下の地山に検出される遺構の埋土もまた、黒褐色土ないし暗灰色土であることが多い。遺物包含層（V・VI 層）の堆積は約 30 cm であるが、削平や旧来の地形等（次項詳述）により、遺物包含層以上（I～VI 層）においては、堆積の状況が一定ではなく、VI 層以上の存在しない場所もある。包含層直下に 10 cm 堆積する VII 層は遺構検出面であり、地山最上層である。地山の堆積は VIII 層が 20 cm、IX 層が 40 cm で、X 層以下は未掘である。

b. 遺物包含層（第3・5図）

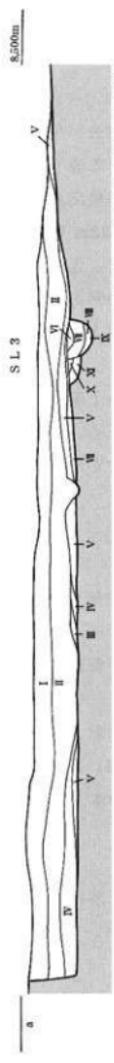
先述のとおり、調査区内においては遺物包含層の堆積があるが、削平等により、包含層の残存していない箇所もある。包含層が残存せず、表土直下が地山となっている部分は、調査区の中央を南北に縦断する、東西幅 50m ほどのベルト状に存在し、包含層は、このベルト状の部分を除く調査区の東側（調査区東壁から 15m ほどの範囲）で最大 35 cm、西側（調査区西壁から 20m ほどの範囲）において最大 50 cm の堆積が確認できる（ただし、D 区および F 区では、局部的に削平が深くまで及んでおり、包含層の堆積は確認できない）。なお、弥生時代および古代



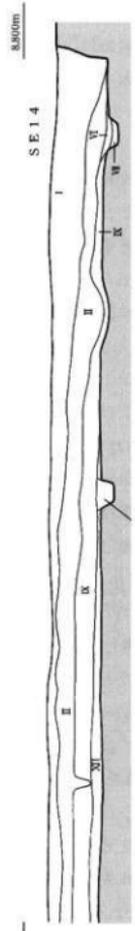
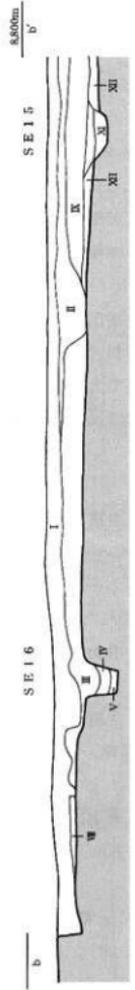
第3図 包含層出土遺物 (Scale : 1/3)



第4図 遺構配置図 (Scale : 1/300)



I層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 II層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 III層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 IV層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 V層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 VI層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。



礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 II層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 III層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 IV層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 V層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 VI層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 VII層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 VIII層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 IX層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 X層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 XI層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。
 XII層 礫層 礫がかなり多量に含まれ、やがた性があり、やわらかい。



第5図 遺物包含層セクション図 (Scale : 1/60)

の遺構は包含層の下に、近世の遺構は包含層の上に検出される。

包含層中に含まれる遺物は、弥生時代の土器、石器から、古代の土師器、陶磁器、須恵器まで幅広く、出土量も膨大であった。第3図は、その中から図化した2点である。1は甕の底部かと思われる。底面に方形のくぼみが設けられているが、用途等は不明である。2は石庖丁で、両端に抉りが入る。

c. 調査区の旧地形 (第5図)

第5図はB区の北端と、C区の南端における地山以上の土層断面図で、中央部分が欠けはするものの、調査区全体を東西に横断した地形を示すものである。これに現れている通り、調査区内における地山の検出レベルは一定ではない。調査区東側、西側ともに地山の検出面に傾斜があり、東側においては図化した約11mの範囲内で35cm、西側においては約22mの範囲で30cmの落差が生じている。前項に述べたとおり、調査区の中央を南北に縦断して、包含層の確認できない部分があるが、これは調査区東側および西側における地山検出面の傾斜から、この部分はより高く地山および遺物包含層が堆積しており、そのために遺物包含層および地山上面が削平を受けたと考えられる。

以上、包含層の残存状況および地山の検出レベルより、調査区の旧地形(地山上面)は、南北を縦断するラインを最高点とし、西側および東側に落ちていたものと考えられる。なお、地山上面の傾斜角は、調査区の東側と西側で大きく異なっており、西側ではゆるやかに落ちていくのに対し、東側では6mほどの範囲で35cmの落差がついている。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に属するものとしては周溝状遺構13基、土坑31基、および各遺構に伴う遺物、ピット中より出土した遺物がある。

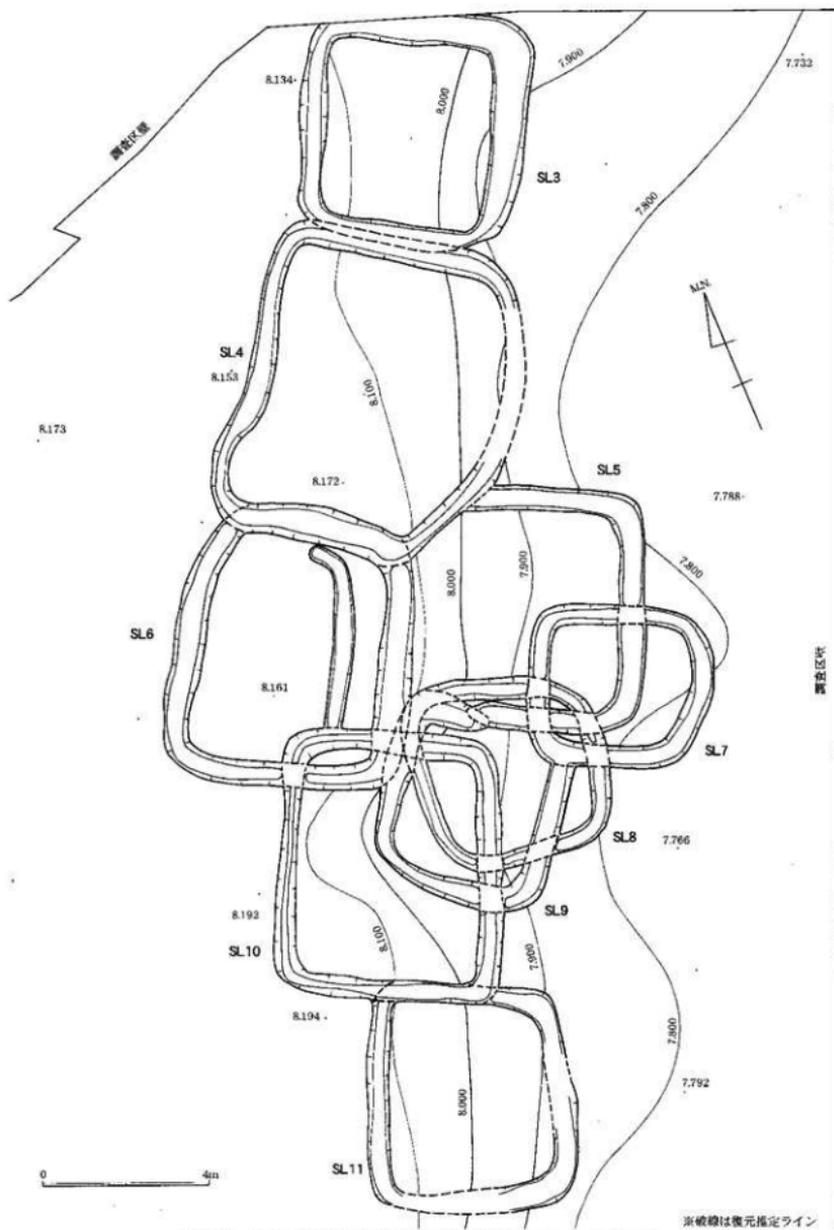
遺構の分布状況としては、前節に述べたとおり、周溝状遺構の調査区東端への偏重が顕著であり、土坑に関しては調査区のほぼ全面にわたって検出されている。

以下、遺構の構造および各遺構に伴う遺物に関して、遺構ごとに詳述する。なお土器の時期比定に関しては、石川悦男氏による宮崎県地域の弥生時代土器編年(石川 1984)と松永幸寿氏による宮崎県地域の弥生時代後期から古墳時代中期を対象とした土器編年(松永 2004)を参考とし、文章中ではそれぞれ石川編年〇期、松永編年〇期と表記している。

a. 周溝状遺構(SL)

今回の調査において検出された周溝状遺構は13基である。SL1~12の12基は、調査区東端において、南北一列に連なって検出され、SL13は調査区南側の中ほどにおいて、1基のみ孤立して存在する。

周溝部によって形作られる平面プランは、隅丸の正方形ないし長方形を呈するもの(SL3・SL6・SL10・SL11・SL12・SL13)、方形になりきれない方円折衷形のもの(SL1・SL7・SL8)、不整形のもの(SL4)、単体では周溝部が完周せず、他の周溝状遺構に「付け足し」で構築されているように見受けられるもの(SL5・SL9)の4種に大別



第6図 周溝状遺構集中検出箇所平面実測図 (Scale : 1/120)

できる。なお、円形プランに分類できるものは検出されていない。

またコーナー部ないし辺の途中において、「周」溝ではない、短い溝が付け足されているものも存在する（SL10・SL12・SL13）。これら増築された溝は、直線的に延びたのち、カーブを描き始めた地点において収束することに共通性がある。

規模としては外周の軸長（長軸）が4.5～6.5mのものが過半数を占め（SL1・SL3・SL5・SL8・SL9・SL11・SL13）、それ以外に軸長4.5m未満のやや小型のもの（SL7）と、6.5m以上のやや大型のもの（SL4・SL6・SL10・SL12）がある。またSL9以外はほぼ北-南、東-西に軸を持つ。

いずれの周溝状遺構においても、その外縁部、内郭部に多数のピットが検出されている。ただし確実に周溝状遺構に伴うと判別できるものはなく、また内郭部において明確な規格を持つピット群も見出せない。

周溝状遺構群からの出土遺物は、甕、壺、深鉢、浅鉢、高坏、器台など弥生土器のひとつとおりが揃うが、総じて高坏の出土量はあまり多くはない。特記的な事項としては、SL3、SL4における浅鉢の偏重、SL3、SL12における器台の出土、SL5、SL11における胴部径40cm前後の大型壺の出土、SL6における胴部径3cm程度の超小型土器の出土、SL8における柄杓形土製品の出土、SL10における石庖丁の出土、SL10とSL11における同一個体の出土などが挙げられる。

出土遺物より時期を比定すると、弥生時代後期中葉から庄内1式並行段階にかけてのものが多い。またほとんどの周溝状遺構においては、同一遺構内出土の遺物においても時期差を持って存在しており、各周溝状遺構がある程度の長期間にわたって存続していたことをうかがわせる。またこれに関連して、重複箇所を持つ周溝状遺構同士においては、遺構埋土上部において、埋土の共有の見られることが土層観察により確認された。これにより、隣接する周溝状遺構において、併存して使用された期間のあったことが考えられる。

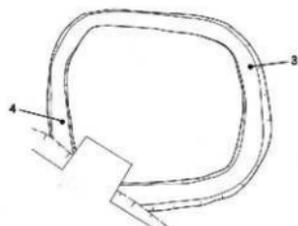
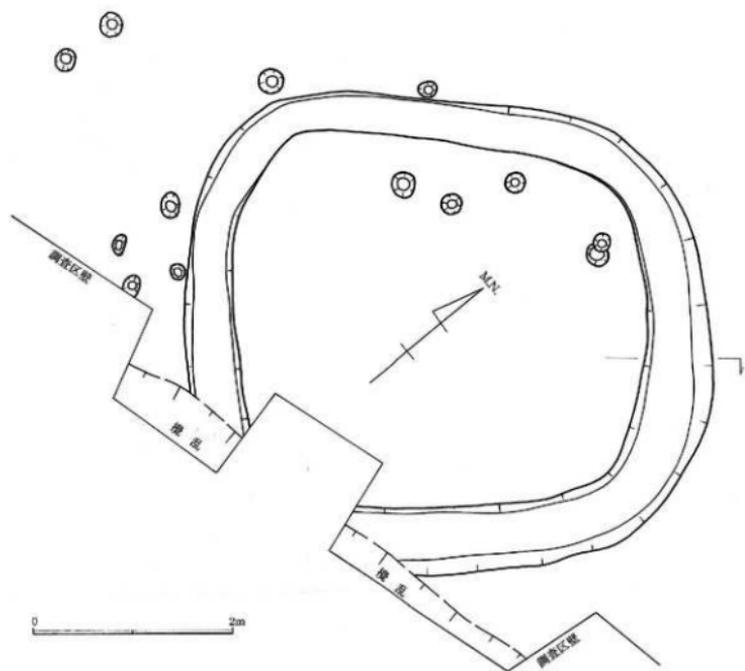
また平面形から、SL4、SL5、SL9などは、離れて存在する2基の周溝状遺構の間を埋めるように、あるいは既存する周溝状遺構の周溝部途上から派生するなど、他の周溝状遺構の存在を前提として構築されたことがうかがえる。

なお、以下に詳述する各周溝状遺構の周溝部幅の計測においては、値が変則的となるコーナー部分は除いている。

【A区】

SL1（1号周溝状遺構）（第7・8図）

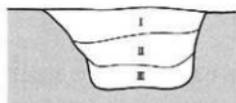
調査区東端、やや北よりの地点（A区南西端）において検出された周溝状遺構で、南北に縦列した周溝状遺構群の中では最北端に位置する。平面形は、各辺が緩い弧状のややいびつな正方形で、南西コーナー部は攪乱によって切られる。周溝外縁を含めた規模は東西軸5.3m、南北軸4.9m、内郭部の規模は東西軸4.2m、南北軸3.8mである。周溝部の断面形は台形状で、上端の幅は0.4～0.8mと一定ではないが、本遺構上の西西部には遺物包含層が堆積していないため、遺構上部が削平を受けたことに起因するものと思われる。



※数字は遺物番号に対応

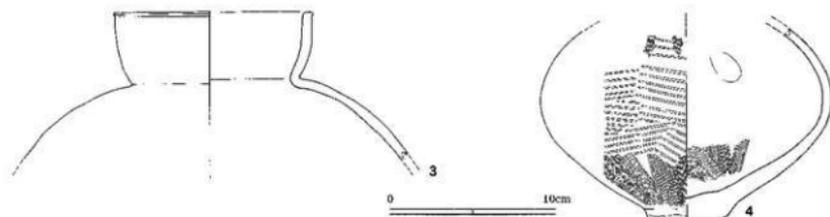
8.500m

8.500m



I層	灰褐色砂質土	やわらかい
II層	灰褐色砂質土	Iに近似するが、灰色、灰色のブロックを多量に含有
III層	結核色土	橙色ブロックを多量に含有

第7図 SL1平面実測図 (Scale: 1/50)、遺物出土位置図 (Scale: 1/120)、セクション図 (Scale: 1/20)



第8図 SL1出土遺物 (Scale: 1/3)

遺物は遺構上部より入るが、ほとんどは細片で、量も少ない。図示した2点は周溝部底面より出土したものである。3は単口縁壺の口縁部および肩部である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は外側につまみ出される。調整は摩滅により不明である。九州北東部（大分県地域）に分布の中心を持つ「安国寺式」の長胴壺と思われる。4は広口壺ないし長頸壺の胴部である。中程に張りがある扁球形の胴部で、底部は平底である。外面調整は胴部のほぼ全面にタタキを施したのち、肩部および胴下部においてはハケ調整が行われている。内面は全面ハケののち、胴下部以外ではナデが施されている。

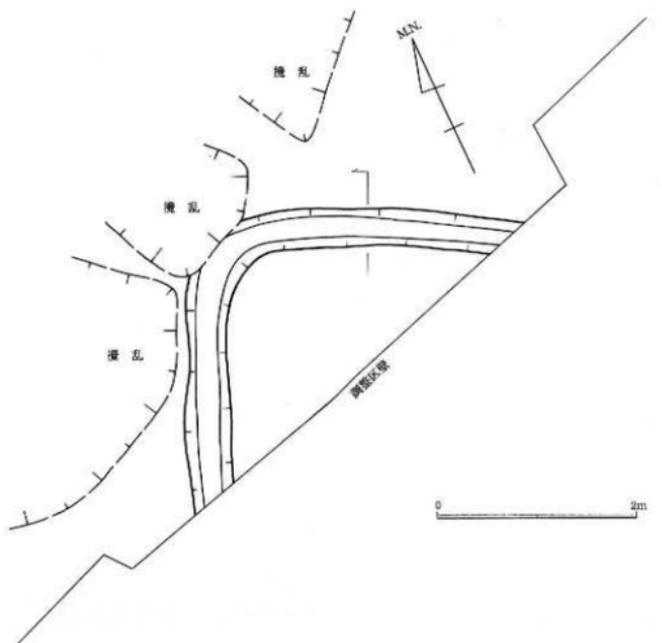
「安国寺式」壺の3は内面の口縁部と肩部の境に明瞭な稜が入り、弥生時代後期後葉に位置づけられる。周溝部底面出土であり、遺構構築に近い時期のものと評価できる。

なお本遺構では、遺構内埋土のうち、最下層であるⅢ層の土をすべて持ち帰り、フローテーション（水洗選別）法分析を行った。しかし土器細片、木炭状のかけら等は多数得られたものの、イネなどの植物遺存体の検出はなかった。

SL2（2号周溝状遺構）（第9・10図）

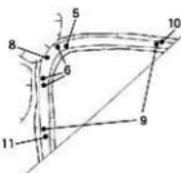
調査区東端、中ほど（A区南端）において検出された周溝状遺構で、南北に縦列する周溝状遺構群の中では北西端に位置する。大半は調査区外に出、検出されたのは北西コーナー部とそれに続く2辺である。検出されたコーナー部はほぼ直角に近いため、おそらくは正方形に近い平面形を持つものと思われる。周溝部の断面形は幅の狭い台形状で、上端の幅は0.4～0.5mである。なお本遺構上にも遺物包含層の堆積はなく、遺構上部は多かれ少なかれ削平を受けているものと思われる。

遺構はごく一部しか検出できなかったのに反し、遺物の出土量は多い。5は甕の口縁部および胴部上半である。口縁部の屈曲は緩いが、内面には明瞭な稜が入る。外面、内面ともにハケが施され、内面においては胴部中程から下は、ハケの上からナデが施される。6はほぼ完形の小型の甕である。平底で、胴部は球体に近く、口縁端部の面形成もなされている。外面調整はミガキ、内面調整はハケののちナデである。若干のゆがみがあるものの、全体的に作りは丁寧であり、器形からは甕に分類されるものの、底部や口縁部の作り、調整などの共通性から、浅鉢の亜系として位置づけられるものかと思われる。7は完形の小型土器である。甕を模したものかと思受けられるが、厳密に合致する器形はない。上げ底であるが、強いて言えば弥生時代

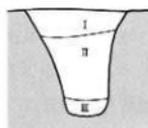


8,500m

8,500m



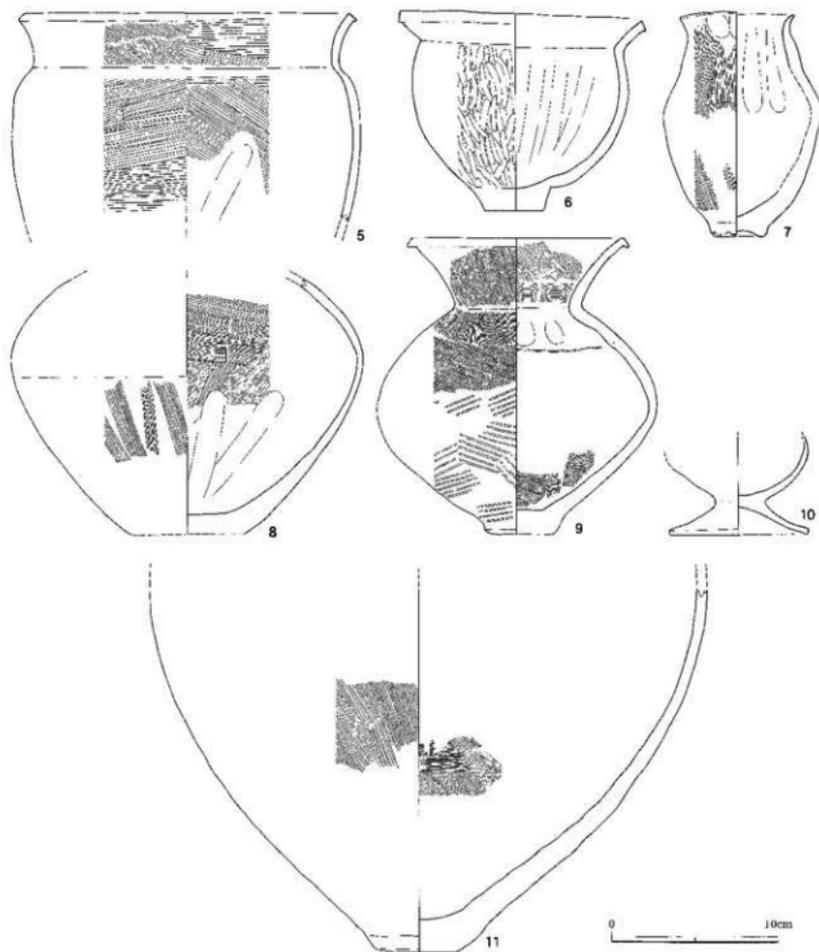
※数字は遺物番号に対応



- | | | |
|------|---------|--------------------|
| I層 | 暗赤褐色砂質土 | 硬くしまる。白色、褐色の砂子を含有 |
| II層 | 暗褐色土 | 硬くしまる。褐色のブロックを含有 |
| III層 | 暗褐色土 | IIに近似するが、褐色粒を多量に含有 |

第9図 SL2平面実測図 (Scale : 1/50)、遺物出土位置図 (Scale : 1/120)、セクション図 (Scale : 1/20)

前期の甕に近い形状ではある。外面は全面ハケ、内面は指ナデによる。8は壺の胴部であり、口縁部および底部を欠損する。外面調整はハケののちナデ、内面調整もまたハケののち胴下半においてはナデを施している。9は広口壺で、口縁部を一部欠損する以外は完形である。単口縁で、胴部は中程に張りを持って算盤玉状になり、底部は平底である。外面の胴部下半にはタタキが施され、そののち胴部上半および口縁部にハケ調整が施される。内面口縁部および胴下部にもハケが施されているが、口縁部内面においては他の箇所と異なる、条線がやや幅広な原体が用いられている。10は脚を持つ小型土器である。鉢を模したものかと思うが、判然としない。器壁は極めて薄く、調整は摩擦により不明である。11は大型の壺の胴部下半および底部



第10図 SL2出土遺物 (Scale : 1/3)

である。調整は内外面ともにハケのちナデである。

壘5は口縁屈曲部内面における稜が明瞭であること、口唇部の面形成が行われていることから松永編年1・2期（弥生時代後期中葉～後葉）に比定される。

なお本遺構では、遺構内埋土のうちⅡ・Ⅲ層においてフローテーション（水洗選別）法分析を行った。しかしSL1同様、イネなどの植物遺存体の検出はなかった。

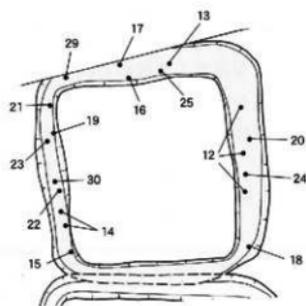
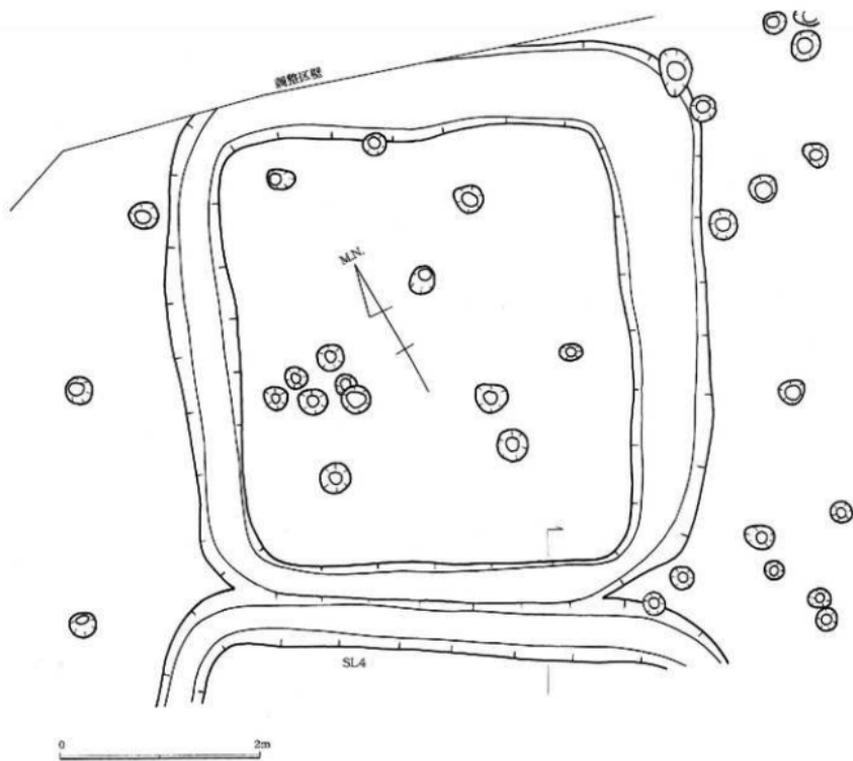
【B区】

SL3（3号周溝状遺構）（第11～13図）

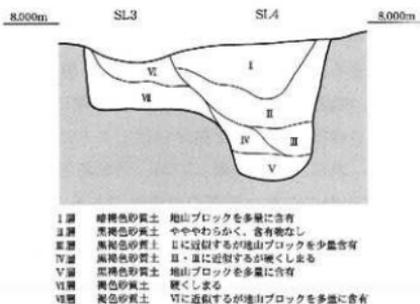
調査区東端、中ほど（B区北東端）において検出された周溝状遺構で、北辺の一部は調査区外へと出る。南に隣接するSL4と南辺が重複しており、土層断面を確認することで、SL4に先行することが確認された。

平面形は正方形に近いが、周溝部上端の幅が0.5～0.9m（SL4との重複部分は除く）と一定しておらず、ややびつな印象を受ける。本遺構上の西半部には遺物包含層の堆積がなく、遺構上部は多少なりとも削平を受けている可能性があるが、周溝部底面の幅も一定しておらず、遺構構築の当初から、周溝部幅は一定ではなかったと考えられる。周溝部外縁を含めた規模は東西軸5.5m、内郭部の規模は東西軸4.0m、南北軸4.4m、周溝部の断面形は台形状である。

12は壘の口縁部および胴部である。胴部外面の調整はタタキ、口縁部外面および内面の調整はハケである。外面には部分的に煤が付着する。13は壘である。底部を欠損するが、それ以外はほぼ完形に近い。摩滅が激しいが、内面、外面ともにハケ調整の痕跡が残る。14は壘である。外面胴部には溝幅のやや広いタタキ、口縁部にはナデが、内面胴部上半にはハケ、下半には指ナデが施される。外面の胴部中程に煤が付着する。15は壘である。内面調整は全面ハケ、外面調整はハケのちナデであるが、口縁部においてはハケをナデ消さず、そのまま残してある。16は小型の壘の口縁部および胴部である。口縁の屈曲部内面においては、明瞭な稜が立つ。外面調整、内面調整ともに目の細かなハケであり、口縁部においても、ハケメがナデ消された痕跡はない。17は壘の底部である。脚台状になっており、底面はやや上げ底気味である。外面調整はハケのちナデ、内面調整はナデである。内面に赤色顔料が付着する。18は浅鉢である。外面にはミガキが施される。また、内面には基本的にナデが施されているが、一部ミガキも確認できる。19は浅鉢である。やや小型で、口唇部は平坦に整えられている。外面の調整はミガキ、内面はナデである。20は周溝部東辺、北東コーナー部近くの底面より検出された浅鉢である。口縁部に粘土帯を貼り付けることによって肥厚させ、平底の底部もしっかりと作り込んでいる。表面は摩滅が激しいが、内外面ともにミガキとナデを用いて丁寧に仕上げられている。21は小型の二重口縁壘の口縁部である。表面の摩滅が激しいが、第1口縁部分にはハケの痕跡が残る。上記の理由により、第2口縁の部分における文様の有無は判然としなない。22は直口壘である。残存状況はあまり良くはないが、全形を復元するには不足ない。口縁端部は若干肥厚している。胴部外面にはミガキ、口縁部にはハケおよびナデを施す。内面においてはナデが主体ではあるが、口縁部および頸部においてはミガキが施される。23は直口壘である。外面にはミガキが施され、口縁部内面はハケの痕跡が残る。胴部内面の調整については摩滅が激しく、

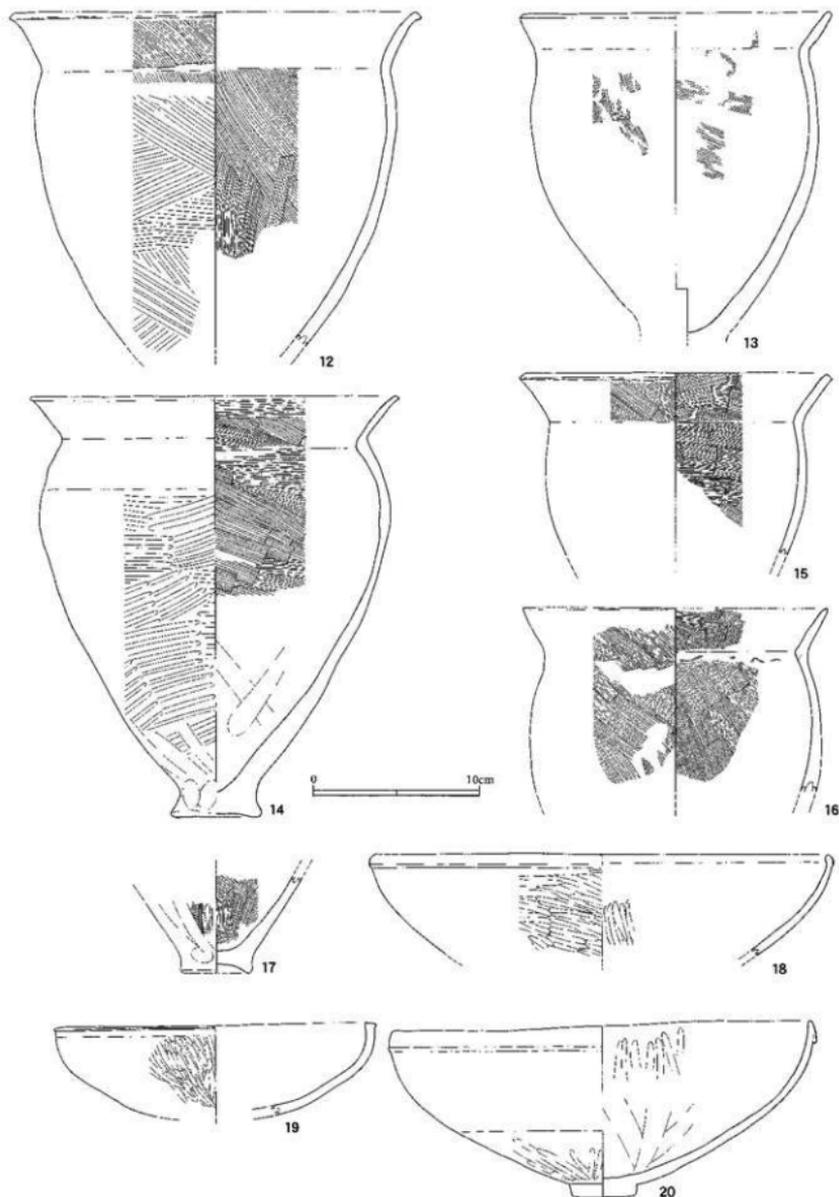


※数字は遺物番号に対応

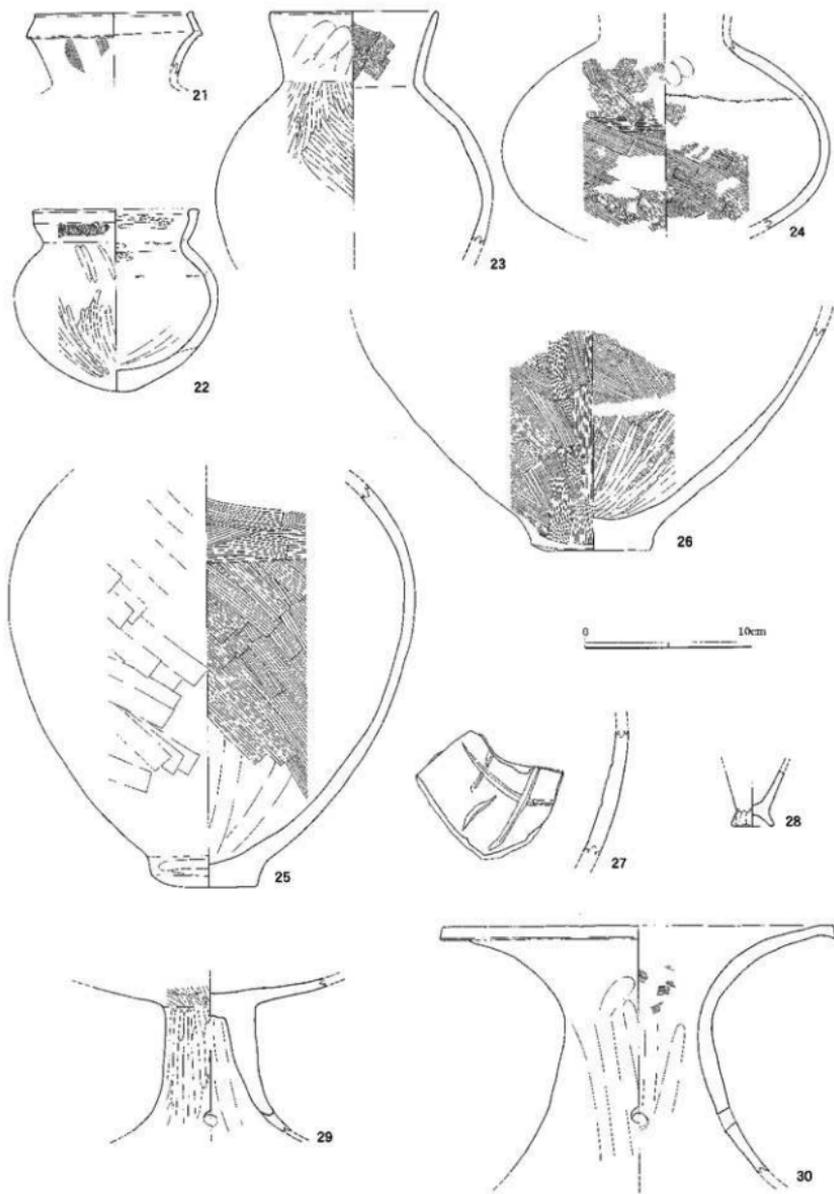


- | | | |
|------|--------|----------------------|
| I層 | 暗褐色砂質土 | 地山ブロックを多量に含有 |
| II層 | 灰褐色砂質土 | やややわらかく、含有物なし |
| III層 | 黒褐色砂質土 | IIに近似するが地山ブロックを少量含有 |
| IV層 | 黒褐色砂質土 | III・IVに近似するが硬くしまる |
| V層 | 黒褐色砂質土 | 地山ブロックを多量に含有 |
| VI層 | 褐色砂質土 | 硬くしまる |
| VII層 | 褐色砂質土 | VIに近似するが地山ブロックを多量に含有 |

第11図 SL3平面実測図 (Scale: 1/50)、遺物出土位置図 (Scale: 1/120)、SL3・4セクション図 (Scale: 1/20)



第12図 SL3出土遺物① (Scale : 1/3)



第13圖 SL3出土遺物② (Scale : 1/3)

判然としない。24 は長頸壺の胴部である。胴部最大径（復原）19.9 cm、内面、外面ともにハケ調整である。25 は壺である。口縁部を欠損しているので、厳密な器形はわからないが、明瞭な平底を持つ。外面は板状工具によるナデ、内面はハケ調整を施す。26 は大型の壺の胴部下半および底部である。平底で、外面調整はハケ、内面調整はハケの上からミガキである。27 は壺と思しき胴部の破片である。内面には幅広の工具によって、なんらかの文様が線刻されている。28 は極小サイズの土器である。形状的に深鉢を模したものかと思われる。摩滅が激しく、内面、外面ともに調整は判然としない。29 は高坏の脚柱部および口縁部の一部である。現状で三方向に円形の透かし孔が確認できるが、その配置より、四方向に透かし孔の穿孔されていたことがわかる。外面の調整はミガキ、口縁部内面はナデである。30 は器台である。円形の透かし孔が二方向に穿孔される。口縁部内面においてはハケ調整の痕跡がわずかに残り、それ以外はナデ調整による。外面においては特に丁寧なナデが施されている。

14 は口縁部～底部の揃う甕で、時期判定には理想的であり、松永編年2期（弥生時代後期後葉）に比定される。底部を欠損する甕（12・13・16）については松永編年2・3期（弥生時代後期後葉～庄内1式併行）の範疇に収まるものと思われるが、15 に関しては口縁部屈曲の度合いが明瞭で、松永編年1・2期（弥生時代後期中葉～後葉）に相当すると思われる。甕の底部である17 は明確な上げ底で、松永編年1期（弥生時代後期中葉）に比定される。二重口縁壺21 は第2口縁の内傾度が高く、松永編年1・2期に相当する。長頸壺の25 は最大径が胴部上半にあり、弥生時代後期前葉～中葉の枠内に収まるものと思われる。

以上のように、本遺構出土の遺物には、若干の時期差が存在しているようであり、遺構の使用期間が長かったことをうかがわせる。

なお確認する術もないが、検出された他の周溝状遺構のあり方を見ると、調査区外となるSL3の北方において、SL3に連結する周溝状遺構の存在した可能性もある。

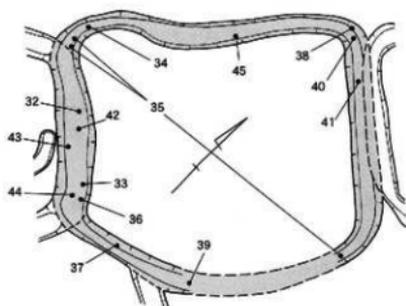
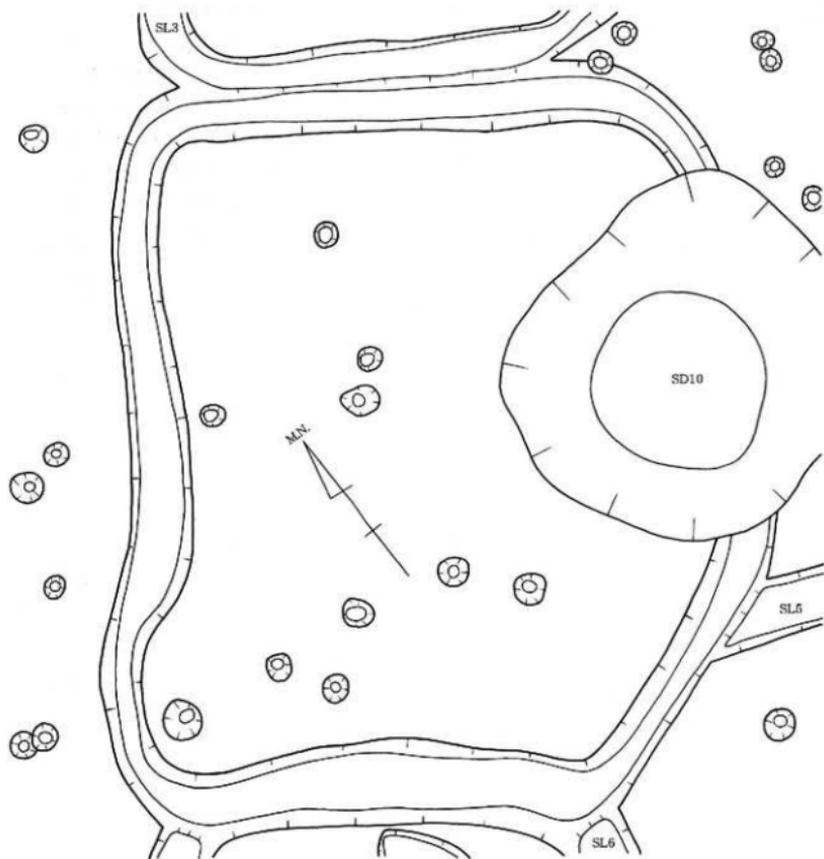
SL4（4号周溝状遺構）（第14～16図）

調査区東端、中ほど（B区北東部）において検出された周溝状遺構で、一部を近世の溝SE6および古代の土坑SD10に切られる。方形、円形いずれの範疇にも含まれない複雑な平面形を持ち、北辺、南辺はほぼ直線的であるものの、東辺は外方に大きく弧を描き、西辺は南西コーナー近くで外方への膨らみを持つ。

北辺がSL3と、南辺がSL6と重複し、南東コーナー近くでSL5が連結する。各重複、連結部分の土層観察より遺構間の先後関係を検討すると、SL4はSL3・SL6に後出し、SL5に先行する。ただし、先述のSL3との重複部分においては堆積の上面から底面まで切り合い関係が明瞭であったのに対し、SL5との連結部分、SL6との重複部分においては、それぞれ最上層のI層を両遺構間で共有している。

周溝外縁を含む規模は東西辺6.6m、内郭部の規模は東西辺5.4m（一部をSD10に切られるため、推定値）、南北辺6.2m、周溝部の断面形は台形状で、検出面における幅は0.4～0.6m（SL3・SL6との重複部分は除く）である。

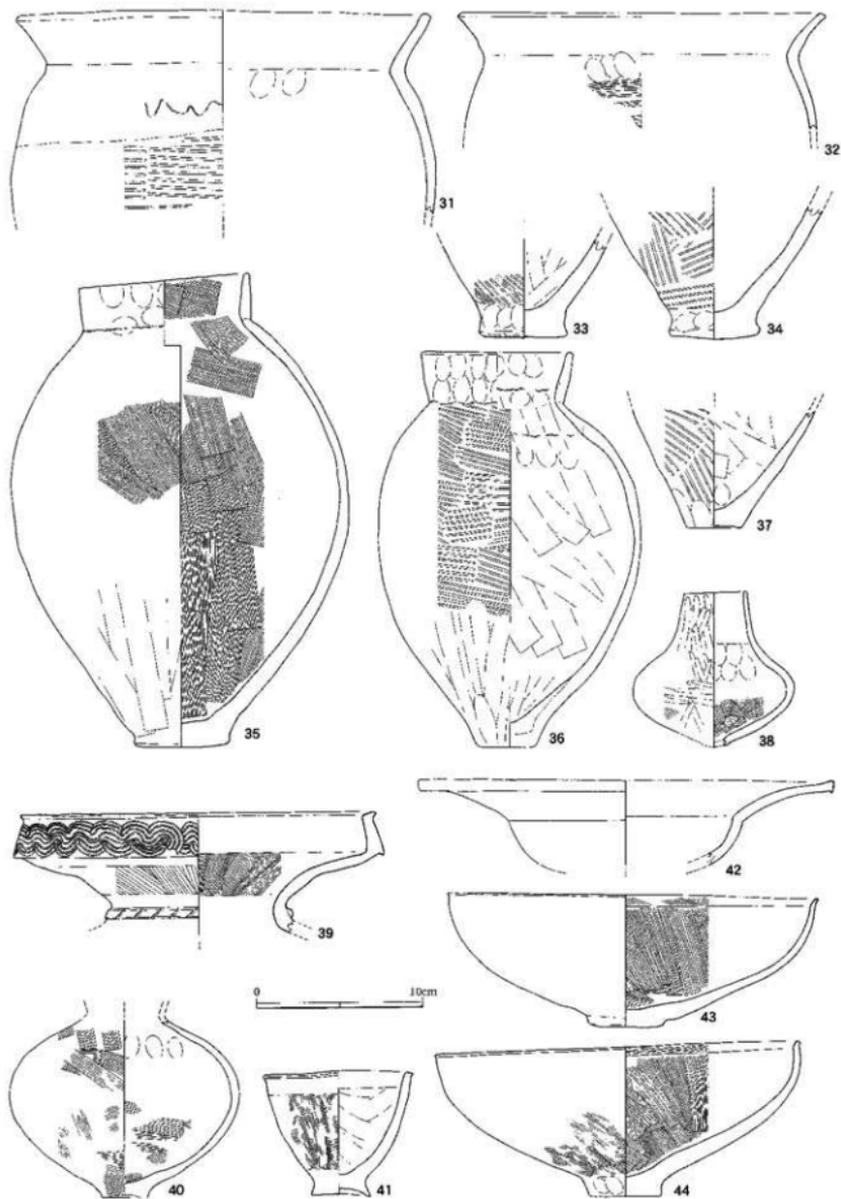
31 は甕の口縁部および胴部である。外面胴部はタタキ、外面口縁部および内面にはナデが施



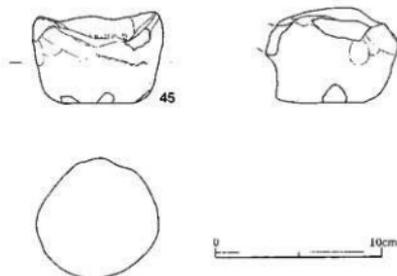
0 2m

※数字は遺物番号に対応

第14図 SL4平面実測図 (Scale : 1/50)、遺物出土位置図 (Scale : 1/120)



第15圖 SL4出土遺物① (Scale : 1/3)



第16図 SL4出土遺物② (Scale: 1/3)

される。また、外面にはナデに伴う粘土の「ダレ」が見られる。32は甕の口縁部である。残存状況は良くなく、表面の摩滅も激しいが、胴部外面にはタタキの施されていることが見てとれる。33は甕の底部である。残存部位の外面においては、底面をのぞく全面にタタキが施されており、底部付近においては、タタキを施した後に、指オサエが施されている。34は甕の底部である。外面は全面にタタキが縦横に施される。35は短頸壺で、口縁部の一部を欠損する以外は完形である。倒卵形の胴部に平底を持ち、口縁部はほぼ垂直に近く立ち上がる。外面は若干摩滅しているが、口縁部に指オサエ、胴部上半に目の細かいハケ、胴部下半に板状工具によるナデが残る。内面には全面にわたってハケが残る。36は短頸壺である。一部、口縁部を欠損するが、完形に近い残存状況である。倒卵形の胴部に若干内湾気味の短い口縁部がつく。口縁部と底部を除く外面全面にタタキが施され、内面は指オサエ、指ナデ、板状工具によるナデによって調整される。口縁部外面に一部、赤色顔料のようなものがあるが、断定はできない。37は長胴壺の底部である。やや上げ底気味で、外面にはタタキが施される。38は精製の小型長頸壺である。底の一部を欠損するもののほぼ完形で、外面には焼成時の黒斑が残る。外面はハケのちミガキによって平滑に仕上げられる。39は二重口縁壺の口縁部である。第2口縁外面には波状文が、頸部には刻みを施した突帯が巡る。第2口縁の波状文は、文様の一単位、一単位における切り合い関係が明瞭に残り、施文が向かって左から右の方向へと、順次行われたことが容易に伺える。また各円弧のほぼ中央が深く抉れているが、施文時の支点となった結果と思われる。40は小型の壺の胴部である。口縁部を完全に欠損するため、正確な器形は判然としないが、胴部形態から類例を探すと、長頸壺ではないかと思われる。底部は多くを欠損するが、残存部分より、若干上げ底気味の形状であると判断される。表面の摩滅が激しいが、外面の調整はハケのちの一部ナデ、内面も同じくハケのちのちにナデを施しているものと思われる。41は完形の深鉢である。器高8.5cmと小型で、外面の調整はハケのちの全面的にナデ、内面はナデである。42は長めの口縁を持った小型の浅鉢である。摩滅が激しく、調整は確認できない。43は完形の浅鉢である。口唇部が若干外側に飛び出すが、直口口縁の範疇に含まれる。外面の調整は全面ナデ、内面は目の細かなハケを斜めに施し、口縁部においては横位に近いナメハケを施す。44は浅鉢である。口縁部、胴部の一部を欠損するが、完形に近い。43と同じく口唇端部が若

干外側に飛び出す、直口口縁である。外面調整はハケののちナデ、内面はハケである。口径、底径等の量や形状、調整の手法等、43に酷似する。また調整に用いられたハケ原体も共通すると見受けられ(ともに11条/cm)、同一の工人の手によるものである可能性が高い。45は用途不明の土製品である。一部を欠損するが、ほぼ完形と思われる。形状はいびつな円柱状で、底面は平坦に整えられているが、上面にはくぼみが設けられている。おもにナデ、オサエによって仕上げられているが、一部上面にはハケともしき痕跡が残る。土器等の焼成時に「トチン」や「チャツ」のように用いたものか、あるいは煮沸時に器の支持台として用いた「支脚」のようなものと思われるが、使用に伴う被熱の痕跡や煤の付着等も見られず、断定はできない。

出土遺物のうち、時期判別の資料となりうるものを列挙すると、甕の口縁部である31・32はともに松永編年2・3期(弥生時代後期後葉～庄内1式並行)に比定される。甕の底部33・34はともに平底であり、松永編年3期(庄内1式並行)以降、長嗣の短頸壺35・36は最大径が胴部中程まで下がってきており、松永編年2期(弥生時代後期後葉)以降、二重口縁壺の口縁部である39は第2口縁部の内傾度があまり大きくはなく、松永編年2期以降となる。これらを総合すると、本遺構は庄内1式併行段階ということになる。ただし本遺構からは浅鉢が出土しているが、現状では、当遺跡の存在する地域では松永編年2期(弥生時代後期後葉)まで浅鉢は消滅するとされており(松永 2004)、矛盾が生じる。加えて、前述のSL3においては同一遺構内出土の遺物に時期差が存在し、遺構の存続期間が比較的長期にわたる可能性のあることを考えれば、当遺構出土の遺物においても時期差の存在する可能性を考慮しておく必要がある。

SL5(5号周溝状遺構) (第17・18図)

調査区東端、中ほど(B区北東部)において検出された周溝状遺構である。その平面形は極めて特異で、前述のSL4の東辺、南東コーナー部近くより始まって、直線に近い北辺、直角に近く曲がる北東コーナー部を経、再び直線に近い東辺、直角に近い南東コーナー部を経たのち、南辺途上において収束する。コの字形とでも表現すべき平面形ではあるが、辺の一部に陸橋部のような箇所を設けた、全周しない周溝状遺構とは様相が異なり、周辺のSL4、SL6、SL9の周溝を「利用」することで、溝によって隔された内郭部が形成されている。

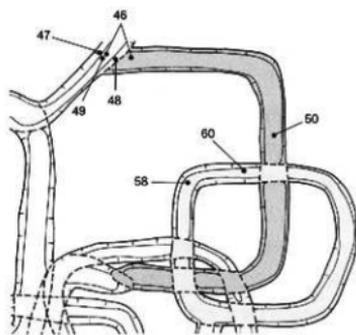
周溝外縁を含む規模は南北軸6.0m、内郭部の規模は東西軸4.9m、南北軸4.8m、周溝部の断面形状は台形で、検出面における幅は0.5～0.7mである。

46は小型の壺である。口唇部はいわゆるT字状に近く成形されており、調整は内面、外面ともにナデである。器壁が薄く、各部に明瞭な稜が立ち、きわめてシャープな印象を受ける。47は小型甕の完形品である。球形胴に直線的な口縁部が付き、中型の甕に見られる形式の小型品かと思われるが、作りは粗雑で、全体的にゆがみも生じている。内面、外面ともに調整はナデによる。48は小型の浅鉢である。口縁部はほとんど残っていないが、残存部位より強く外反する器形であることが知れる。調整は外面、内面ともにミガキによる。49は小型の浅鉢で、完形ではないが、口縁部から底部まで残る。明瞭な底部と、大きく内湾する口縁部を持ち、厳密に浅鉢に分類していいものか疑問が残るが、他に該当する器種もないため、浅鉢としておく。



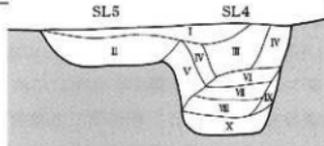
0 2m

※SL.7セクション図は第22図



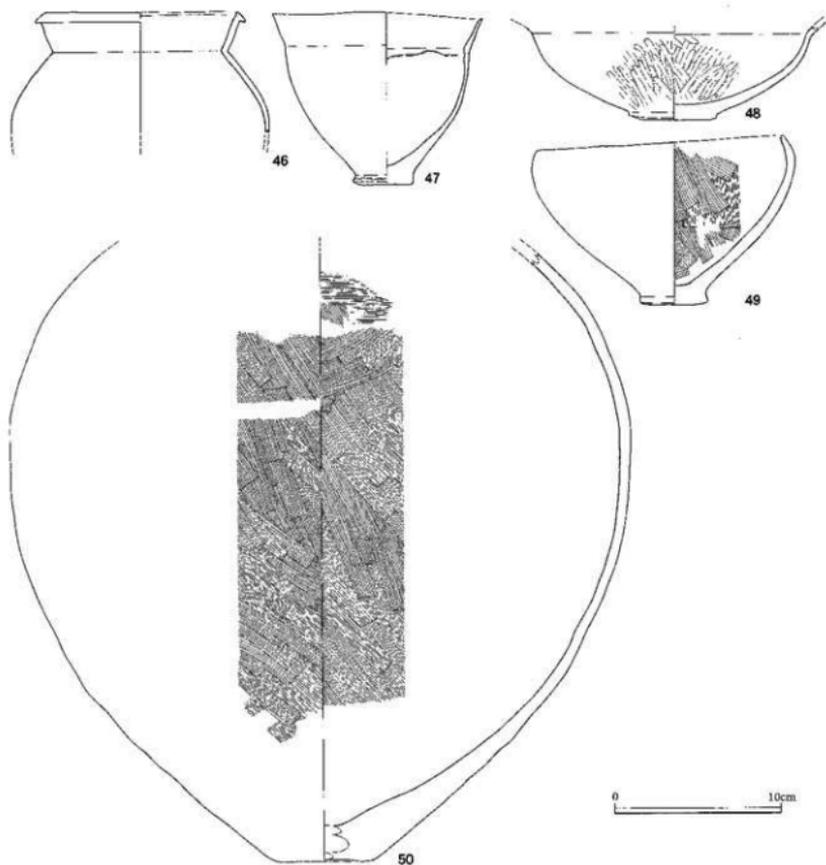
※数字は遺物番号に対応

8,000m 8,000m



- | | | |
|-------|--------|------------------|
| I編 | 褐色砂質土 | 硬くしまり、礫石片を含有 |
| II編 | 灰褐色砂質土 | 硬くしまり、地山ブロック少量含有 |
| III編 | 灰褐色砂質土 | 地山ブロック多量に含有 |
| IV編 | 灰褐色砂質土 | 硬くしまり、含有礫物なし |
| V編 | 灰褐色砂質土 | 地山ブロック多量に含有 |
| VI編 | 灰褐色砂質土 | ややゆるみ、含有物なし |
| VII編 | 灰褐色砂質土 | 地山ブロックを含有 |
| VIII編 | 灰褐色砂質土 | 硬くしまり、含有礫物なし |
| IX編 | 灰褐色砂質土 | 地山ブロック多量に含有 |
| X編 | 灰褐色砂質土 | 地山ブロック少量含有 |

第17図 SL5・7平面実測図 (Scale: 1/50)、遺物出土位置図 (Scale: 1/120)、SL4・5セクション図 (Scale: 1/20)



第18図 SL5出土遺物 (Scale : 1/3)

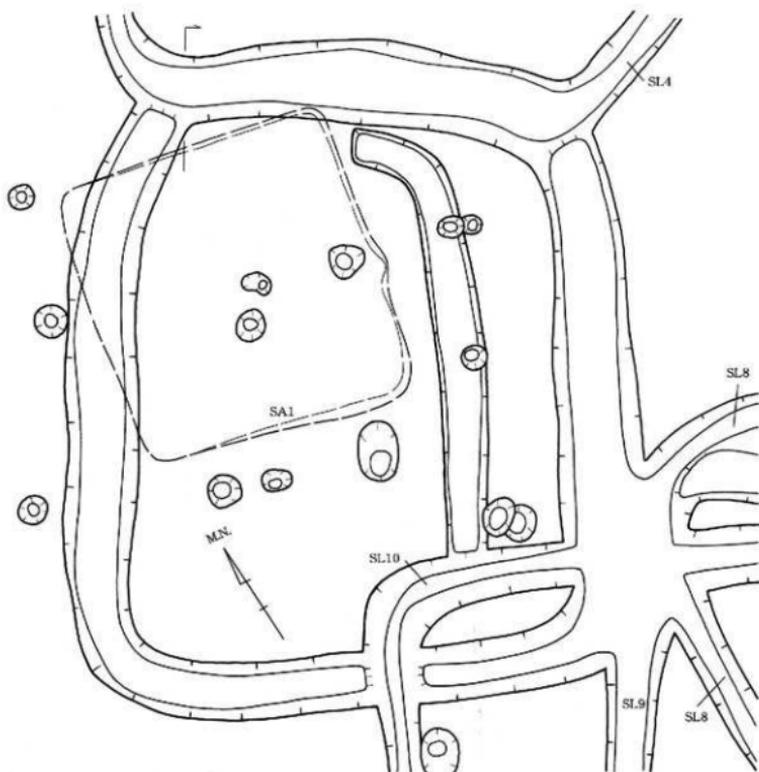
外面は摩滅が激しいが、おそらくは全面ナデ調整により、内面は全面、下から上に向かって施されたハケ調整である。50は大型の壺である。口縁部を完全に欠損するため正確な器形は不明である。胴部最大径は37.6cmを計るが、これに比して器壁は薄手な印象を受ける。内外面ともに調整はハケによる。

長胴壺50は最大径が胴部中程まで下がっており、松永福年2期（弥生時代後期後葉）以降の所産である。

SL6（6号周溝状遺構）（第19・20図）

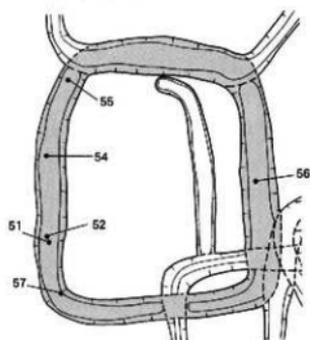
調査区東端、中ほど（B区北東部）において検出された周溝状遺構で、若干不整形ながらも長方形に近い平面プランを持つ。北辺がSL4の南辺と重複し、南東コーナー部近くにおいてSL8、SL9、SL10と切り合い関係にある。

周溝部外縁を含めた規模は東西軸5.9m、内郭部の規模は東西軸4.5m、南北軸5.5m、周溝

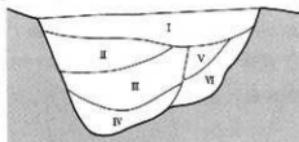


0 2m

※数字は遺物番号に対応



8.200m SL4 SL6 8.200m

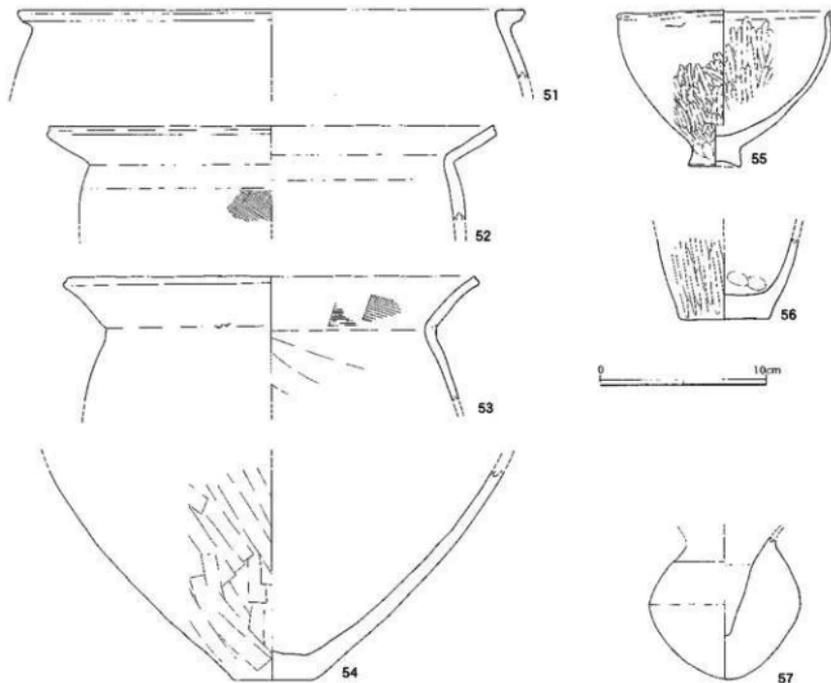


- I層 褐色砂質土 硬くしまり、白色粒子を多量に含有
- II層 暗褐色砂質土 硬くしまり、鉄分を多量に含有
- III層 暗褐色砂質土 IIに近似的だが、やややわらかい
- IV層 暗褐色砂質土 II・IIIに近似的だが地山ブロックを含有
- V層 黒褐色砂質土 硬くしまり、鉄分を多量に含有
- VI層 黒褐色砂質土 Vに近似的だが地山ブロックを含有

第17図 SL6平面実測図 (Scale : 1/50)、遺物出土位置図 (Scale : 1/120)、SL4・6セクション図 (Scale : 1/20)

部の断面形は台形状で、検出面における幅は0.6~0.9m (SL4との重複部分は除く)である。他の周溝状遺構と切り合う部位において土層を観察すると、先述のとおりSL6との切り合いではSL4が後出し、最上層のI層を共有するが、SL9との切り合い関係では、SL6が先行し、埋土の上層から下層まで、その切り合い関係は明瞭である。またSL10にも先行する。

51は甕の口縁部である。口縁部突帯が巡り、器壁は薄手である。調整は摩滅により判然としないが、内外面ともにナデかと思われる。52は甕の口縁部である。口縁部の屈曲は鋭く、内面には明瞭な稜が入る。外面調整は胴部ハケ、口縁部ナデ、内面調整はハケの上からナデである。53は甕の口縁部である。摩滅が激しく、調整はあまりはつきりとは残っていないが、内面については口縁部にハケの痕跡がcaろうじて確認できる。54は甕の底部および胴部の一部である。外面には板状工具によるナデの痕跡が残るが、内面については、摩滅が激しく、判然としない。残存部位から、かなり大型の甕であることが知れる。55は小型の鉢である。口縁部は直口に近いものの端部で若干外反し、底部は上げ底気味である。外面、内面とも丁寧なミガキが施され、内面においては、ミガキを行う前にハケの施されていることも見てとれる。56は深鉢の一種かと思しき底部である。外面には丁寧なミガキが施される。57は横幅3.0cmの小型の土製品である。算盤玉状で上部に孔が穿たれている。上部を欠損しており、本来の形状は不明であるが、



第20図 SL6出土遺物 (Scale: 1/3 ※57のみ1/1)

広口壺などを模したのかと思われる。

甕 51 は口縁部突帯の断面形状が台形に近く、石川編年Ⅱb期（弥生時代中期前半）に比定される。甕 52 は石川編年Ⅳa期（弥生時代後期前葉）、甕 53 は松永編年1期（弥生時代後期中葉）ないし、それに若干先行する段階のものと思受けられる。

なお、SL6の内郭部に幅狭で浅い溝が1条存在するが、これは後述のSL10に伴う増築溝である。

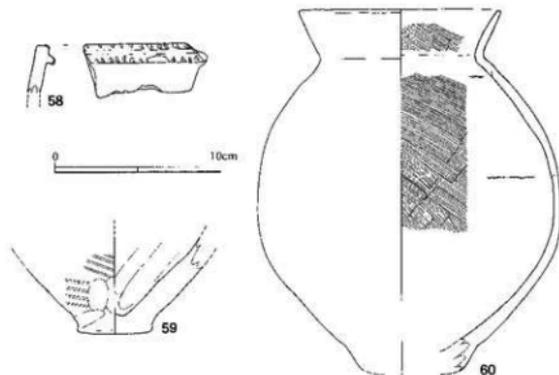
SL7（7号周溝状遺構）（第17・21・22図）

調査区東端、中ほど（B区北東部）において検出された周溝状遺構で、南北に縦列した周溝状遺構群の中では最西端に位置する。平面形は、一見、正方形に近いようにも見えるが、東辺は外方に大きく弧を描く。先述のSL5に切られるとともに、南西コーナー部近くにおいてSL8と切り合い関係にある。周溝部の断面形は台形に近い部分もあるが、底面は平坦ではなく、断面不整形と言える。

周溝部外縁を含めた規模は東西軸4.5m、南北軸4.0m、内郭部の規模は東西軸3.5m、南北軸3.0m、検出面における周溝部の幅は0.4～0.6mである。なお土層断面図（第22図）中、I層については、遺構検出面上に堆積していた遺物包含層である。

遺物の出土は少量であり、図化したものはわずかに3点である。58は甕の口縁部で、口唇部および、口唇部直下に巡らした突帯に列点文を施す。59は甕の底部である。外面にはタタキが施され、底部付近ではその上から指オサエがなされている。内面調整は指ナデである。60は短頸壺である。底部を欠損するものの、他はほぼ完形である。外面ハケを施したのち丁寧なナデによって平滑に仕上げられている。内面は全面的にハケが施されている。

甕の口縁部58は所謂「下城式」で、石川編年Ⅱa期（弥生時代中期初頭）に比定される。甕の底部59は平底であり松永編年3・4期（庄内1・2式並行）、短頸壺60は最大径が胴部中程まで下がっており、松永編年2期（弥生時代後期後葉）以降かと思われ、きわめて時期幅は大きい。ただし58に関しては遺構内最上層であるⅡ層での出土であり、流れ込みの可能性も



第21図 SL7出土遺物 (Scale: 1/3)

否定できない。

なお本遺構では、遺構内埋土のすべてを持ち帰り、フローテーション（水洗選別）法分析を行った。しかしSL1・SL2における結果と同様、木炭状のかけらは多数得られたものの、他に植物遺存体の検出はなかった。

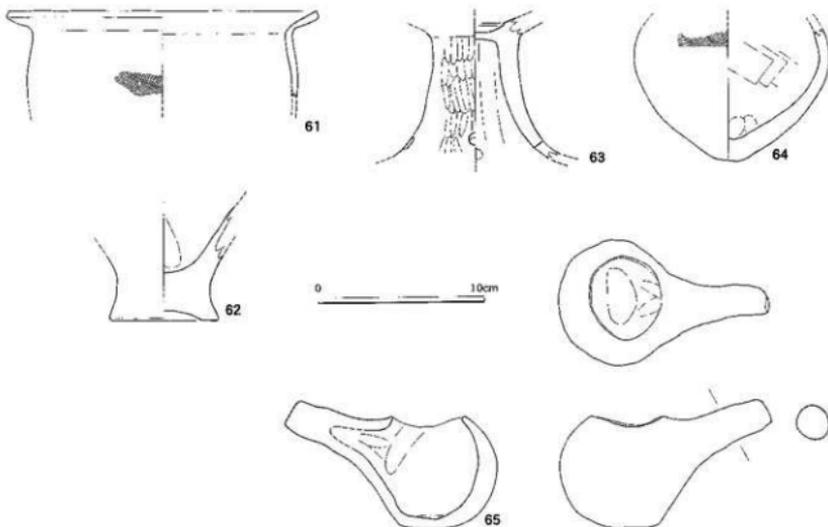
SL8（8号周溝状遺構）（第23・24図）

調査区東端の中ほど、やや南寄り（B区東部、中ほど）の地点において検出された周溝状遺構である。平面形は正方形に近いものの不整形で、SL5、SL6、SL7、SL9、SL10と切り合い関係にある。

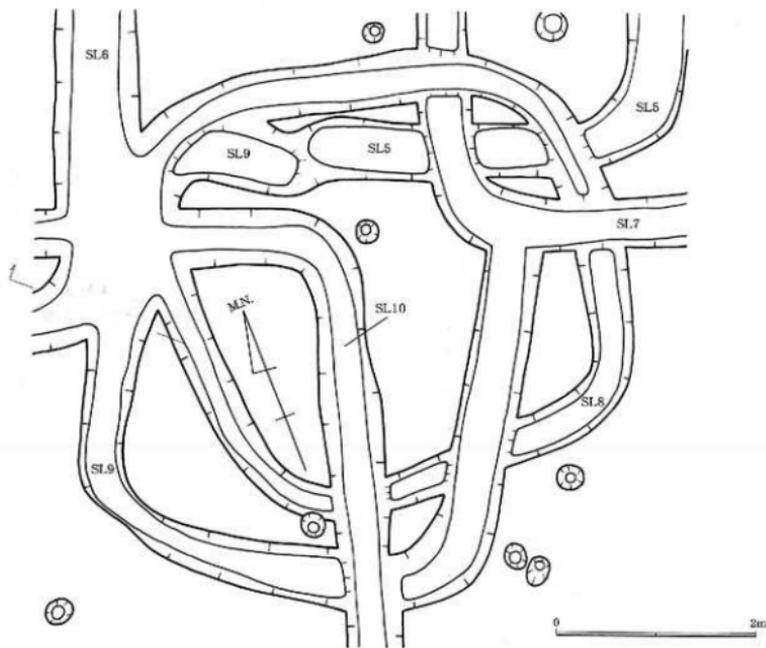
周溝部外縁を含めた規模は東西軸 5.0m、南北軸 4.7m、内郭部の規模は東西軸 3.8m、南北軸 3.8m、周溝部の形状は断面台形で、検出面における幅は 0.4~0.6m である。

61は小型の甕の口縁部および胴部である。薄手で、屈曲部の内面にはシャープな稜が立つ。外面調整はハケ、口縁部はナデ、内面調整はナデである。62は甕の底部である。上げ底で、全体的に丁寧な成形が成されている、整美な底部である。内面の調整は指ナデ、外面の調整については表面の風化のため不明である。63は高坏の脚柱部である。脚柱部との境付近において、4方向に円形の透かし孔が穿孔されている。また坏部の見込みに円形のくぼみが形成されている。外面の調整はミガキ、内面はナデによる。64はやや小振りな壺の胴部である。外面にはハケが施され、上からきれいにナデ消されている。また内面には板状工具によるナデのあとが残る。65は柄杓形土製品である。表面の摩擦が激しいが、調整はナデによるものであろう。明瞭な底部ないしそれに準じる平坦面を持たず、自立しない。

甕の口縁部61は松永編年1期（弥生時代後期中葉）ないし、それに若干先行するものと見



第23図 SL8出土遺物 (Scale : 1/3)

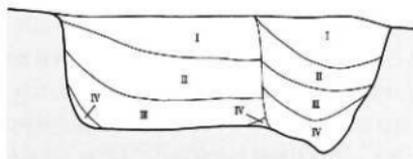


8.200m

SL6

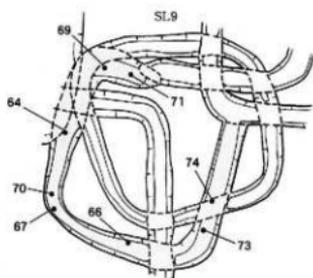
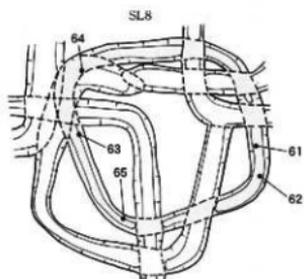
SL9

8.200m



SL6
 I層 緑褐色砂質土 硬くしまり、褐色硝子を含有
 II層 褐色砂質土 しまりあり、透山ブロックを含有
 III層 黒褐色砂質土 しまりあり、透山ブロックを含有
 IV層 褐色砂質土 硬くしまる

SL9
 I層 黒褐色砂質土 硬くしまる
 II層 緑褐色砂質土 硬くしまる
 III層 黒褐色砂質土 硬くしまり、透山ブロックを多量に含有
 IV層 暗褐色砂質土 硬くしまり、透山ブロックを少量含有



※数字は図面番号に対応

第24図 SL8・9平面実測図 (Scale : 1/50)、遺物出土位置図 (Scale : 1/120)、SL6・9セクション図 (Scale : 1/20)

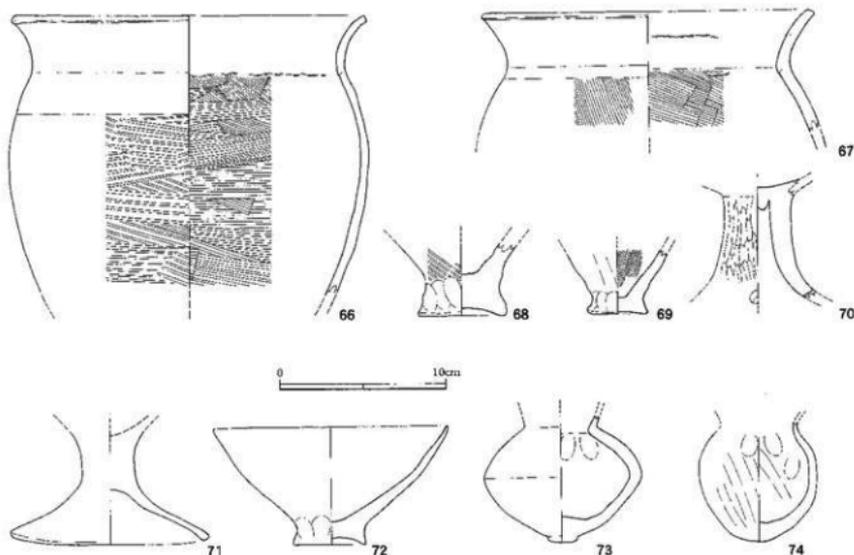
受けられる。甕の底部 62 は明瞭な上げ底であり、松永編年 1 期以前のものであるが、全体の作りが丁寧であり、後期でもやや早い段階のものと思われる。

SL 9 (9号周溝状遺構) (第 24・25 図)

調査区東端の中ほど、やや南寄り (B 区東部、中ほど) の地点において検出された周溝状遺構で、先述の SL 5 同様、特異な平面形をなす。SL 7 の南辺、南西コーナー部近くより始まり、正方形に近く周回したのち、北辺途上において SL 5 収束部と若干、互い違いに重なりながら収束する。SL 5 同様、SL 9 自身は全周しないものの、SL 5、SL 7 の周溝部を利用して内部部を形成している。他の周溝状遺構との切り合い部における土層の観察より、先述のとおり SL 6 に後出し、SL 10 にも後出する。

周溝部外縁を含めた規模は、東西軸 4.5m、南北軸 4.6m、内部部の規模は東西軸 3.3m、南北軸 3.8m、周溝部の断面形は台形状で、検出面における幅は 0.4~0.6m である。

66 は甕である。外面にはタタキが施され、口縁部はナデ、内面は胴部がハケ、口縁部が外面と同じくナデである。67 は甕の口縁部である。内外面ともにハケののち、口縁部はナデを施す。68 は甕の底部である。外面にはタタキが施される。69 は甕ないし深鉢の底部である。外面は指ナデによって平滑に仕上げられ、内面にはハケ調整が施される。70 は高坏の脚柱部である。脚柱部との境付近に円形の透かし孔が一箇所確認できるが、他の位置における透かし孔の有無については判然としない。外面はミガキによって丁寧に仕上げられている。71 は器種不明土器の脚部である。おそらく脚付の鉢かと思われる。軟質で摩滅が激しく、内面、外面ともに調整は不明である。粗製で、全体にゆがみが大きい。72 は小型の浅鉢である。かすかに内湾する



第25図 SL9出土遺物 (Scale: 1/3)

鉢部に、上げ底状になった小さな底部がつく。内面、外面ともに調整は判然としないが、鉢部と底部の境目には明瞭な指オサエの痕が残る。73は小型の壺の胴部および底部である。算盤球状の胴部と、わずかに残る頸部から、長頸壺を模したものかと思われる。内面には何箇所か指頭押圧の痕が残り、外面はナデ調整かと思われる。摩滅が激しく、残存部位に文様等は見当たらない。74は小型土器の胴部および底部である。口縁部を完全に欠損するが、おそらくは直口壺を模したものかと思われる。底部は丸底ではあるが、若干の押圧により、底面部分を認識することはできる。外面、内面ともに指オサエおよび指ナデによって仕上げられている。

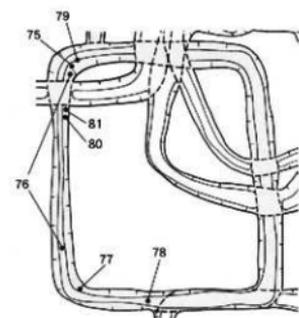
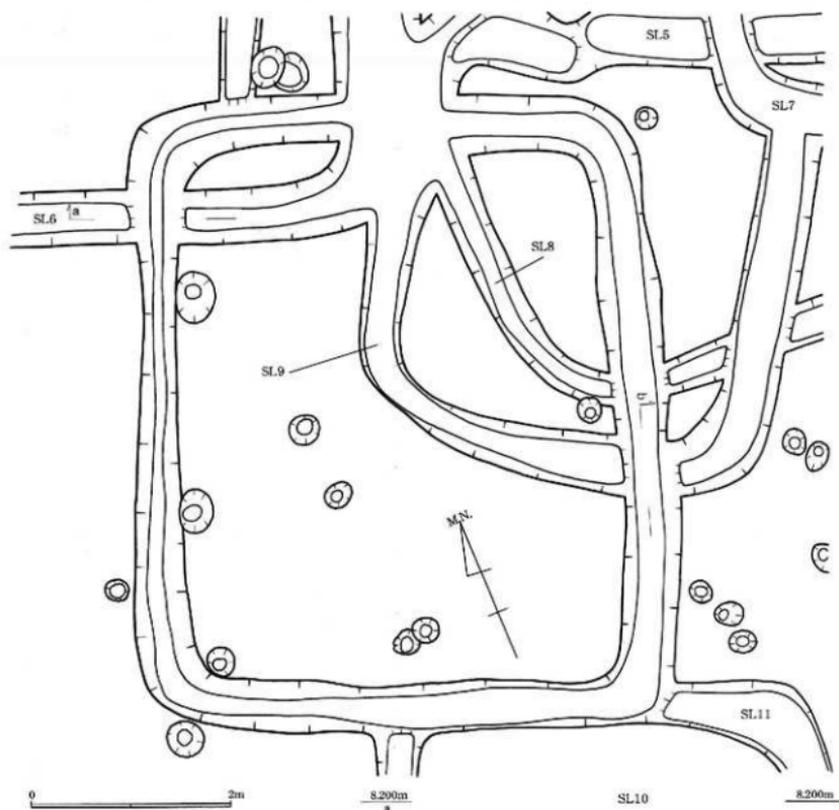
甕 66は松永編年3期（庄内1式併行）前後、67は松永編年2期（弥生時代後期後葉）前後に比定される。また甕の底部 68は松永編年1・2期（弥生時代後期中葉～後葉）に比定され、本遺構出土の遺物にも、若干の時期差が存在するように思われる。

SL10（10号周溝状遺構）（第26・27図）

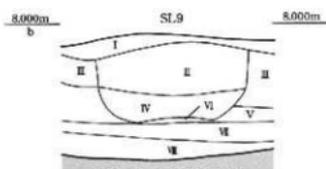
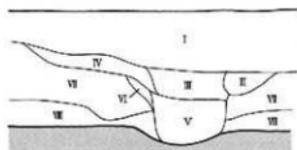
調査区東端の中ほど、やや南寄り（B区東部、中ほど）において検出された周溝状遺構である。平面形は長方形で、周溝部外縁を含めた規模は東西軸5.6m、南北軸6.6m、内郭部の規模は東西軸4.6m、南北軸5.5m、周溝部の断面形は台形状で、検出面における幅は0.3～0.6mである。

北西部においてSL6と、北東部においてSL8・SL9と切り合い関係にあり、また南辺の東半部分をSL11と重複させている。切り合い部分の土層観察から、SL6に後出し、SL9に先行することが見てとれるが、SL6、SL9のそれぞれと、最上層のI層を共有している。またSL11との切り合い関係を見ると、最下層においてSL11の埋土を掘り込んで構築されていることが確認できるが、埋土の大半を共有している。SL10には、「周溝」ではない、幅狭で浅い溝が付随している（第19図）。SL10の北に隣接するSL6の内郭部に掘り込まれたもので、SL10の北辺、北西コーナー近くより始まって北方に延びたのち、SL6の北辺（SL4の南辺と重複）手前で西方に屈曲し、収束する。極めて浅い溝で、構築途中で破棄された周溝状遺構のようにも思え、単にSL10に付随するだけの存在か、あるいは一箇の周溝状遺構として成立させようと構築途中にあったものかは判然としない。ただしその位置関係から、SL10の存在を前提として作られたものであることは間違いない。

75は完形の甕である。倒卵形の胴部にゆるく外反した口縁部、小型だが上げ底状になった底部がつく。外面は口縁部、底部を除いて全面にタタキが施され、内面は板状工具によってナデ調整が行われている。口縁部外面および胴部外面に一部、煤が付着する。76は大型の甕の口縁部および胴部である。外面調整はナデ、内面調整は板状工具によるナデである。77は甕の底部である。外面はタタキを施した後、底部付近においてはナデ、および指頭押圧を行う。内面調整はナデである。78は二重口縁壺の口縁部片である。外面に衝描波状文と、竹管文が施される。79は二重口縁壺の口縁部である。第2口縁外面には波状文が施されている。外面の調整は板状工具によるナデ、内面の調整は指ナデである。80は小型の鉢である。底部を欠損するが、残存部位より、外に張り出す、上げ底状の底部であると考えられる。内面、外面ともに調整はナデで、特に、外面のナデは丁寧に施されている。81は石庵丁である。

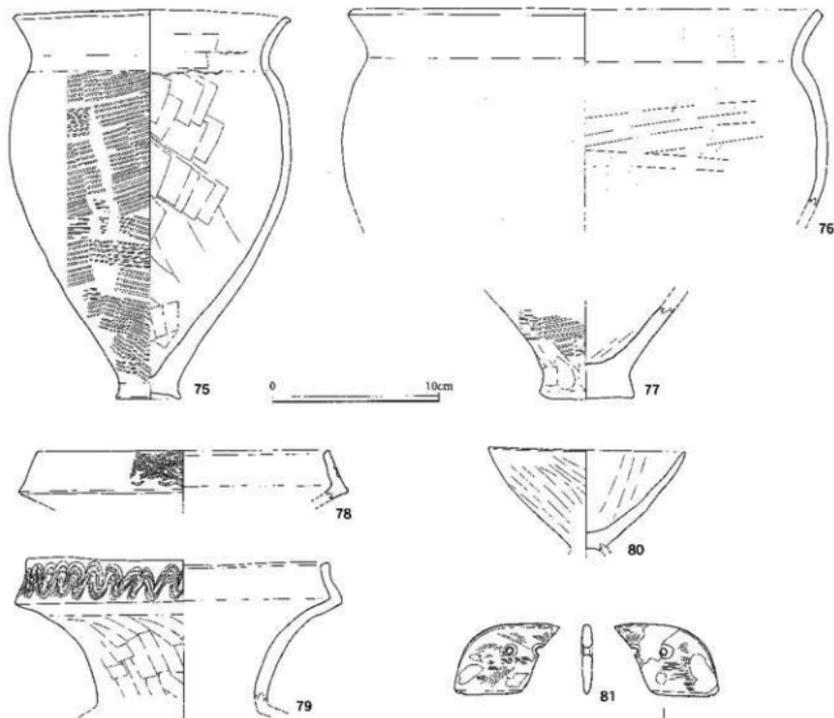


※数字は図面番号に対応



※セクション注記は第22図

第26図 SL10平面実測図(Scale:1/50)、遺物出土位置図(Scale:1/120)、SL6・10セクション図(Scale:1/20)、SL9・10セクション図(Scale:1/20)



第27図 SL10出土遺物 (Scale: 1/3)

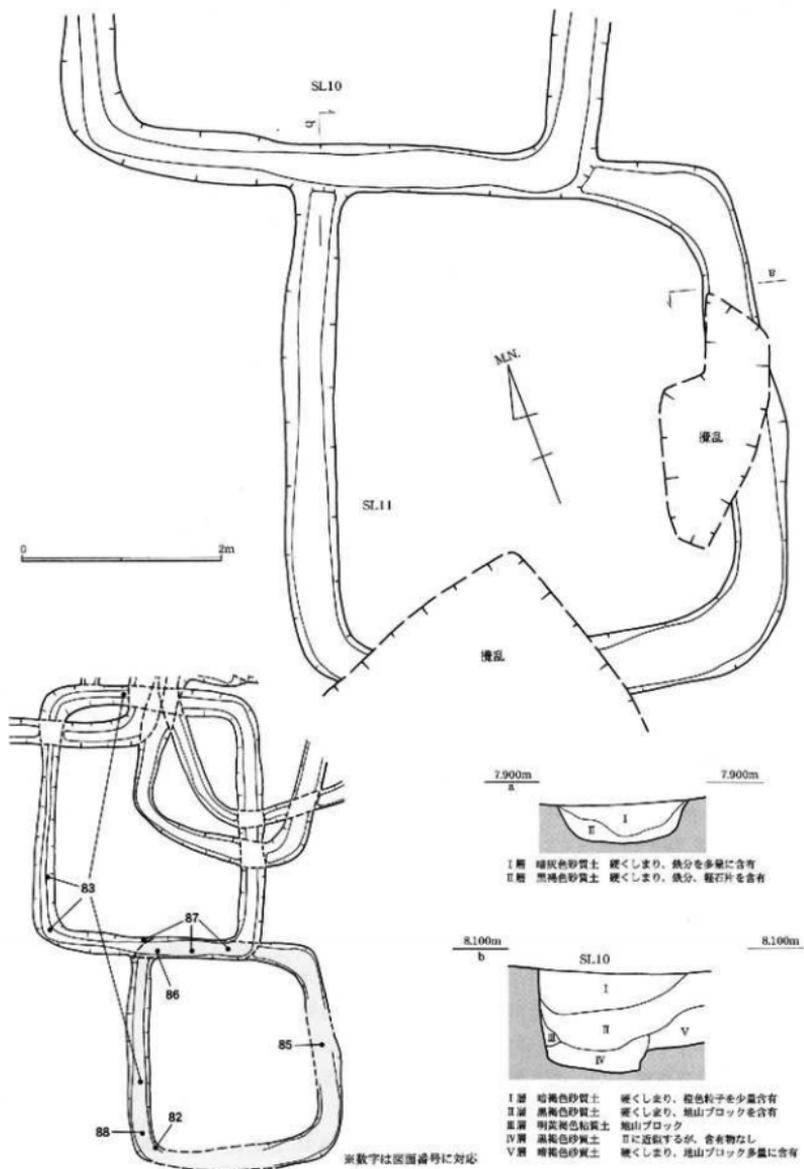
完形の甕 75 は松永編年 1・2 期 (弥生時代後期中葉～後葉)、甕の口縁部 76 は松永編年 2・3 期 (弥生時代後期後葉～庄内 1 式並行)、甕の底部 77 は松永編年 3 期 (庄内 1 式並行) 以降、二重口縁壺 78・79 はともに松永編年 2・3 期 (弥生時代後期後葉～庄内 1 式並行) に比定される。甕 75 と 77 の底部形態の比較からも、若干の時期差が存在していることは明白である。SL11 (11号周溝状遺構) (第 28・29 図)

調査区東端の中ほど、やや南寄り (B 区東部、中ほど) において検出された周溝状遺構で、前述の SL10 の南辺と、北辺の西三分の二を重複させる。SL3～SL11 によって成る、連結ないし切りあって検出された周溝状遺構群の中では南端に位置する。

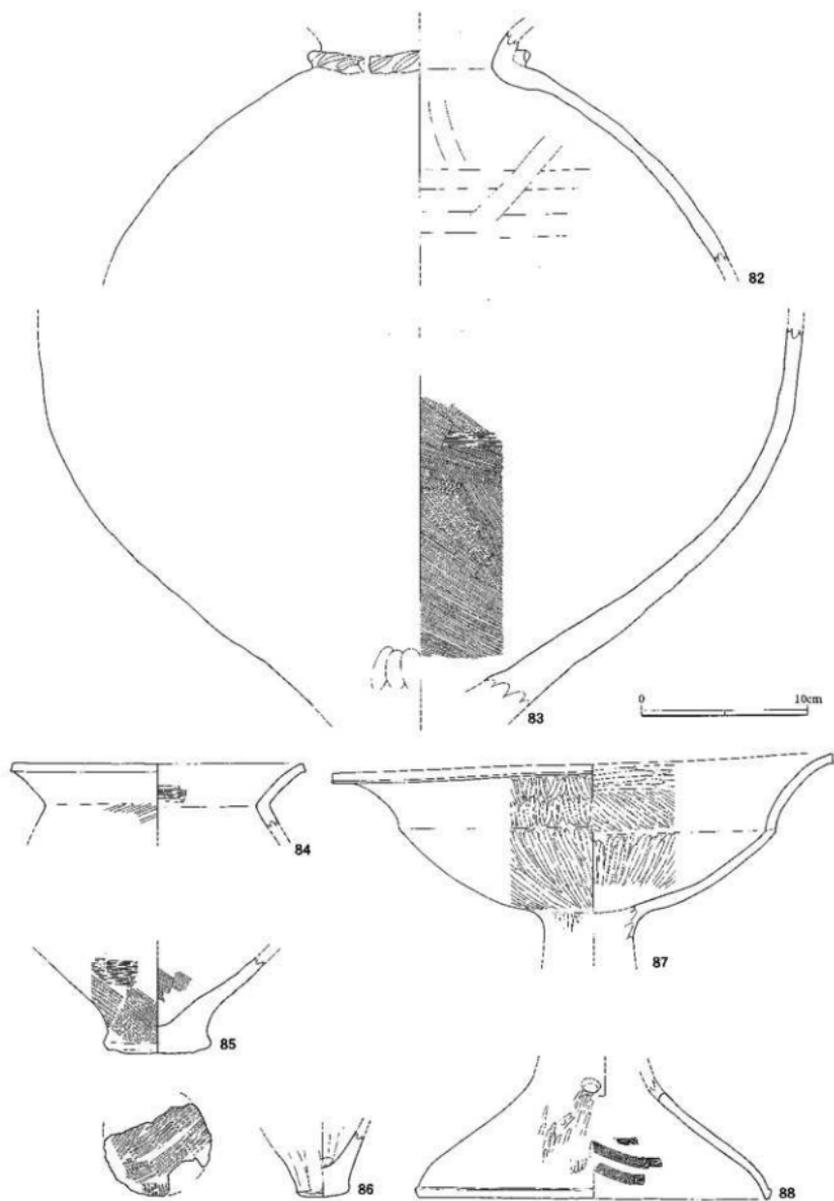
平面形はややいびつな正方形で、周溝外縁を含めた規模は東西軸 5.2m、南北軸 5.5m、内郭部の規模は東西軸 4.1m、南北軸 4.7m、周溝部の断面形は台形状で、検出面における幅は 0.4～0.7m (SL10 との重複部分は除く) である。

SL10 の項で述べたとおり、重複部分においては SL10 と埋土の大半を共有する。

なお SL11 と後述の SL12 との間には攪乱によって調査不能であった部分が存在し、SL11 と SL12 との間にも、周溝状遺構の存在した可能性はある。ただし、SL11、SL12 のあ



第28図 SL11平面実測図 (Scale : 1/50)、遺物出土位置図 (Scale : 1/120)、セクション図 (Scale : 1/20)



第29圖 SL11出土遺物 (Scale : 1/3)

り方を見ると、少なくとも、これらに重複、連結する周溝状遺構は、攪乱部分には存在しないと考えられる。

82は大型の甕の胴部上半である。肩部と口縁部との境には列点文の入った粘土帯が巡る。内面調整はナデ、外面の調整はハケののちナデかと思われる。83は大型の甕の胴部下半である。外面調整はナデ、内面調整はハケである。82と同一個体と思われる。84は甕の口縁部である。残存部位はごくわずかではあるが、外面胴部はタタキ、口縁部は横ナデ、口縁部内面には横位のハケののちナデの施されていることがわかる。85は甕の底部である。内面の調整は目の細かなハケおよび指ナデであり、外面には全面タタキが施される。特筆すべきは、タタキが底面にまで施されている点である。この底面のタタキは、上からナデ等の施された痕跡もなく、また自重によってつぶれた痕跡もない。したがって、製作時のある段階において、甕を倒立させた上で底面にタタキを施し、その後、完全に乾燥するまで、倒立させたままの状態であったことが窺える。86は極めて小型な土器の底部である。形状から甕を模したものと思われ、内面、外面ともに調整はナデである。87は高坏の坏部である。丸みを帯びた受部に大きく外反する口縁部がつく。外面、内面ともに丁寧なミガキが入れられており、外面についてはミガキの前にハケ調整も施されている。88は高坏の脚部である。脚柱部との境にあたる部位に透かし孔が穿孔されているが、残存部位がわずかであるため、その配置等は不明である。外面にはミガキ、内面にはハケが施され、全体的にきわめて丁寧な仕上げがなされている印象を受ける。肥厚させた脚裾端部の作りや、外面における丁寧なミガキなど、他の周溝状遺構から出土している浅鉢と類似する印象を受ける。

甕 84 は口縁部の屈曲がシャープで、松永編年 1・2 期（弥生時代後期中葉～後葉）に比定される。甕の底部 85 は平底であり松永編年 3 期（庄内 1 式並行）以降、高坏 87・88 はともに松永編年 2・3 期（弥生時代後期後葉～庄内 1 式並行）に比定され、当遺構においても、若干の時期差が存在するようである。

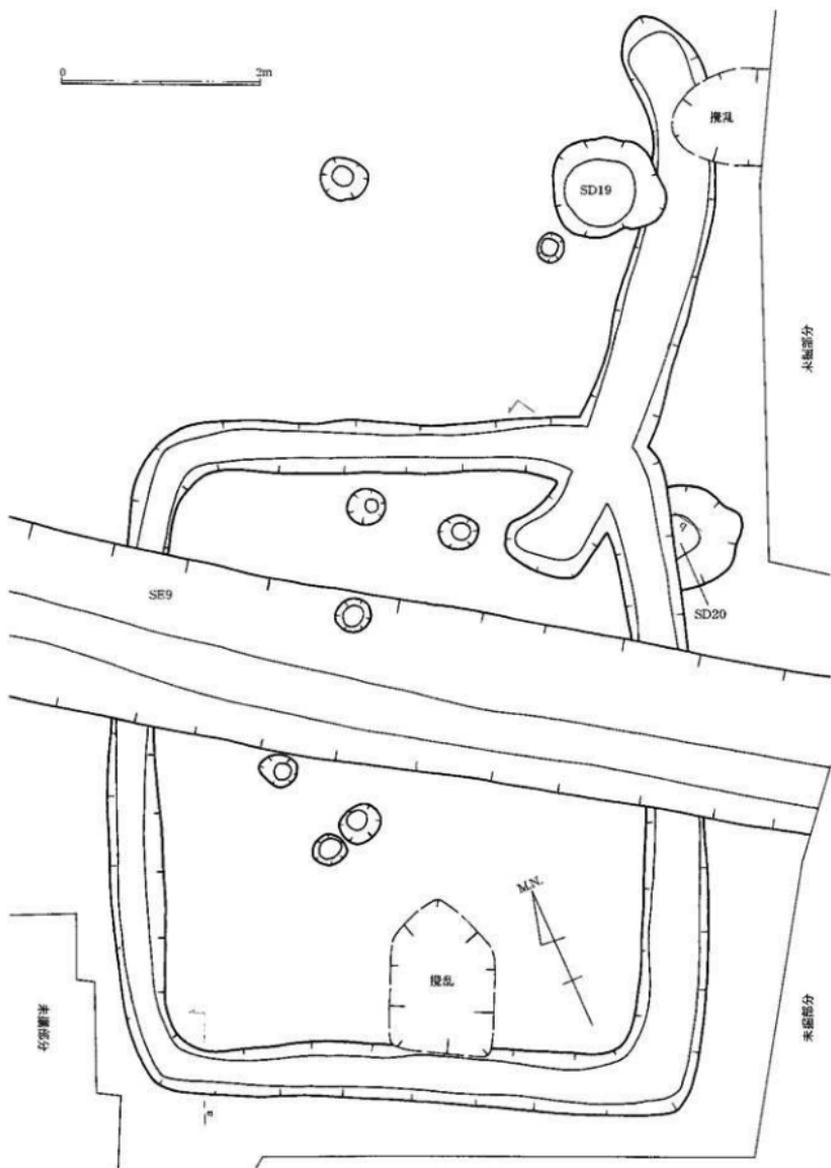
S L 12 (12号周溝状遺構) (第30・31図)

調査区の南東端において検出された平面長方形の周溝状遺構で、南北に縦列する周溝状遺構群の中では、最南端に位置する（ただし、本遺構の南側および東側は攪乱および調査区外であり、これらの部分においても他の周溝状遺構の存在した可能性はある）。コーナー部の屈曲はシャープであり、全体に整美な印象を受ける。

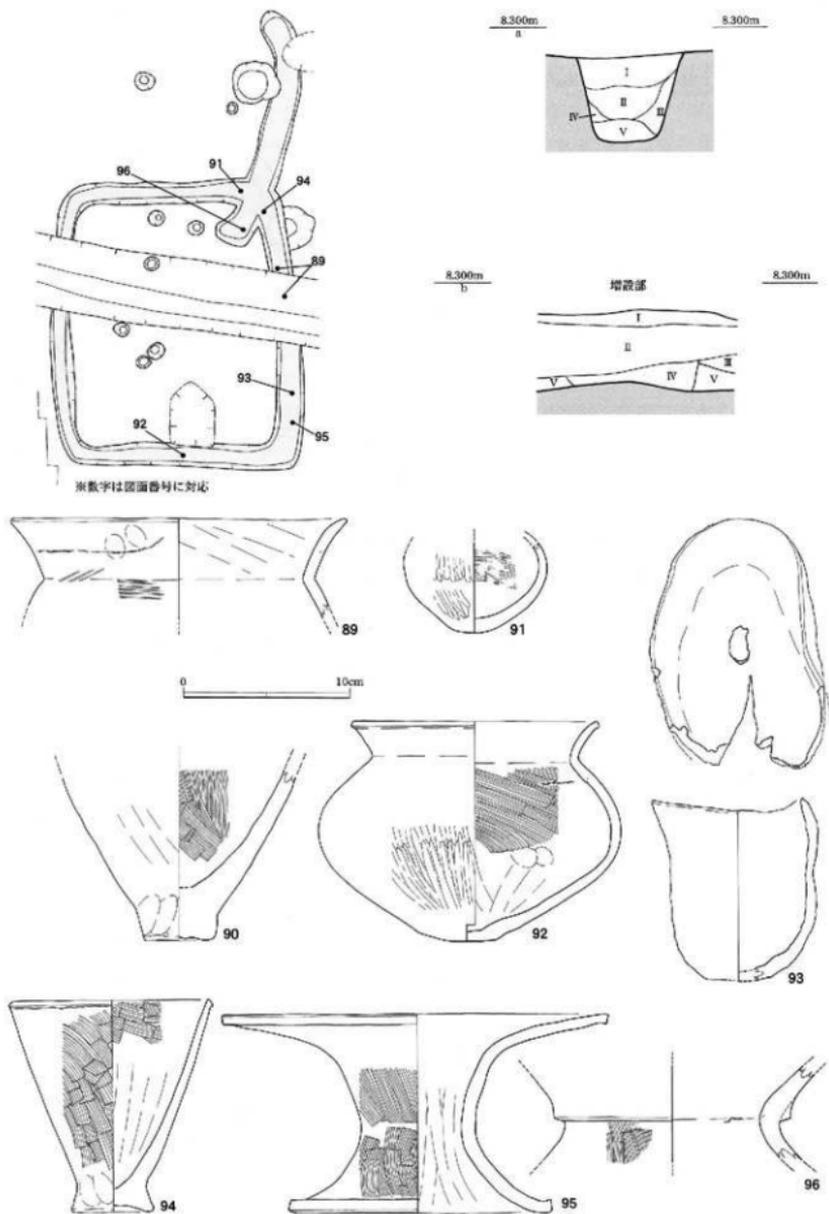
今回検出された周溝状遺構の中では最大で、周溝部外縁を含めた規模は東西軸 6.1m、南北軸 7.2m、内郭部の規模は東西軸 5.0m、南北軸 5.9m、周溝部の断面形は台形で、検出面における幅は 0.4～0.7m である。

北東コーナー部には「周溝」ではない、緩く弧を描いた溝が切り合っている。土層を見ると、底面近くでこの溝が S L 12 に後出することが確認できるが、S L 10、S L 11 の切り合い部に見られる状況と同じく、埋土の大半は S L 12 と共有している。従って、この溝は S L 12 に付随するものと判断される。

89は甕の口縁部である。外面胴部はタタキ、口縁部はナデおよび指オサエが、内面にはナデ



第30图 SL12平面实测图 (Scale : 1/50)



※数字は図面番号に対応

第31図 SL12遺物出土位置図 (Scale : 1/120)、セクション図 (Scale : 1/20)、出土遺物実測図 (Scale : 1/3)

が施される。90は壺の底部である。強い指オサエによって脚台状の底部を作り出す。外面の調整はナデ、内面にはハケが施される。91は小型の壺形土器の胴部および底部である。外面にはミガキを、内面には横位の連続的なハケを施したのち、ナデ調整を行なっている。92は直口壺である。胴部外面下半にはミガキが施されているが、摩滅が激しく、全体的に施されているものかはわからない。内面調整はハケおよび指ナデである。93は直口壺である。全体に押しつぶされ、大きくゆがんでいる。焼成時になんらかの事故によってこのような形になったものと思われる、そのまま焼き上げられたため、一面に無数の小さな火脹れができています。94はほぼ完形の深鉢である。外面調整はハケ、内面は口縁部ハケ、以下はナデである。95は器台である。外面調整はハケ、内面調整はナデである。口縁部の一部および脚部の一部が欠損しているが、残存部位においては透かし孔の穿孔は見当たらない。96は山陰系の器台かと思われる。粘土帯によって有段部を作り出している。外面の調整はハケ、内面の調整はナデによる。

壺の口縁部 89 及び底部 90 は松永編年 2・3 期（弥生時代後期後葉～庄内 1 式並行）、深鉢 94 は上げ底気味で松永編年 3 期（庄内 1 式並行）以前、器台 95 も松永編年 4 期（庄内 2 式並行）を下るものではない。また直口壺 92 も、口唇部の面形成が明瞭であることを見れば、松永編年 3 期よりも下がることはないものと思われる。

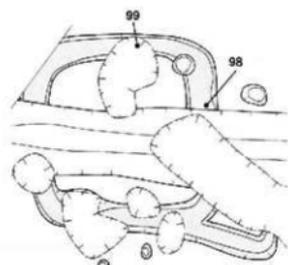
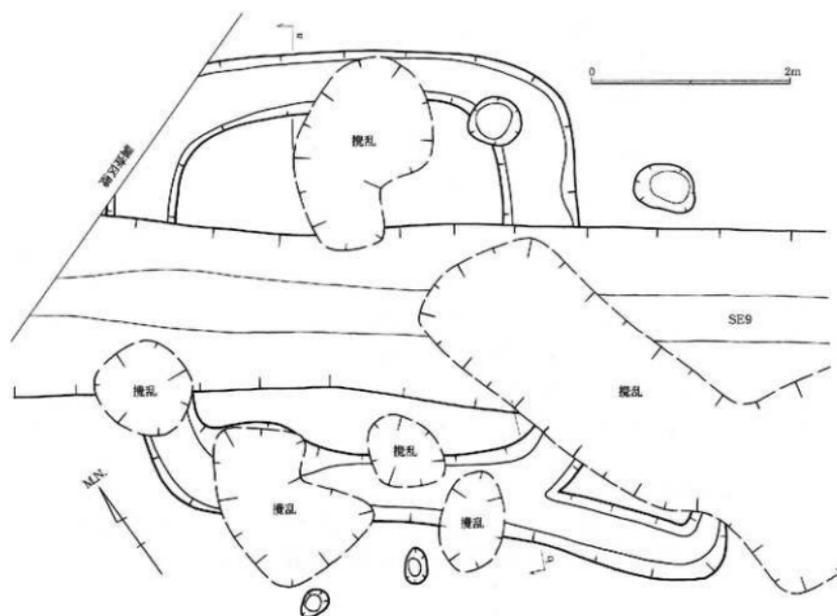
S L 13 (13号周溝状遺構) (第 32・33 図)

調査区の南西部（B区西部）において検出された周溝状遺構で、他の周溝状遺構群とは離れて、孤立的に存在する。本遺構の上面には遺物包含層の堆積がなく、遺構上部は削平を受けているものと判断される。また、遺構中央を近世の溝 SE 9 が通り、各所を攪乱によって破壊されているが、全形は確認できる。平面形は隅丸方形で、周溝外縁を含めた規模は東西軸 4.8m、南北軸 4.8m、内郭部の規模は東西軸 3.4m、南北軸 3.5m、周溝部の断面形は台形状で、検出面における幅は 0.5～0.8m である。

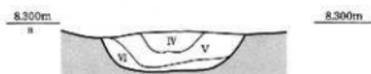
S L 10、S L 12 の例に同じく、S L 13 においても、付随的なものと思われる溝が存在する。S L 13 の南東コーナー部より始まり、東方に 2m ほど伸びたのち、直角に近く、北方に屈曲する。その先は攪乱および近世の溝によって破壊されているが、おそらくは屈曲後ほどなく、収束するものであろう。切り合い部の土層を観察すると、この溝が S L 13 に後出していることが見てとれるが、両者とも遺構上部の大半が削平されているものと思われ、他の周溝状遺構に見られるように、埋土上部を共有していた可能性は考える必要がある。

97 は壺の胴部かと思われる。外面には重弧文が線刻されている。外面調整はハケのちナデ、内面調整も同じくハケのちナデである。98 は小型の壺の胴部である。外面は摩滅が激しく、調整は判然としなが、内面には指オサエのあとが残る。99 は S L 12 上に押し込まれた攪乱土中に混入していた壺の底部である。重量感のある平底で、外面調整はタダキ、内面はナデにより調整される。

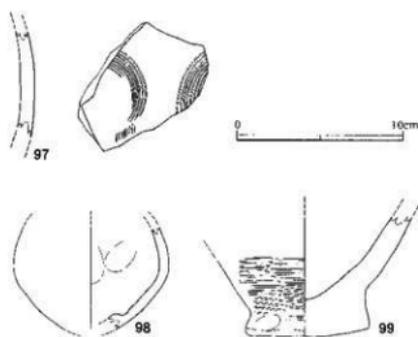
壺の底部 99 は攪乱部分よりの出土であるが、出土位置より S L 13 に伴うものと判断して間違いないと思われる。完全な平底の底部であり、松永編年 3・4 期（庄内 1・2 式並行）に比定されよう。



※数字は遺物番号に対応



第32図 SL13平面実測図 (Scale : 1/50)、遺物出土位置図 (Scale : 1/120)、セクション図 (Scale : 1/20)



第33図 SL13出土遺物 (Scale : 1/3)

b. 土坑 (SD)

今回の調査において検出された弥生時代に属する土坑は31基である。

出土遺物より時期を比定できた土坑のうち、最も古い段階のものは、中期前半に遡るSD15・SD16・SD17の3基である。中期後半に比定される土坑はない。後期に属するものが圧倒的に多く、SD1・SD7・SD9・SD12・SD18・SD20・SD21・SD23・SD26・SD31・SD32・SD33・SD34・SD35・SD46と15基を数える。他にSD14・SD22・SD24・SD30・SD44の5基が後期後葉から終末期(庄内式並行段階)にかけてのものである。

中期前半に属する3基は調査区南東部(B区東端、中ほど)に集中しており、明らかな分布の偏重が存在するが、後期から終末期にかけての土坑は、分布状況に何らかの傾向は見出し難い。ただし時期細分の別によらず、弥生時代に属する土坑は、前節に述べた、調査区の中央を南北に縦断するベルト状の、遺物包含層および地山上部が削平を受けている部分においては、ほとんど存在していない。ただし、この部分においても古代に属する柱穴は残存しており、深さ1mを超えるであろう土坑を跡形もなく消し去るほど大規模な削平であったとは考え難い。そのため、この部分(旧地形の復原において、もっとも標高が高かったであろう部分)においては、元々、土坑の構築が行われなかったものと考えられる。

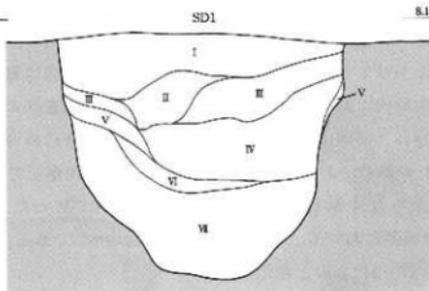
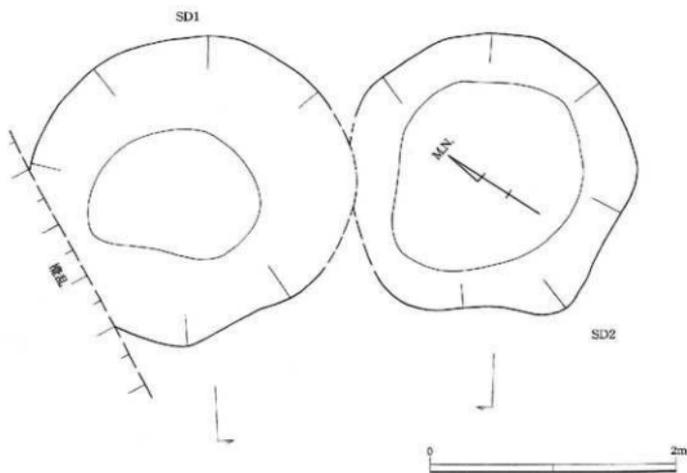
[A区]

SD1 (1号土坑) (第34・35図)

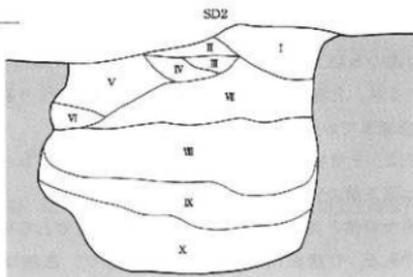
調査区北東部(A区東端)において、後述のSD2を切って存在する平面プラン円形の土坑である。一部を攪乱によって飛ばされているが、上端の最大径は1.28m、断面形はすり鉢状に近く、底面の最大径は0.70m、検出面から底面までの深さは最大で0.99mである。

土層の堆積状況を観察すると、VI層までは、土坑壁面から崩れたと思しき地山のブロックが混入しており、安定した堆積が見られるのは最下層のVII層のみである。

図示した遺物のうち、100・101は二次的な堆積と見られるIV層、102は最下層であるVII層よりの出土である。100は小型で精製の深鉢である。口縁部には2条の沈線が巡り、底部は脚台

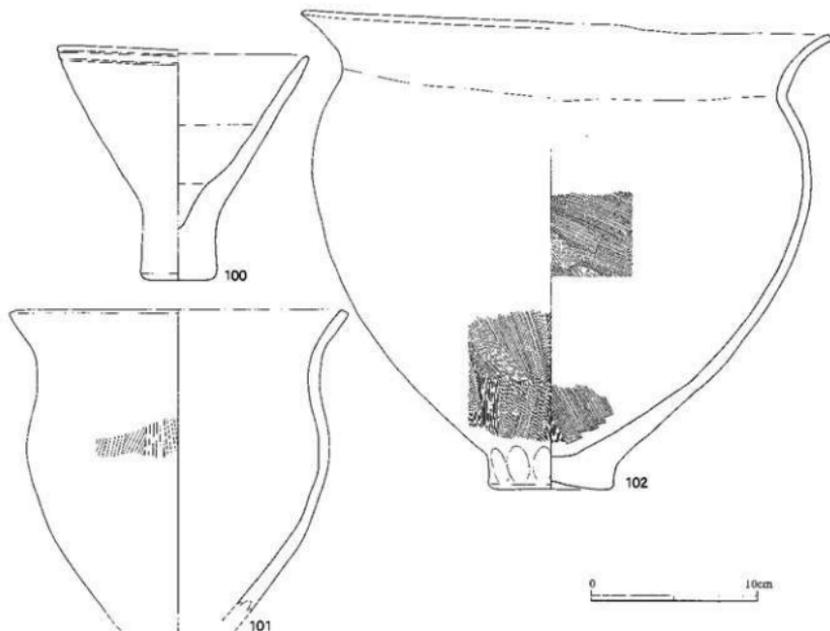


- I層 灰褐色砂質土 硬くしまり、白色、褐色の粒子を多量に含有
- II層 暗褐色砂質土 硬くしまり、地山のブロックを多量に含有
- III層 暗褐色砂質土 IIに近接するが、ブロックは含有せず、褐色の粒子を含有
- IV層 暗灰色砂質土 硬くしまり、やや粘性あり、褐色粒子を多量に含有
- V層 暗褐色砂質土 やわらかく、地山のブロックを多量に含有
- VI層 暗灰色粘質土 やわらかく、褐色のブロックを多量に含有
- VII層 黒褐色土 やわらかく、褐色のブロックを含有



- I層 暗灰色土 やわらかく、白色粒子を少量含有
- II層 暗灰色土 やわらかく、白色粒子を含有
- III層 暗灰色土 10cm次の地山ブロックを含有
- IV層 暗灰色土 3cmほどの地山ブロックを含有
- V層 暗灰色土 地山ブロック少量含有
- VI層 黒褐色土 やわらかく、地山のブロックを含有
- VII層 暗褐色土 硬くしまり、褐色ブロックおよび褐色粒子を少量含有
- VIII層 黒褐色土 やわらかく、褐色ブロックを多量に含有
- IX層 黒褐色土 硬くにして、きわめてやわらかい
- X層 黒褐色粘質土 やわらかく、含有物なし

第34図 SD1・2平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)



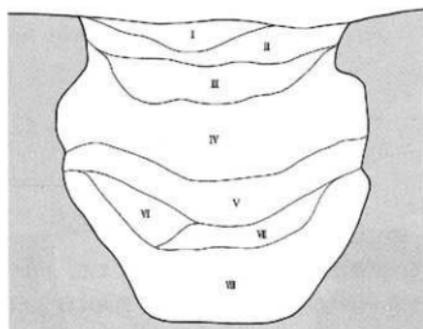
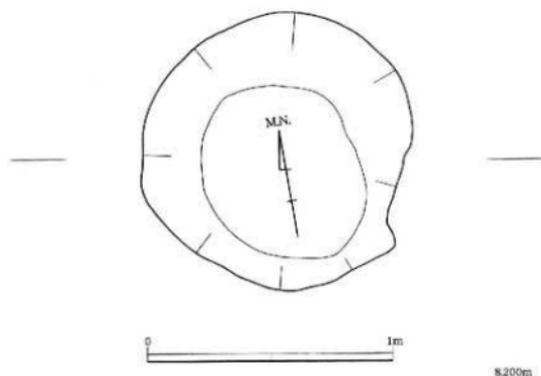
第35図 SD1出土遺物 (Scale : 1/3)

状で、全体に丁寧な成形が成されている。調整は内面、外面ともにナデによる。101は甕の口縁部および胴部である。口縁端部の面形成は行われているが、口縁部の屈曲は弱く、外面、内面ともに稜は入らない。摩擦が激しく、調整については外面にハケの痕跡がかすかに確認できる程度である。102は胴部球形の甕である。底部はやや上げ底状ではあるものの平底に近く、口縁端部は面が形成されている。外面、内面調整ともにハケののちナデである。この形状の甕は宮崎市内の間越遺跡、東宮遺跡等で出土しているが、桜町遺跡では唯一に近い例である。

IV層出土の101は口縁部の屈曲がきわめて弱いが、口縁端部の面形成は行われており、それほどは製作工程の簡易化ないし粗雑化が進んでいない段階のものといえられる。松永編年3期ないし4期(庄内1・2式併行)に位置づけられるのが妥当であろう。一方、VII層出土の102は松永編年2期(弥生時代後期後葉)の様相である。両者は同一遺構内出土に拘わらず、時期差が生じているが、先述のとおり101を含有するIV層に関しては二次的な堆積である可能性がある。したがって、遺構の構築および使用に近い年代を示すものは最下層であるVII層出土の102のみであり、本遺構を弥生時代後期後葉の所産と考えたい。

SD2 (2号土坑) (第34図)

調査区北東部(A区東端)において、前述のSD2に切られて存在する平面円形の土坑である。上端の最大径1.20m、底面の最大径0.90m、深さは最大で1.01mである。遺物は細片が数点出土したのみで、時期判別等のできる良好な資料には恵まれなかった。



- I層 灰褐色砂質土 硬くしまり、白色、褐色の粒子を多量に含有
- II層 暗褐色砂質土 硬くしまり、褐色粒子を多量に含有
- III層 暗褐色砂質土 硬くしまり、地山のブロックを多量に含有
- IV層 黒褐色土 やや粘粒があり、やわらかい、地山のブロックを含有
- V層 黒褐色土 IVに匹敵するが、やや砂質が高い
- VI層 暗褐色土 やわらかく、褐色ブロックを含有
- VII層 暗褐色土 やわらかく、含有物なし
- VIII層 暗褐色土 やわらかく、褐色、灰色のブロックを多量に含有

第36図 SD4平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)

SD 4 (4号土坑) (第36図)

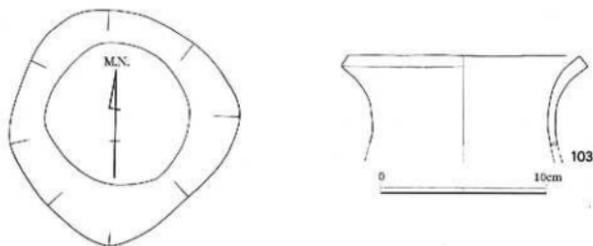
調査区北東端(△区東端)において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径 1.07m、底面の最大径 0.79m、深さは最大で 1.26m である。最下層であるVIII層まで、壁面から崩れたと思しき地山のブロックが多量に含有される。遺物は弥生土器ないし土師器と思しき細片が数点出土したのみで、正確な時期等は不明である。

【B区】

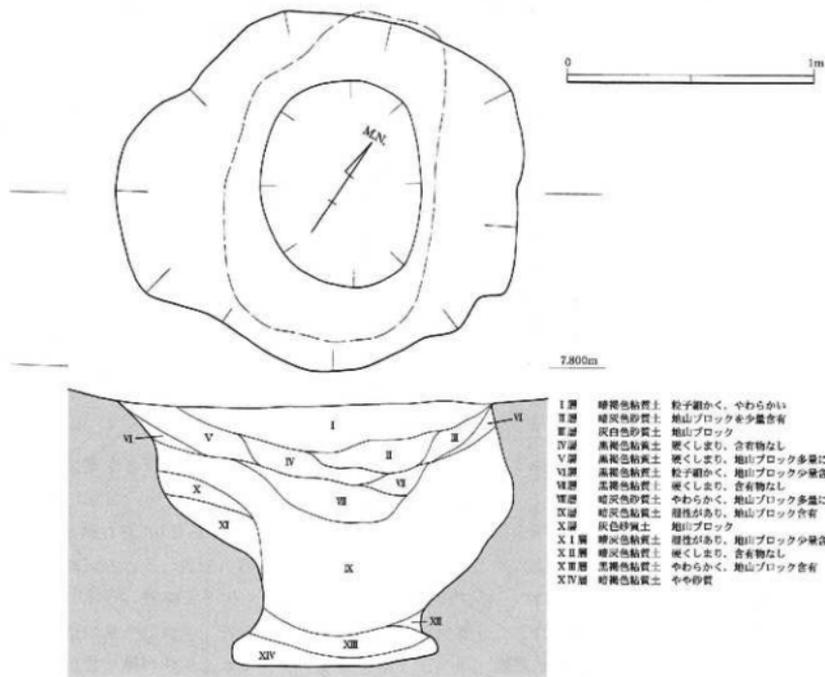
SD 6 (6号土坑) (第37図)

調査区の東端、ほぼ中央(B区北東端)において検出された平面円形の、やや小型の土坑である。上端の最大径 0.97m、底面の最大径 0.60m、検出面から底面までの深さは最大で 0.27m である。

遺物は壺の口縁部 103 一点のみの出土である。外面の摩滅が激しく調整は不明であり、また口縁部以下の部位の出土がないので、密やかな器種は不明であるが、広口壺か長頸壺の一種かと



第37図 SD6平面実測図 (Scale : 1/20)および出土遺物 (Scale : 1/3)

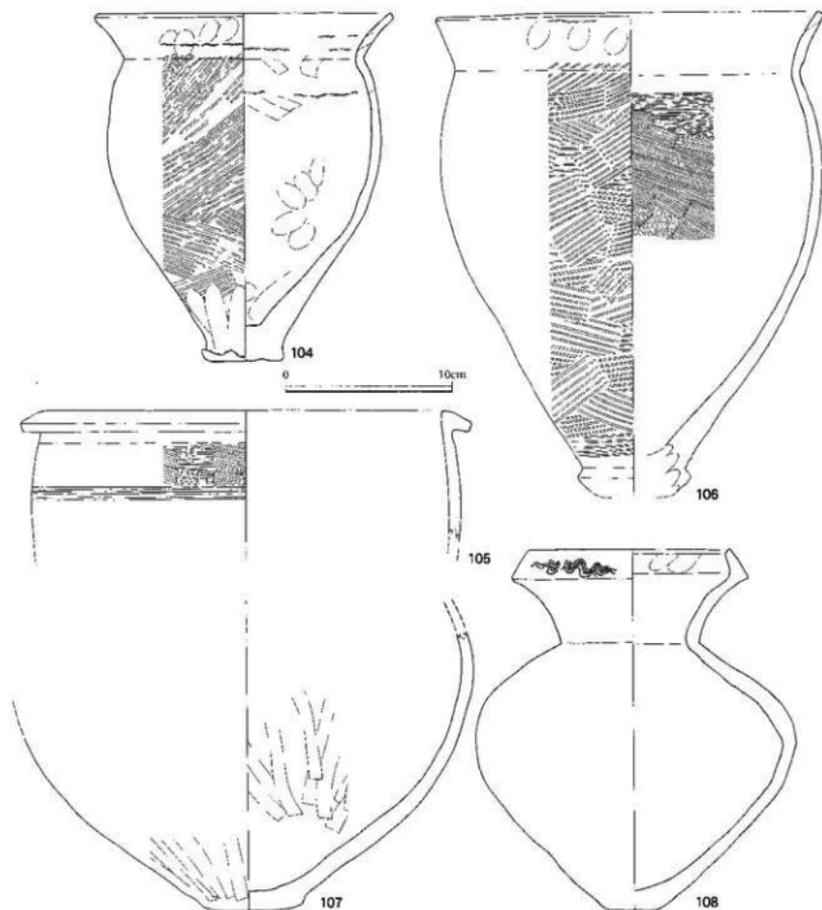


第38図 SD7平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)

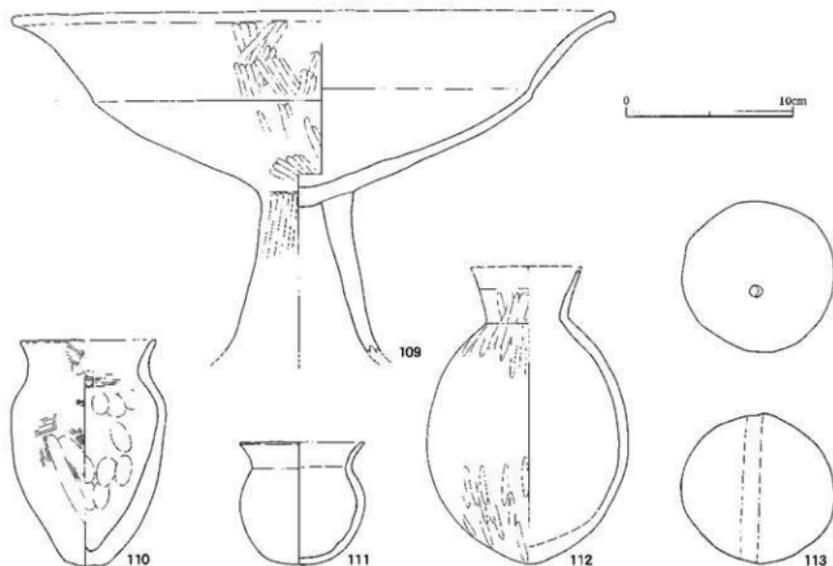
思われる。

SD7 (7号土坑) (第38~40図)

調査区の東端、ほぼ中央(B区北東端)において検出された土坑で、下半で一度段がついたのち、平面長楕円形の底面が壁面に掘り込まれる。現状において上端の平面形はやや不整形であるが、土層観察ではXI層以上において壁面から崩れたと思しき地山のブロックが混入しており、平面西方の広がり、崩落によるものと解釈できる。したがって遺構本来の上端平面形は真円に近いものであったと考えられる。土坑本来の形に近いと思しき部位での上端最大径は1.51m、下半につく段の最狭部位の最大径は0.86m、底面の最大径は1.37m、深さは最大で1.08mである。



第39図 SD7出土遺物① (Scale: 1/3)



第40図 SD7出土遺物② (Scale : 1/3 ※113のみ1/1)

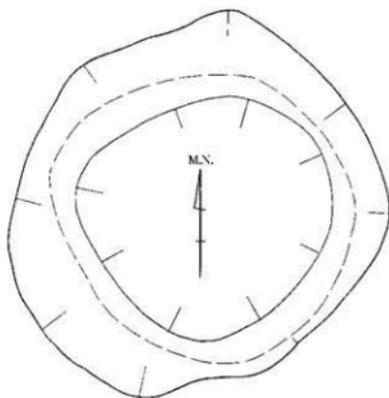
遺物はIX層以上に集中する。104はIX層から出土した中型の甕である。完形ではないが、口縁部から底部までが揃い、全形を復原可能である。外面調整としてほぼ全面にタタキを施したのち、底部、口縁部にはナデを施す。内面調整はナデおよび指オサエであり、ナデは板状工具によるものと思われる。底部はやや不整形の平底であるが、全体的に作りは丁寧である。口縁部の屈曲はさほど強くはないが、口縁端部の面形成は行われている。105は甕の口縁部である。口縁下に3条の沈線が巡る。外面調整はハケ、内面調整はハケののちナデである。106はIX層より出土した甕で、底部を欠損する。口縁部の屈曲はさほど強くはないが、口唇部の面形成は丁寧に行われている。外面には全面タタキが入り、口縁部にはナデ、および指オサエが施される。内面はハケののち、口縁部にはナデが施される。107もまた同じくIX層より出土した壺の胴部である。上半部を欠くが、球形に近い胴部と思われる。胴部最大径(復原)28.2cmと大型で、平底の底部がしっかりと作り込まれている。調整は内外面ともに板状工具によるナデである。108は遺構埋土最下層であるXIV層から出土した二重口縁の壺である。口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形である。二次口縁部が内傾し、外面には波状文が刻まれる。表面の摩滅が激しいが、外面の調整はナデによるものと思われる。109はIX層より出土した高坏である。復原口径36.2cmと大型で、脚部を欠くが、坏部は丸みのある受け部と外反する口縁部によって構成される。外面の調整はミガキ、内面の調整はナデによる。110は器高13.8cmの小型広口壺である。IX層より出土し、口縁部が一部欠損するもののほぼ完形である。全体的に作りが粗雑な印象を受ける。外面には焼成時の黒斑が付着し、また焼成が十分ではなかったと見え、断面は芯が焼け残り、サンドイッチ状を呈している。調整はハケののちナデによる。111は、

口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形に近い小型の壺である。器高 7.5 cm で、球形の胴部に広めの頸部、ゆるく外反した口縁部を持つ。底部は若干意識して形作られているが、ほぼ丸底に近い。調整は内外面ともにナデによる。112 は小型の壺である。通常の壺に比して胴部に張りがなく、若干奇異な印象を受けるが、短頸壺に分類されよう。口唇部を欠損するが、器高は 18 cm 程度と思われる。全体にミガキを施し、胴部中位は丁寧なナデによる。胴部下半には焼成時の黒斑が残る。113 は I 層出土で、直径 3.1 cm の球形の土製品である。重量は 23.8 g で、中ほどに径 2 mm 程度の穿孔が施される。土鏝かとも思われるが、表面は丁寧なナデによって仕上げられ、擦痕等の使用に伴うと思しき痕跡も見当たらない。同様の土製品は宮崎県都城市中大五郎第 2 遺跡や宮崎市間越遺跡の竪穴住居からも出土している。

IX 層出土の甕 2 点 (104・106) および高坏 (109) は、いずれも松永編年 3 期段階 (庄内 1 式並行) に位置づけられる。また、最下層出土の二重口縁壺 (108) は、第二口縁部の内傾度が大きく、松永編年 1・2 期 (弥生時代後期中葉～後葉) に相当する。先述のとおり、IX 層以上には壁面から崩れたと思しき地山のブロックが含有されており、二次的な堆積である可能性がある。遺構の年代としては、最下層出土の 108 に準拠すべきであろう。

SD 8 (8号土坑) (第 41 図)

調査区の東端、ほぼ中央 (B 区北東端) において検出された平面円形の土坑である。SD 7 と同じく遺構下半において段が付き、壁面を掘り込んで底面が形成される。遺構上端の最大径は 1.74m、底面の最大径は 1.26m、検出面から底面までの深さは最大で 0.98m である。底面から平底の甕底部が出土しているが、図化はできなかった。

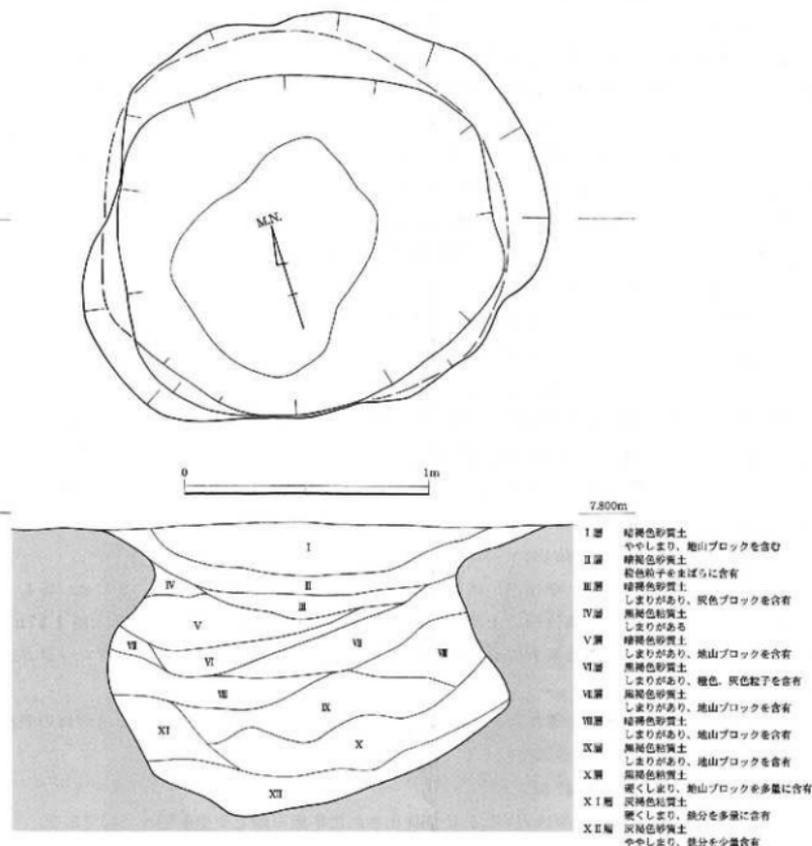


第41図 SD8平面実測図 (Scale: 1/20)

SD9 (9号土坑) (第42・43図)

調査区の東端、ほぼ中央(B区北東端)において検出された、所謂、断面袋状の土坑である。底面はすり鉢状で、明確な下端はない。上端の平面形はやや不整形で、最大径は1.97m、袋状部分の最大径は1.74m、深さは最大で1.21mである。遺構埋土中、X層には壁面から崩れたと思しき地山のブロックが大量に含まれていたため、X層以上については、二次的な堆積である可能性が高い。同様の理由より、現状で袋状になっている断面形も、遺構本来の姿を厳密に留めてたものとは言えない。

114は最下層であるⅫ層より出土した単口縁の広口壺である。口縁部を一部欠損するが胴部は完形である。表面の摩滅が激しいが、一部に細かなハケ目が残る。底部および口縁上半部は



第42図 SD9平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)

ハケののちにナデを施す。底に刀子状の工具によると思しき十字の線刻が施され、また口縁部には一部、赤色顔料塗布の痕跡が残る。115 も同じくⅦ層より出土した二重口縁壺の口縁部である。第2口縁外面に波状文が施される。内外面ともに調整はハケによる。116 は甕の口縁部片である。外面調整はハケ、内面調整はナデである。

最下層出土の115については、第2口縁の内傾度が高く、松永編年1・2期（弥生時代後期中葉～後葉）に比定される。

SD12 (12号土坑) (第44・45図)

調査区の東端、ほぼ中央（B区北東端）において、弥生時代の周溝状遺構SL7に切られて存在する平面やや不整形の土坑である。中に段を持ち、底面は壁面を掘り込んで形成されている。上端の最大径は1.61m、中位の段が最狭となる高さでの最大径は1.30m、底面の最大径は1.28m、深さは最大で1.20mである。埋土中には、壁面の崩れと思しき地山のブロック等は混入していない。

遺物は遺構下半に集中する。117はⅥ層出土の甕である。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。表面の摩滅が激しいが、外面には、口縁部をのぞき、ほぼ全面にタタキの施されていることが見受けられる。118は甕の底部である。外面にはタタキが確認できるが、内面の調整は明瞭ではない。119はⅥ層より出土した大型の壺の胴部および底部である。外面の調整はハケ、内面はハケののちナデを施している。120はⅦ層より出土した、ほぼ完形の広口壺である。外面、内面ともに目の細かなハケ調整による。また、外面胴部下半には煤が付着する。121は広口壺である。肩の張った扁球胴に外反する口縁部がつく。外面、内面ともに調整は判然としないが、ナデ調整と思われる。

Ⅵ層出土の平底の甕117は松永編年3・4期（庄内1・2式並行）に比定される。同層出土の壺119についても、最大径が胴部中ほどまで下がっており、117の時期と矛盾のない段階の所産と見受けられる。最下層ではないものの、底面直上であるⅦ層出土の広口壺120は、胴部最大径が上半部にあり、117に先立つ、松永編年1・2期（弥生時代後期中葉～後葉）段階に比定されよう。ゆえに埋土の堆積年代において、遺構下半の層の中でも、上位と下位に若干の年代差が看取でき、Ⅶ層出土の120が遺構の構築、使用の年代に近い値を示しているものと考えられる。

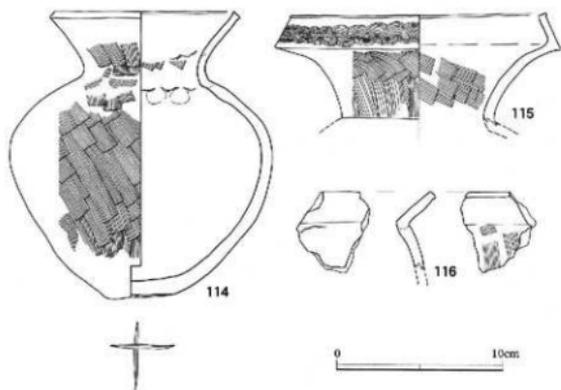
SD13 (13号土坑) (第46図)

調査区南東部（B区東部、中ほど）において弥生時代の周溝状遺構SL7、SL8、SL9に切られて存在する平面長楕円形の土坑である。上端の最大径1.85m、底面の最大径1.37m、検出面から底面までの深さは最大で0.34mである。埋土中、Ⅰ・Ⅱ層には地山のブロックが混入する。

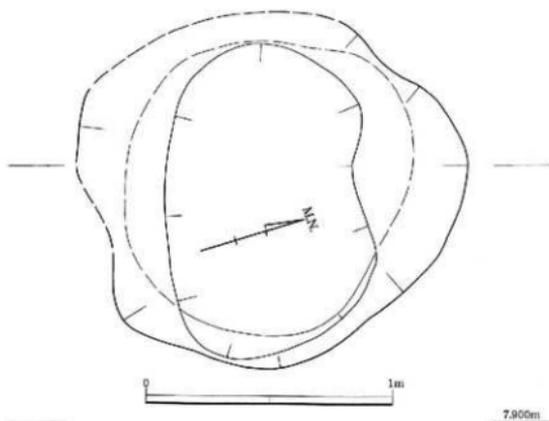
周溝状遺構によって多くを飛ばされており、遺物の出土は少量であった。122は深鉢の底部および鉢部の下半である。外面調整はミガキ、内面調整はナデである。

SD14 (14号土坑) (第47図)

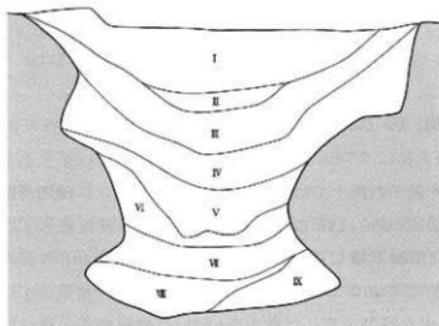
調査区南東部（B区東部、中ほど）において検出された平面円形でやや小型の土坑である。



第43図 SD9出土遺物 (Scale : 1/3)

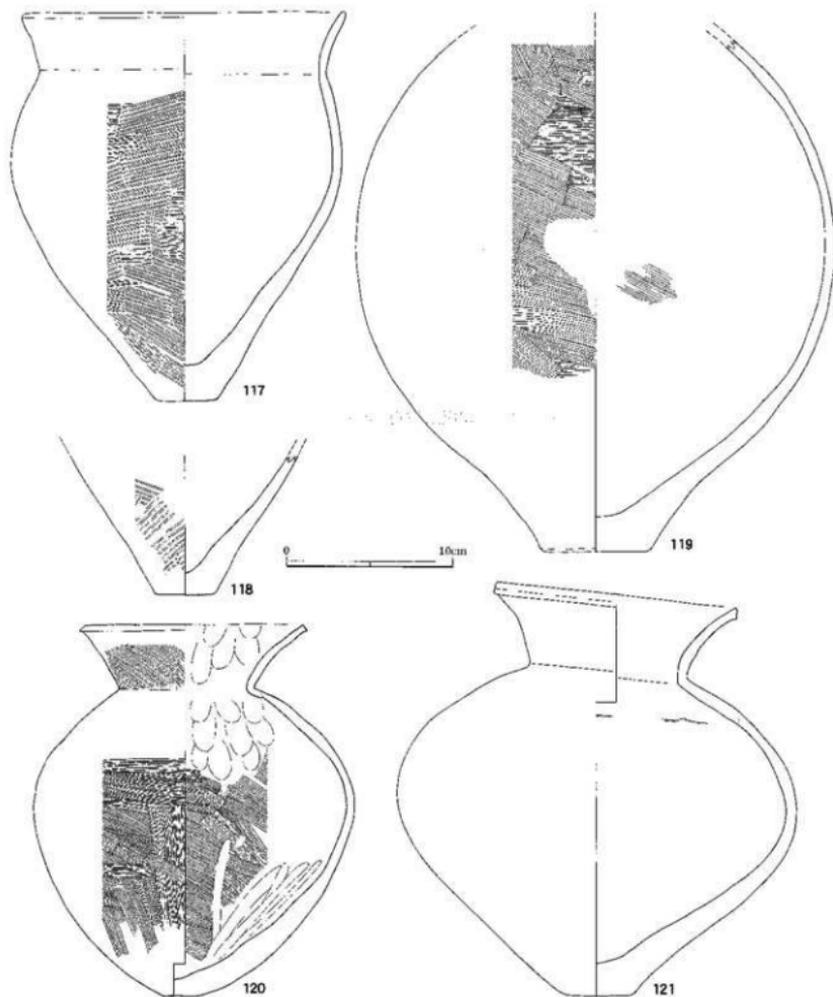


7.900m



- I層 暗褐色砂質土
細くしまり、褐色粒子、鉄分を含有
- II層 灰褐色砂質土
密くしまる
- III層 暗褐色砂質土
やや塑性があり、鉄分を含む
- IV層 黒褐色砂質土
粗粒が強く、灰色砂をまばらに含有
- V層 黒褐色粘質土
しまりがあり、灰色砂を含む
- VI層 明灰色砂質土
やや粘性があり、地山ブロックを含む
- VII層 暗灰色砂質土
明灰色砂を含む
- VIII層 黒褐色粘質土
褐色粒子をまばらに含有
- IX層 暗褐色粘質土
褐色、黒褐色のブロックを多量に含有

第44図 SD12平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)

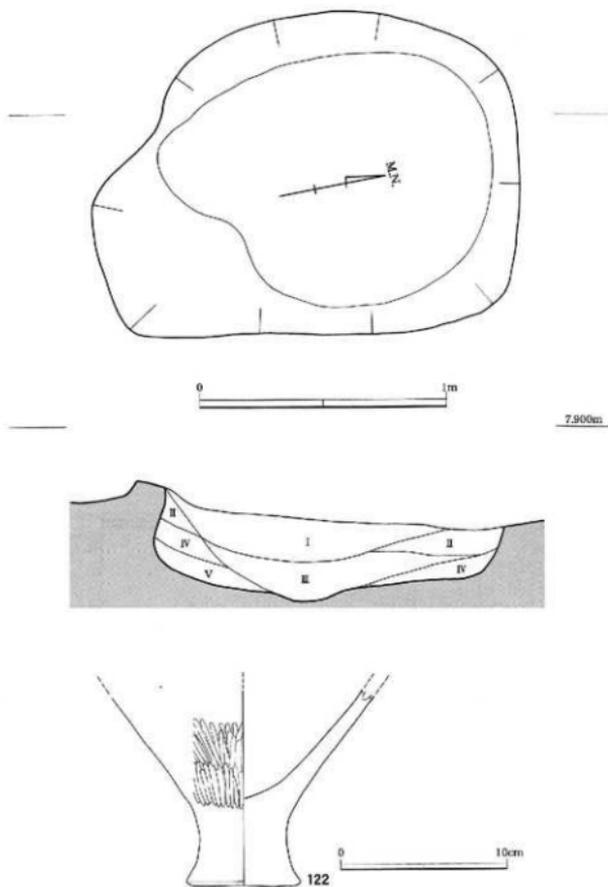


第45図 SD12出土遺物 (Scale : 1/3)

上端の最大径は 1.06m、底面の最大径は 0.74m、深さは最大で 0.47mである。

123 はやや長胴の甕である。外面、内面ともにハケ調整を施した後、口縁部外面および胴部下半内面ではナデを施して仕上げている。125 は小型の深鉢である。ほぼ完形で、若干上げ底気味の底部を持つ。内外面ともに摩滅が激しく、調整は詳らかではないが、外面の底部には指頭押圧痕が、内面口縁部付近にはナデのあとが見てとれる。

123 は底部を欠損するため、厳密な時期比定には向かないが、口縁屈曲部の稜は明瞭であり、

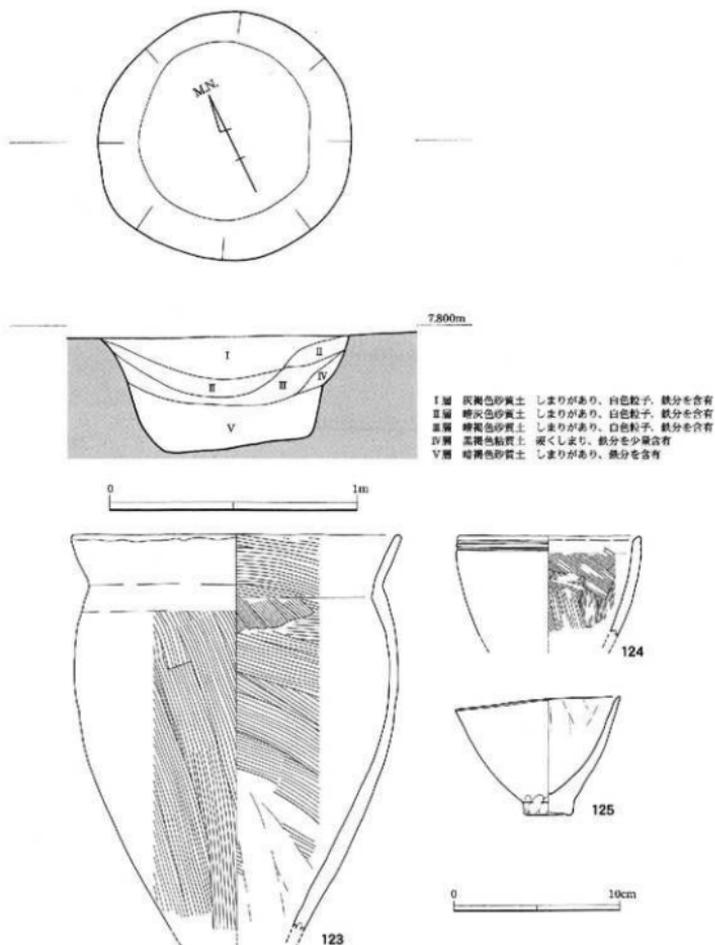


第46図 SD13平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20) 、出土遺物実測図 (Scale : 1/3)

口縁端部の面形成も丁寧であることから、松永編年2・3期(弥生時代後期後葉～庄内1式並行)に相当すると思われる。

SD15 (15号土坑) (第48・49図)

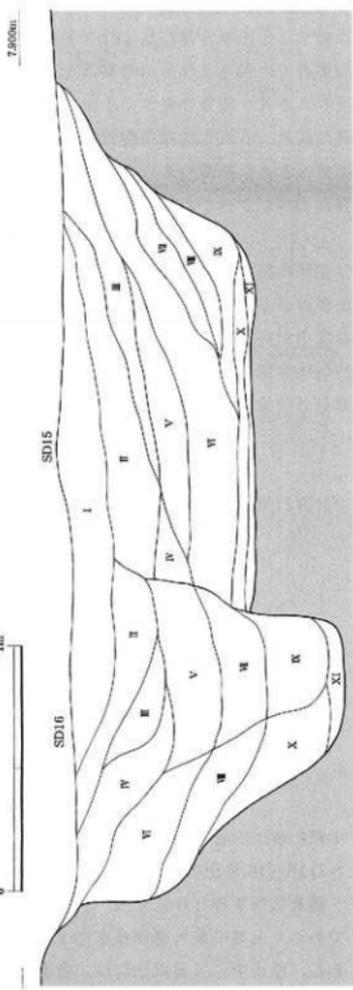
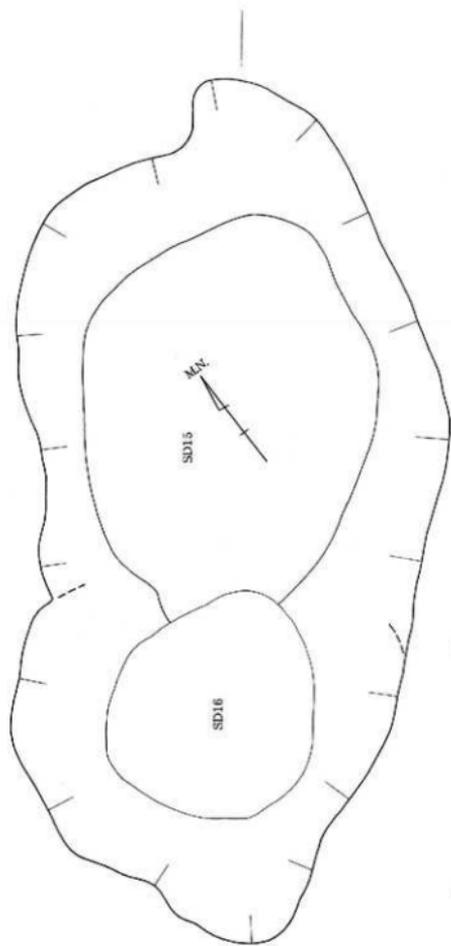
調査区南東部(B区東部、中ほど)においてSD16に切られて存在する平面楕円形の土坑である。上端の最大径は推定で2.6m、底面の最大径は推定で1.7m、深さは最大で0.82mである。埴土はVI層以上に壁面から崩れたと思しき地山のブロックが混入し、またVII～X層については



第47図 SD14平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)、出土遺物実測図 (Scale: 1/3)

地山の崩れそのものである。

遺物の出土は少量であり、また厳密に遺構本来の堆積と考えられるXI・XII層出土の遺物は皆無であった。126は極めて薄手の甕の口縁部である。倒L字形の直口口縁で、口縁部突帯の断面形は三角形を成す。摩滅が激しく、内面、外面ともに調整は判然とししない。127は壺の口縁部かと思われる。IV層より出土し、口縁上部に3条の沈線が巡る。外面調整はミガキ、内面調整はナデである。126は、口縁部突帯の断面形状が三角形であり、石川編年Ⅱa期(弥生時代



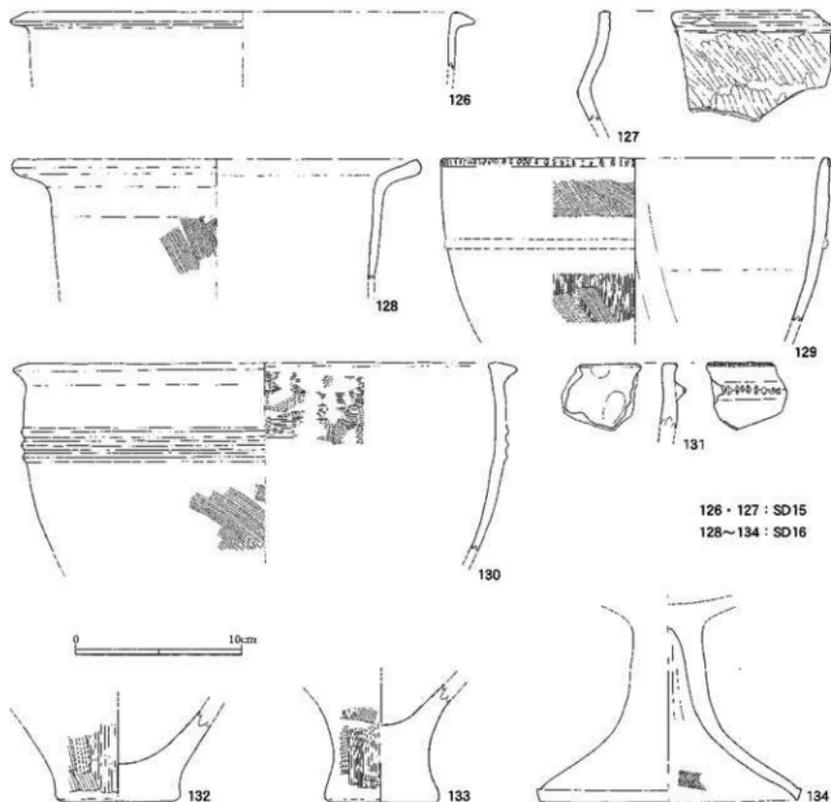
SD15

- I層 暗褐色土 やややわらかく、塑性あり
- II層 暗褐色土 硬くしまり、池山ブロックを少量含有
- III層 暗灰色土 硬くしまり、池山ブロックを少量含有
- IV層 暗褐色土 やわらかく、池山ブロックを含有
- V層 暗褐色粘質土 池山ブロック多量に含有
- VI層 暗灰色粘質土 池山ブロック多量に含有
- VII層 暗灰色土 池山ブロック多量に含有
- VIII層 灰色砂質土 塑性が高く、池山ブロック含有
- IX層 暗灰色土 硬くしまり、池山ブロックを多量に含有
- X層 灰色砂質土 しまりなく、池山ブロックを含有
- XI層 灰色砂質土 粒子が細かく、しまりあり

SD16

- I層 暗褐色土 やややわらかく、塑性あり
- II層 暗褐色土 硬くしまる
- III層 灰色粘質土 赤わめて硬くしまる
- IV層 暗褐色土 硬くしまる
- V層 暗灰色粘質土 硬くしまり、池山ブロックを少量含有
- VI層 暗褐色土 やわらかく、池山ブロックを含有
- VII層 灰色砂質土 硬くしまり、池山ブロックを含有
- VIII層 明灰色砂質土 硬くしまり、池山ブロックを含有
- IX層 灰色砂質土 硬くしまり、池山ブロックを含有
- X層 暗灰色粘質土 しまりなく、粒子が細かい、池山ブロックを含有
- XI層 暗褐色粘質土 硬くしまる

第48図 SD15・16平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)



126・127：SD15
128～134：SD16

第49図 SD15・SD16出土遺物 (Scale: 1/3)

中期初頭)に比定される。

SD16 (16号土坑) (第48・49図)

調査区南東部(B区東部、中ほど)において前述のSD15を切って存在する平面円形の土坑である。上端の最大径は推定で1.6m、底面の最大径は推定で0.96m、深さは最大で1.14mである。埋土中、X層以上には、含有量の多寡に違いはあるものの、ほぼすべての層に壁面の崩れと思しき地山のブロックが混入しており、特にX層は地山のブロックそのものである。つまり、最下層であるXI層を除き、他の層は二次的な堆積である可能性がある。

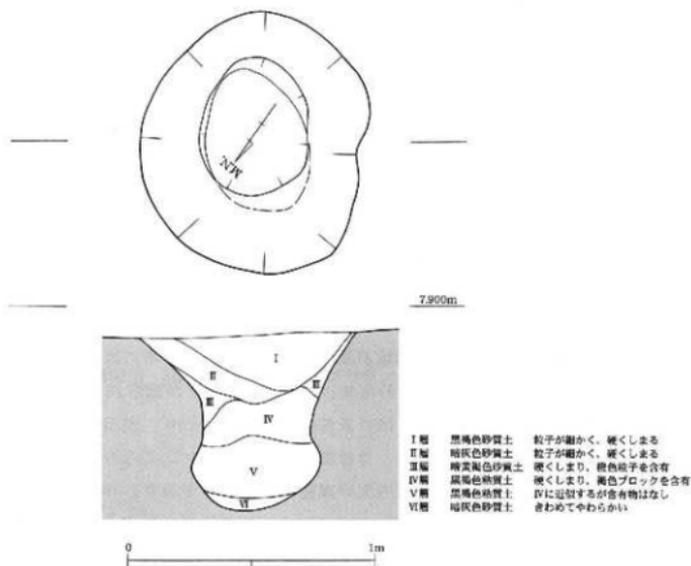
128はI層より出土した甕の口縁部である。いわゆる倒L字状に近いが、若干、くの字形への移行の気配が見受けられる。外面の調整は胴部ハケ、口縁部ナデ、内面は口縁部、胴部ともにナデである。129も同じくVI層より出土した「下坡式」甕の口縁部および胴部上半である。口縁部は若干肥厚され、刻みが施される。また口縁下にも突帯を巡らした痕跡がある。外面調整はハケ、内面調整はハケのちナデである。130はVI層より出土した甕の口縁部および胴

部である。口縁部はいわゆる倒L字状で、口唇部の断面形状は三角形を呈す。口縁部より少し下がった位置において、無文で断面三角形の突帯が3条巡る。131はⅦ層より出土した甕の口縁部である。所謂「下城式」の甕で、口唇部および口唇直下の突帯にキザミを持つ。外面にはナデ、内面には指オサエの痕が確認できる。132はⅪ層より出土した壺の底部である。外面の調整はハケ、内面の調整はナデによる。133はⅪ層より出土した甕の底部である。外面の調整はハケ、内面はナデである。134はⅨ層より出土した高坏の脚柱部および脚部である。表面の摩滅が激しく、調整については内面、外面ともに判然としないが、内面についてはハケ調整の痕跡がかすかに残る。

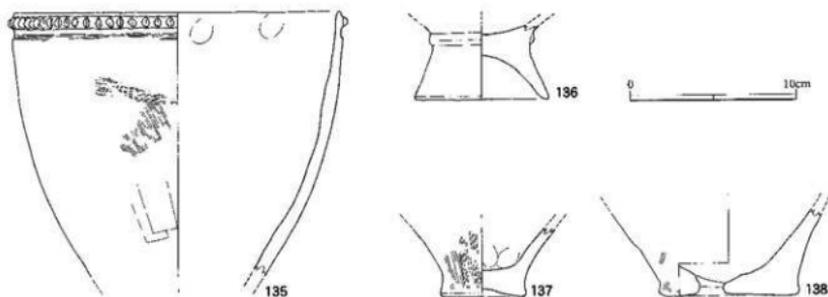
Ⅺ層より出土した 132・133 はともに隆々たる平底の甕底部であり、弥生時代中期の所産である。最下層出土の2点からは、あまり時期を絞り込むことができないが、上層であるⅥ層出土の 129 および 130、ならびにⅦ層出土の 131 が、いずれも石川編年Ⅱ a 期（弥生時代中期前半）に比定されるものであることから、本遺構の構築、使用の年代は弥生時代中期前半の枠内に収まるものと考えられる。なおⅠ層出土の 128 は、石川編年Ⅳ a 期（弥生時代後期初頭）に比定される

SD17 (17号土坑) (第50・51図)

調査区南東部（B区東部、中ほど）において検出されたやや小型の土坑で、断面形は袋状に近く、底面はすり鉢状である。上端の最大径は1.08m、深さは最大で0.72mである。



第50図 SD17平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)



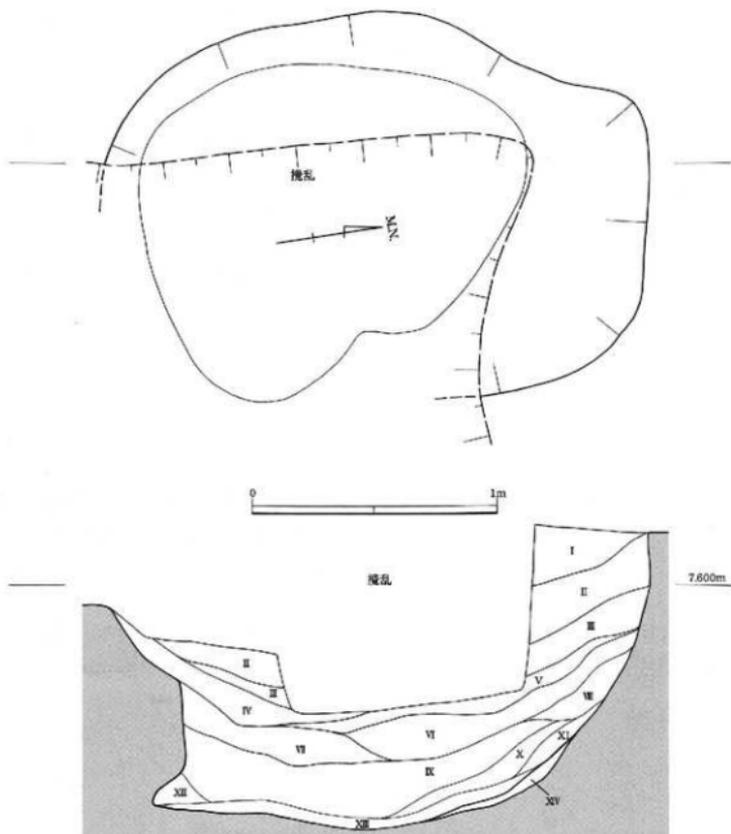
第51図 SD17出土遺物 (Scale: 1/3)

135はV層出土の甕の口縁部および胴部である。口縁部の上端近くにキザミを入れた突帯を巡らす。また突帯の直下には断続的で不整形な沈線をも2条巡らす。外面の調整は胴部上半ではハケのち、上から丁寧なナデを施すが、胴部下半では板状工具によるナデが見られる。136も同じくV層より出土した甕の底部である。上げ底になっており、底部と胴部の境に無文の突帯を巡らす。摩滅が激しく、調整は明らかではないが、突帯の剝離した部分に横ナデの痕跡が見える。137はI層より出土した甕の底部である。底部は若干上げ底気味になっている。外面の調整はハケ、内面はハケのちナデを施している。138は有孔鉢の底部と思しき破片である。表面の摩滅が激しいが、外面の調整はハケによる。特筆すべきは、底に径1.3cmほどの小孔が穿たれている点である。焼成前に、指ないし棒状の工具を用いて、外面、内面の両側から穿孔を施したものと思われる。この底部孔が実用的なものか、あるいは儀礼に伴うものかはわからないが、少なくとも、煤などの使用に伴う被熱の痕跡は見出せない。

遺構内埋土下層であるV層出土の135は石川編年Ⅱa期(弥生時代中期初頭)に比定される。なおI層出土の137は弥生時代後期の所産であり、遺構本来の時期を表すものとは認め難い。
SD18 (18号土坑) (第52・53図)

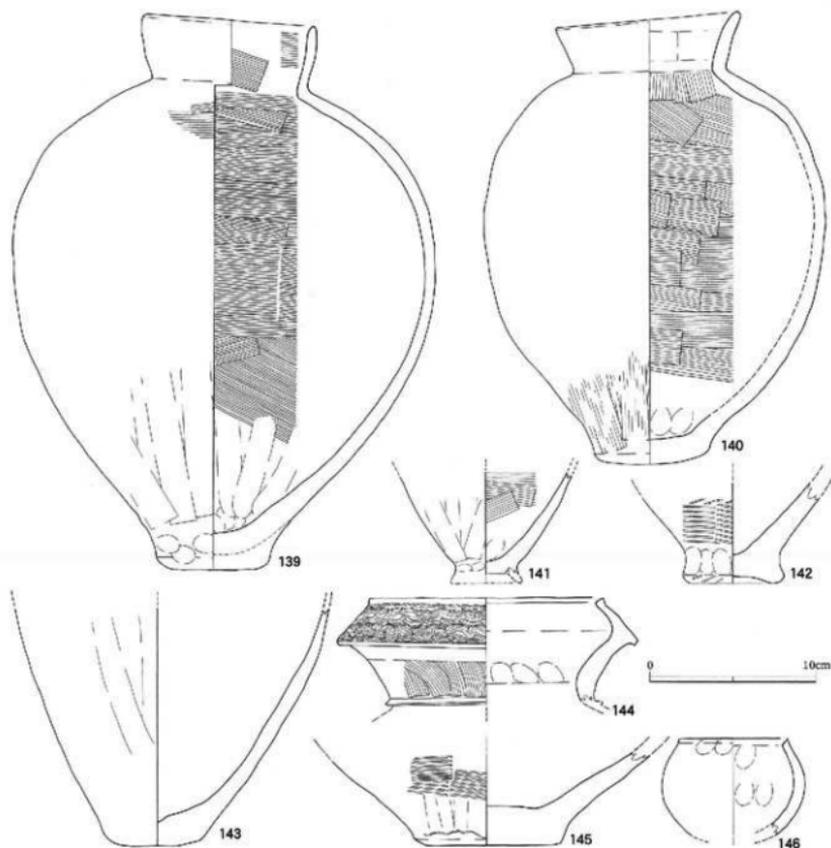
調査区南東部(B区南東部)において検出された平面楕円形と思しき土坑で、多くを攪乱によって破壊されている。上端の最大径は推定で2.3m、底面の最大径は1.65m、残存部位における深さは最大で1.09mである。底面の一部は壁面に掘り込まれている。

遺構内下半の層であるIX層に遺物の出土が集中する。139は短頸壺である。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形に近い。表面の摩滅が激しいが外面の胴部下半には板状工具によるナデの痕跡が残る。また内面にはほぼ全面にわたり、目の細かなハケが施されている。140~143・145は、いずれもIX層出土である。140は口縁部に一部欠損があり、表面の摩滅が激しいが、ほぼ完形の短頸壺である。外面の調整は、口縁部をのぞき、ハケによるものと思われるが、摩滅により判然としない。外面に比して、内面の調整はよく残っており、ハケの単位、施工の方向まで明瞭である。141は小型深鉢の胴部下半である。外面は丁寧な板ナデによって仕上げられ、内面にはハケ調整が施される。142はやや上げ底気味の形状をなす甕の底部で、胴部には



- | | | | | | |
|------|--------|---------------------|--------|--------|-------------------|
| I層 | 黄褐色砂質土 | 硬くしまり、褐色ブロックをまばらに含有 | Ⅷ層 | 黄褐色粘質土 | 硬くしまり、褐色粒子をまばらに含有 |
| II層 | 写褐色砂質土 | 硬くしまり、褐色粒子を少量含有 | Ⅸ層 | 灰褐色粘質土 | 硬くしまり、灰白色粒子を少量含有 |
| III層 | 写褐色砂質土 | やややわらかく、鉄分、褐色粒子を含有 | X層 | 灰褐色砂質土 | 硬くしまり、白色粒子をまばらに含有 |
| IV層 | 黄褐色砂質土 | 硬くしまり、やや粘性を得つ | X I層 | 黄褐色砂質土 | 粒子が大きき、硬くしまる |
| V層 | 黄褐色砂質土 | 硬くしまり、褐色粒子を少量含有 | X II層 | 灰白色砂質土 | 粒子が大きき、硬くしまる、粘性あり |
| VI層 | 黄褐色砂質土 | 硬くしまり、灰白色粒子を少量含有 | X III層 | 灰褐色砂質土 | 硬くしまり、鉄分を多量に含有 |
| VII層 | 黄褐色粘質土 | 硬くしまり、鉄分を多量に含有 | X IV層 | 灰褐色砂質土 | 硬くしまる |

第52図 SD18平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)



第53図 SD18出土遺物 (Scale : 1/3)

タタキが施される。特筆すべきは、底部側面においてもタタキが施されている点で、それによって面が整えられている。143 は大型の甕の底部である。平底であり、外面の調整はハケのちに丁寧なナデを施し、内面もまたナデが施されている。144 はVI層より出土した二重口縁壺の口縁部である。第2口縁外面には波状文が施され、頸部には突帯と思しき部位が確認できる。外面の調整はハケとナデ、内面はナデと指オサエによる。145 は壺の底部である。平底で、胴部外面にはタタキが施される。内面の調整にはハケを施した後、ナデを行っている。146 は小型の直口壺である。内面、外面ともに調整はナデおよび指オサエによる。

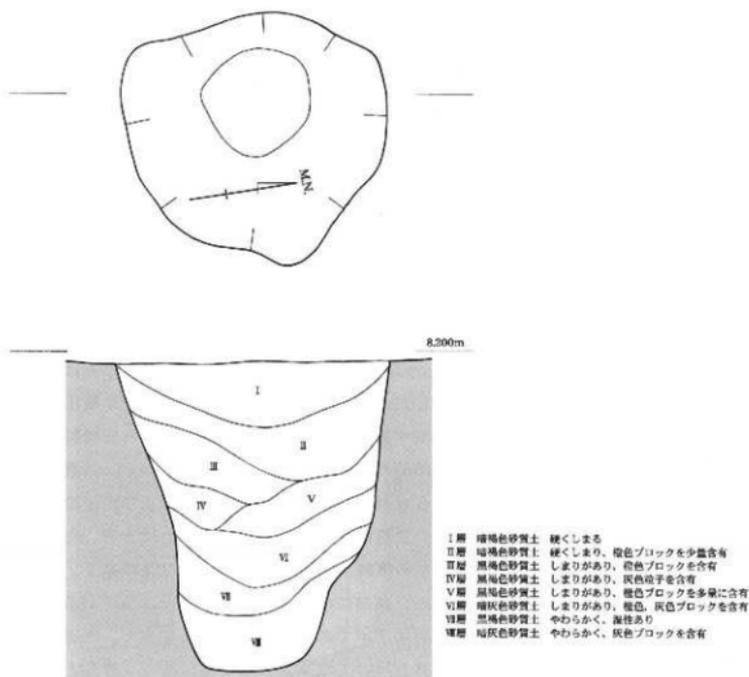
IX層出土の遺物は、142 より松永編年1期ないし2期（弥生時代後期中葉～後葉）の所産と

考えられる。VI層出土の144は第2口縁の内傾度が高く、松永編年1期（弥生時代後期中葉）に比定されることから、本遺構の時期を弥生時代後期中葉と考えたい。

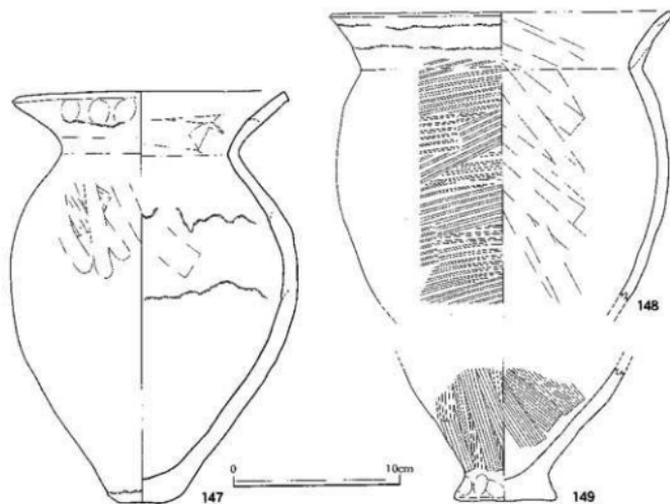
SD20 (20号土坑) (第54・55図)

調査区南東端（B区南東部）において、弥生時代の周溝状遺構SL12に切られて存在する、平面がやや不整形な円形の土坑である。上端の最大径は1.12m、底面の最大径は0.44m、深さは最大で1.28mである。

147はVIII層より出土した単口縁の広口甕である。やや倒卵形気味の長胴に外反する口縁部がつく。胴部半ばから下半にかけて黒斑が残る。内面のみならず外面にも一部、粘土継ぎ目の痕跡を残すなど粗製の甕ではあるが、外面および口縁部内面には赤色顔料を塗布した痕がある。148はI層出土の甕口縁部および胴部で、外面の一部に煤が付着する。外面の調整はタタキ、内面は全面に板状工具によるナデが施される。内面においてはI丁寧にナデを施すことによって、粘土紐の接合痕を残していないのに対し、口縁部外面においては接合痕をナデ消さず、そのままに残していることが、多少、奇異に感じられる。149は甕の底部である。底の形状は平底に



第54図 SD20平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)



第55図 SD20出土遺物 (Scale : 1/3)

近く、外面、内面ともにハケ調整による。

最下層であるVIII層出土の広口壺147は弥生時代後期前葉ないし中葉の所産と見受けられる。I層出土の148は、口縁屈曲部内面における稜が明瞭で、松永編年1・2期(弥生時代後期中葉～後葉)に比定される。したがって遺構の時期としては147に準拠して弥生時代後期前葉～中葉と考えられるが、最上層であるI層と最下層であるVIII層の間に時期差が存在するか否かについては、遺物からは厳密な結論は出ない。

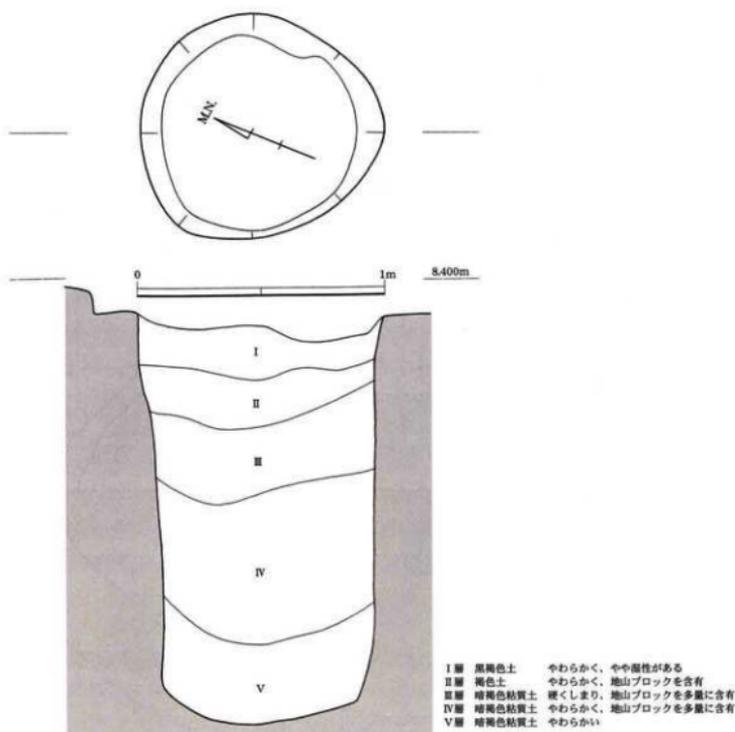
SD21 (21号土坑) (第56～58図)

調査区南西部(B区西部)において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径は1.00m、底面の最大径は0.80m、深さは最大で1.65mである。埋土中IV層以上においては地山のブロックを含有するが、ブロックひとつひとつが小さめで、壁面の崩れによるものとは考え難い。

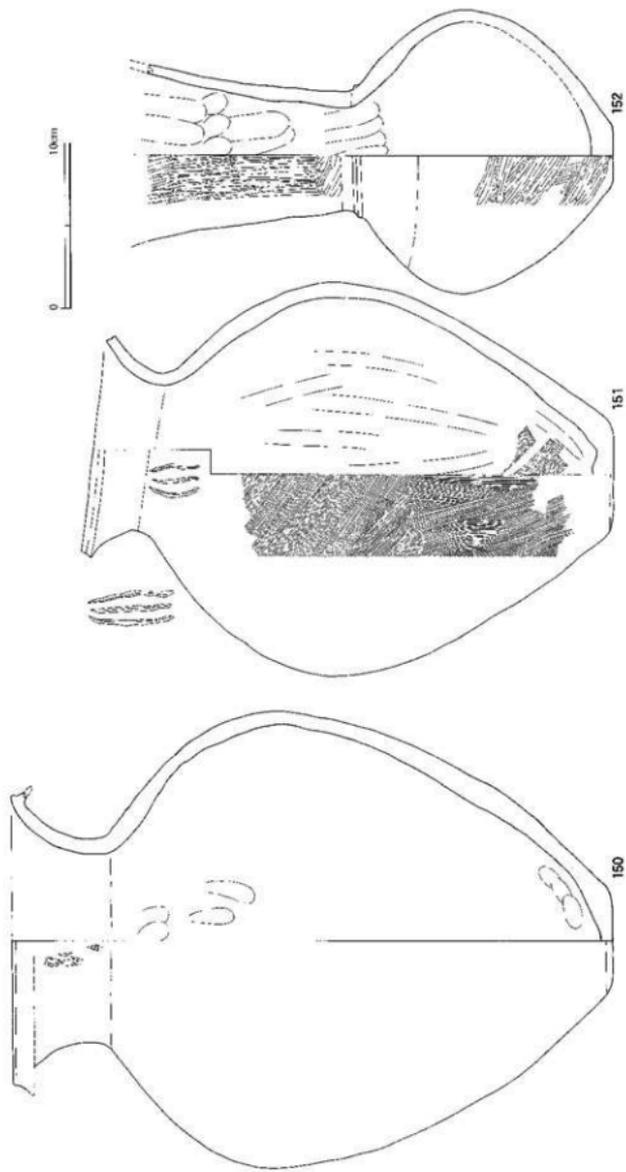
遺物の出土は最下層であるV層に集中した。ここに図示した遺物はすべてV層出土である。150は単口縁の長胴壺である。表面の摩滅が激しいが、外面調整はハケ、内面調整は指ナデによる。151は短頸壺である。平底で、倒卵形の胴部に外反する口縁部がつく。口唇部の面形成は明瞭である。肩部外面に縦位の沈線が3本刻まれている。また外面および内面のほぼ全面にわたり赤色顔料が塗布されている。外面の調整は胴部がハケ、肩部以上はナデ、内面は基本的にナデであるが、底部付近においてはハケの痕跡が確認できる。152は長頸壺で、口縁上部を欠損するが、それ以下は良好な状態で残る。頸部には突帯が巡り、外面はほぼ全面にわたりミガキが施されている。153は大型の壺の胴部上半である。外面は全面ミガキ、内面はハケののちナデと思われる。外面にはハケ状の工具を用いて施文された文様がある。肩部と口縁部(ないし頸部)との境に横位の直線が引かれ、その直線から7cmほど下がった位置に同じく横位の

直線が刻まれる。その直線と直線の間に「6」の字状の重弧文が2つ配され、さらにその重弧文の間に刀子状の工具により縦位の直線が数条、線刻される。外面調整のミガキはこれらの文様を施文したのちに施されており、文様がミガキによって消されている部分が数箇所、見受けられる。またこのことにも関連するが、文様は全周しない。154は大型の高坏である。坏部は、直線的で深い受け部に、短めで大きく外反する口縁部により構成される。脚部はラッパ状に広がるが、裾部の外反は小さい。また脚部は完形で出土しているが、透かし孔の穿孔はない。155は球形胴の小型甕である。調整は内外面ともにナデによる。156は大型の甕である。上げ底で、端部が外に張り出す底部に、倒卵形の胴部、内面に明確な稜を持ち屈曲する短い口縁部を持つ。全体的に作りは丁寧で、外面、内面ともに調整はハケである。

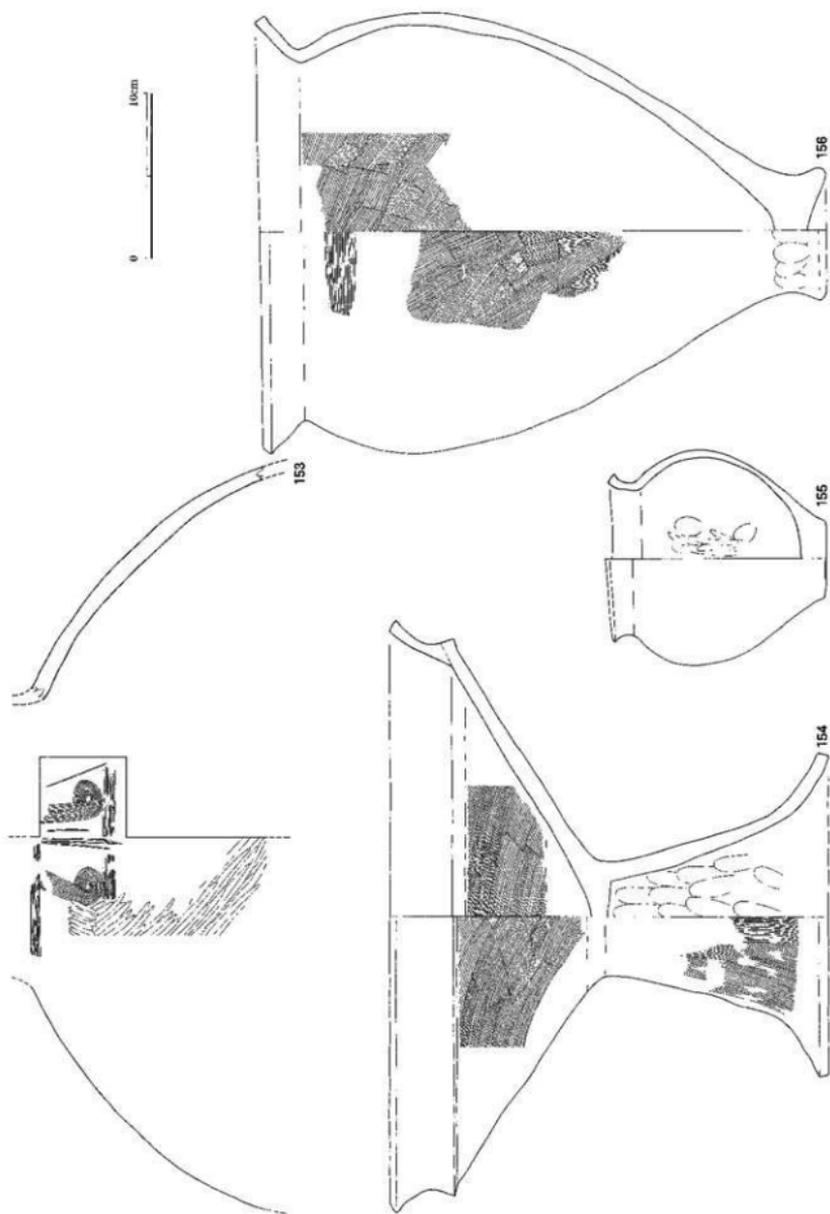
長胴の壺である 150・151 は、ともに胴部最大径が上半にあり、弥生時代後期前葉～中葉の枠内で捉えられる。大型の甕である 156 は、口縁部の屈曲の度合いから、同じく弥生時代後期前葉～中葉の所産である。大型の高坏 154 は、直線的で深い受け部、裾部の外反の小さな脚部



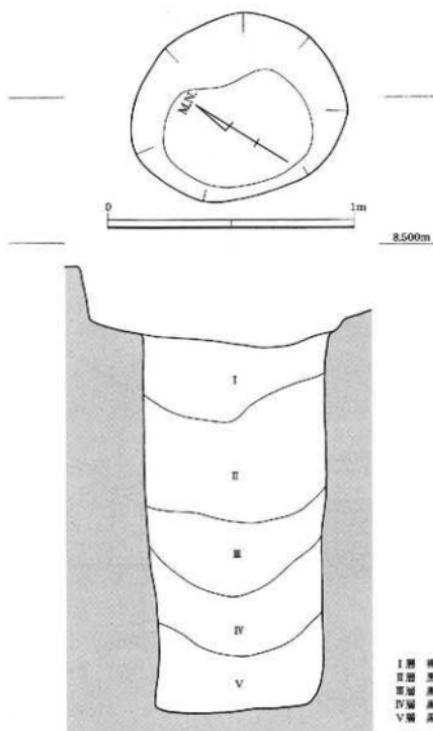
第56図 SD21平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)



第57圖 SD21出土遺物① (Scale : 1/3)



第58図 SD21出土遺物② (Scale : 1/3)



第59図 SD22平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)

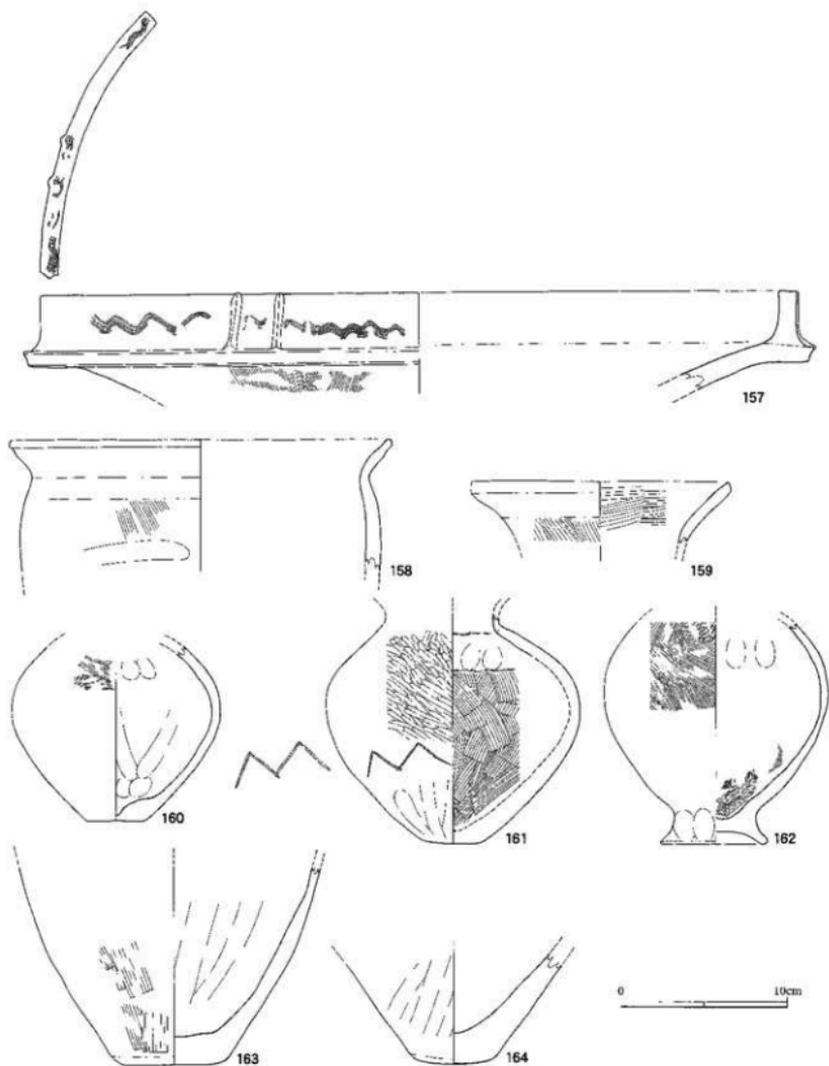
より、弥生時代後期中葉に比定される。したがって本遺構の時期は弥生時代後期中葉に比定され、また本遺構出土の遺物は弥生時代後期中葉の一括遺物として評価できる。

SD22 (22号土坑) (第59・60図)

調査区の南西部(B区南西部)において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径1.00m、底面の最大径0.62m、深さは最大で1.54mである。

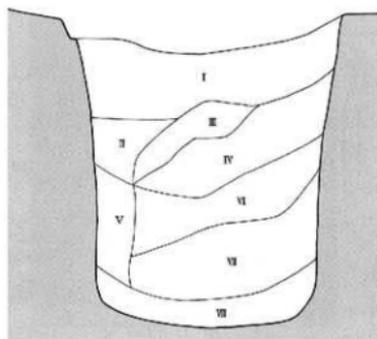
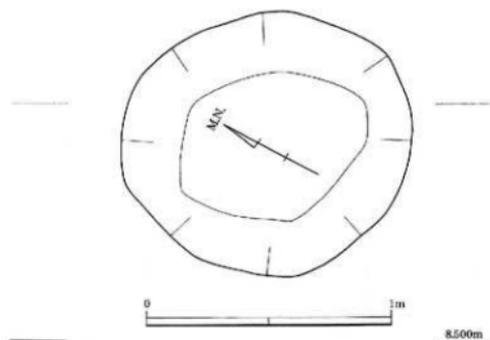
本遺構出土の土器は全体的に焼成の度合いがあまり良くなく、胎土中には含有物が多い。他の遺構より出土した土器と比べて、若干、異質な印象を受ける。遺物の出土は下層であるIV・V層に集中する。図示した遺物のうち158・161~163はIV層出土、157・159・160・164はV層出土である。

157は巨大土器の口縁部である。第2口縁外面に2本の粘土紐が縦位に貼り付けられ、同じく第2口縁外面および口唇部に波状文が施される。調整は内外面ともにハケとナデによる。器種としては、高坏、器台、二重口縁甕等が考えられるが、宮崎県野尻町大萩遺跡出土の器台との共通性があり、器台である可能性が高い。158は甕の口縁部である。厚手で焼成の状態もあ

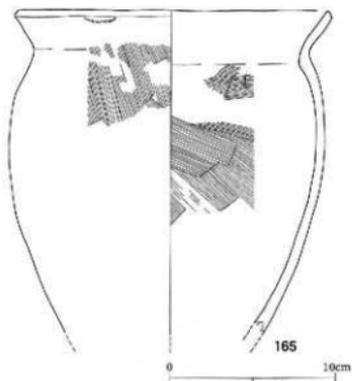


第60図 SD22出土遺物 (Scale : 1/3)

まり良くなく、本遺跡出土の土器の中では若干、異質である。外面の調整はハケののちナデ、
 内面はナデ調整による。159は壺の口縁部で、単口縁と思われる。内面、外面ともにハケ
 調整による。160は小型の壺の胴部である。口縁部を完全に欠損するので正確な器形はわから
 ないが、おそらくは細頸壺かと思われる。外面の調整はハケと思われるが、摩滅が激しく、確



- | | | |
|-------|--------|---------------------|
| I層 | 灰褐色砂質土 | やわらかい |
| II層 | 暗褐色砂質土 | 硬くしまり、褐色粒子を含有 |
| III層 | 黄褐色砂質土 | 硬くしまり、褐色、灰色ブロックを含有 |
| IV層 | 黄褐色砂質土 | しまりがあり、褐色ブロックを多量に含有 |
| V層 | 黄褐色砂質土 | しまりがあり、黄褐色ブロックを含有 |
| VI層 | 黄褐色粘質土 | しまりがあり、連山ブロックを多量に含有 |
| VII層 | 暗褐色粘質土 | しまりがあり、連山ブロックを多量に含有 |
| VIII層 | 黄褐色砂質土 | やわらかく、地山ブロックを含有 |



第61図 SD23平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)、出土遺物実測図 (Scale : 1/3)

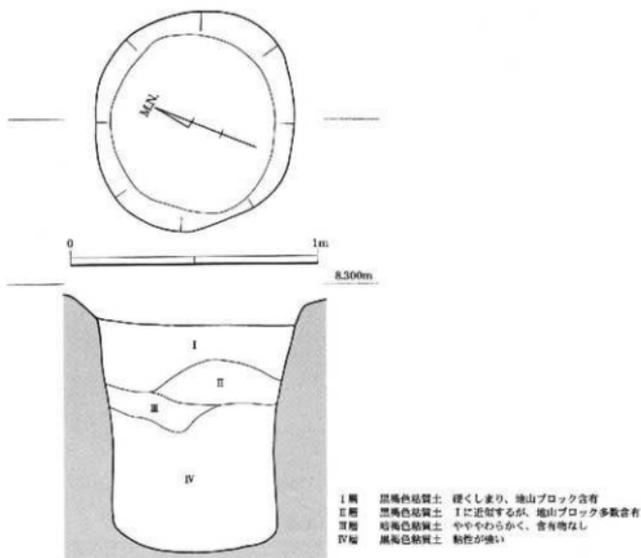
実ではない。内面の調整は指ナデである。161 は二重口縁壺ないし直口壺の胴部および底部である。口縁部は完全に欠損するものの、胴部に限っては完形である。外面の調整は胴部ミガキ、底部付近はナデ、内面は指オサエおよびハケである。胴部外面の下半に「M字」状の線刻が施されている。162 は、脚付き壺とでも表現すべき形状である。外面の調整はハケののちナデ、内面も同じくハケを施した後にナデを行っている。163 は長胴の壺の底部である。158 と同じく厚手で焼成の状態もあまり良くはなく、胎土中には径5mm以下の小礫が密に入る。外面調整はハケ、内面調整は指ナデである。164 も同じく長胴の壺の底部である。表面の摩滅が激しいが、外面の調整はナデである。

出土量に反して、時期判定に適した資料には恵まれていない。壺の上半部である158は、口縁部の屈曲度から弥生時代後期後葉～庄内1式並行段階の枠内に収まるものと見受けられる。

SD23 (23号土坑) (第61図)

調査区の南西部(B区南西部)において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径1.20m、底面の最大径0.82m、深さは最大で1.14mである。

165は最下層であるⅢ層より出土した壺である。口縁部の一部および底部を欠損し、表面の摩滅も激しく、残存状態は決して良くはない。外面、および内面に一部ハケ調整の痕跡が残る。また外面口縁部には口唇部整形に伴う粘土の「だれ」が見てとれる。口縁部の屈曲度合より松永編年1・2期(弥生時代後期中葉～後葉)に比定される。

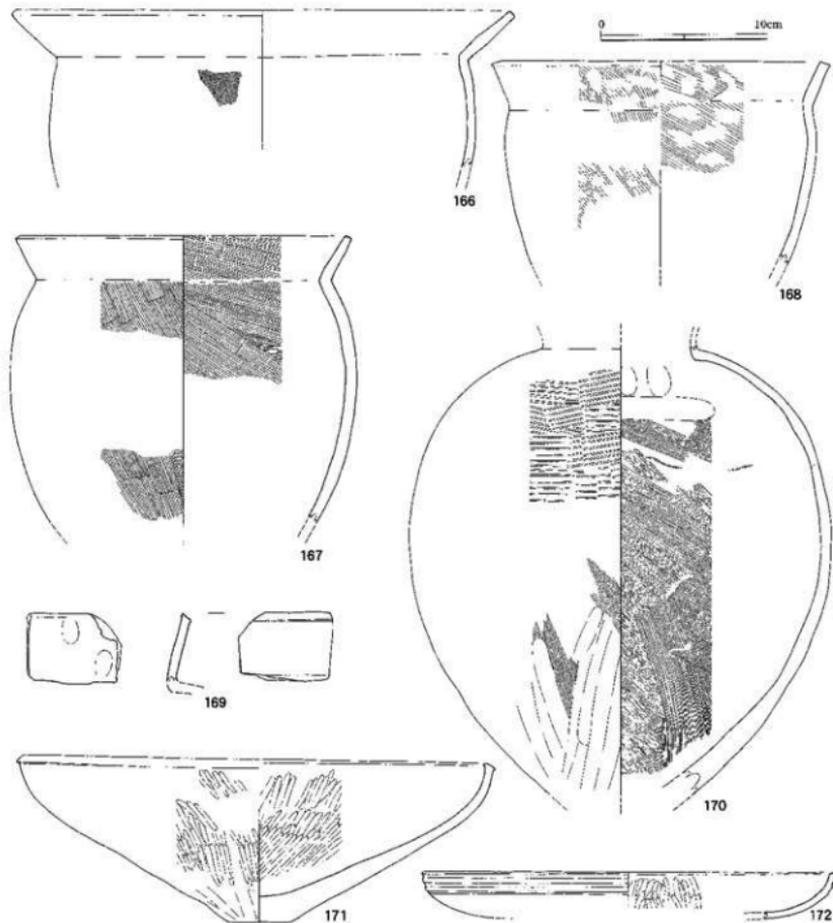


第62図 SD24平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)

SD24 (24号土坑) (第62・63図)

調査区の南西部 (B区南西部) において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径は0.93m、底面の最大径は0.76m、深さは最大で0.88mである。

遺物の出土は最下層であるIV層に集中する。図示した遺物のうち、167・168・170以外はIV層よりの出土である。166は甕の口縁部および胴部である。口縁部の屈曲は、比較的、稜が明瞭な段階にある。外面は摩滅が激しいが、胴部においてはかすかにハケ調整の痕跡が残る。内面の調整はハケのちナデである。167は甕の口縁部および胴部である。外面、内面ともにハケ調整による。外面には煤が付着する。168は甕の口縁部および胴部上半である。外面、内面ともにハケ調整による。外面には煤が付着する。169は口縁部片で、大型の甕と思われる。外



第63図 SD24出土遺物 (Scale : 1/3)

面調整はナデ、内面調整はナデおよび指オサエである。胎土の共通性より、170と同一個体と考えられる。170は大型の壺の胴部である。口縁部および底部は完全に欠損する。外面調整は胴部下半がハケの上からナデ、胴部上半がタタキ、内面調整はハケである。171は浅鉢である。内面、外面ともに調整はミガキによる。周溝状遺構から多く出土している他の浅鉢と比して、底部の形成が明瞭ではなく、口唇部の整形が雑な印象を受ける。172も同じく浅鉢の破片である。きわめて薄手で、法量も浅い。口縁部に3条の沈線が入る。外面の調整は摩滅により判然としなが、内面はミガキが施されている。

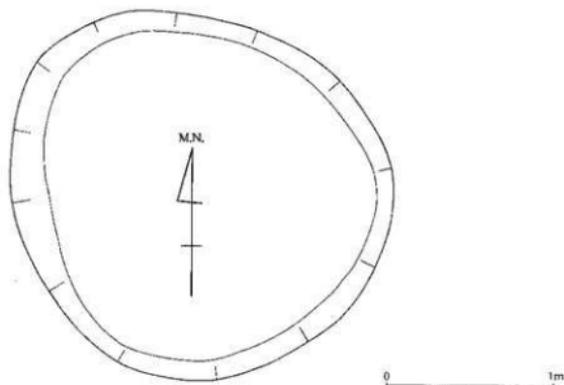
出土した壺(166~168)はすべて口縁屈曲部内面に明瞭な稜を持ち、口縁端部の面形成も行われており、松永編年2・3期(弥生時代後期後葉~庄内1式並行期)に該当するものと考えられる。長胴壺の170は胴部最大径が中ほど近くまで下がってきており、庄内1式並行段階以降の所産かと思われる。総合すると、本遺構は庄内1式並行段階のものである可能性が高い。

【C区】

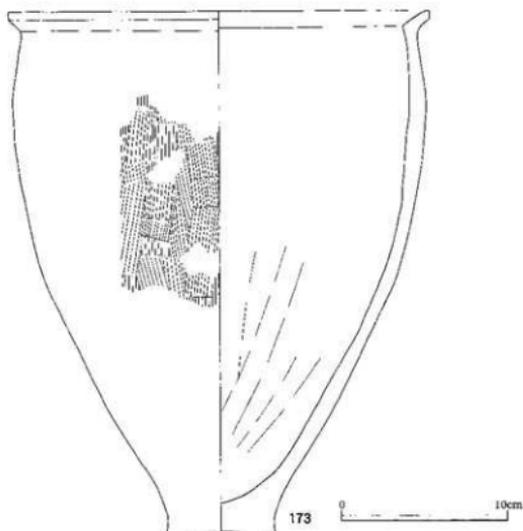
SD26 (26号土坑) (第64・65図)

調査区の西部、中ほど(C区北西部)において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径2.46m、底面の最大径は2.13mで、深さは最大で0.14mと極めて浅い。なお本遺構の検出面以上には遺物包含層が堆積していたため、各計測値は遺構本来の姿に極めて近いものと思われる。

遺物の出土量は、埋土堆積の薄さに反して多量ではあった。ただしほとんどが細片で、図化に耐えうるほどまで復原できたのは、173のみである。完形近くまで復元できた壺で、シャープな稜を持った、やや短めのくの字形口縁に、平底を持つ。外面、内面ともに表面の剥離が激しいが、外面の調整はハケ、内面の調整はナデである。



第64図 SD26平面実測図 (Scale: 1/30)



第65図 SD26出土遺物 (Scale : 1/3)

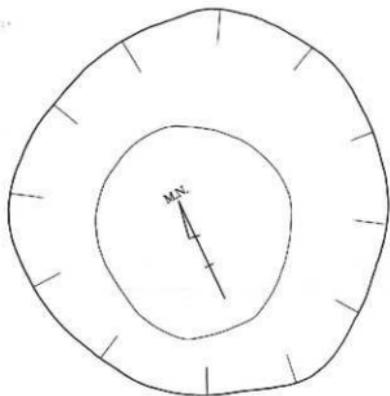
くの字形口縁と平底という要素、およびあまり張りのない胴部形状より、石川編年IV b 期(弥生時代後期前半)に比定される。

SD28 (28号土坑) (第67・68図)

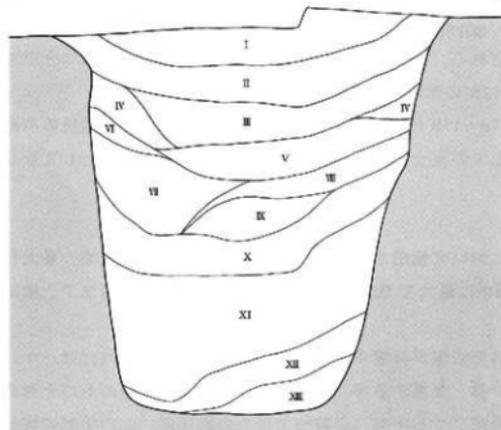
調査区のほぼ中央(C区北東部)において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径1.60m、底面の最大径0.90m、深さは最大で1.65mである。埋土中X層以上には壁面から崩れたと思しき地山のブロックが混入する。

174はV層から出土した高坏の坏部である。復原口径35.9cmと大型で、受部はやや丸みを帯び、口縁部は大きく外反する。口縁部外面には鋸歯状文が施されており、線刻の切り合い関係から、右から左の方向へと施文がなされていったことが見て取れる。また施文の開始および終了地点でつじつまが合わなくなったものと見え、空隙が生じている。表面は摩滅が激しいが、外面受部にはミガキ、同じく口縁部では横ナデ、内面にはミガキが施されていたことが見て取れる。175は大型の高坏の受部から脚部までの破片で、おそらくは前述の174と同一個体である。脚柱部のやや上寄りの部位において円形の透かし孔が三方向に、脚柱部と脚部の境において同じく円形の透かし孔が四方向に穿孔されている。表面摩滅が激しいが、外面の調整はミガキ、内面脚部はハケによる。176はIII層から出土した二重口縁壺の口縁部である。口縁部という部位だけで見れば完形であるが、当遺構中からは、この口縁部と同一個体と考えられる他の部位は出土していない。胴部との継なぎ目である第1口縁の割れ口はかなり摩滅しているため、

この遺構に入られた当初から口縁部のみであった可能性が高い。第2口縁外面には沈線が2条巡るが、波状文の施文は見られない。また表面の摩滅が激しいが、外面には一部ハケ調整の痕跡が残る。177はX I層から出土した小型の甕である。表面は摩滅が激しいが、外面にはハケ(9条/cm)ののちにナデを施している。また内面の調整にもハケ(5条/cm)を用いるが、外面の調整に用いられたものとは異なる原体を使用している。178は甕の口縁部から肩部にかけての部位である。胴部外面はタタキが施され、一部に煤が付着する。179は単口縁の大口甕である。外面はナデ、タタキ、ハケ(9本/cm)と3種の調整がなされ、底部近くは指ナ

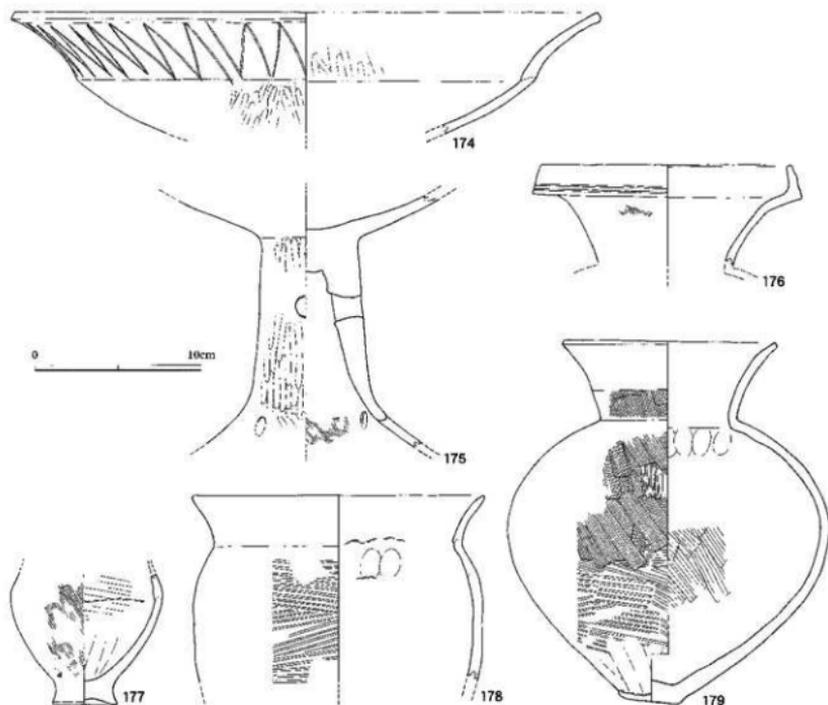


8.200m



- | | | |
|--------|--------|--------------------|
| I層 | 暗褐色砂質土 | 硬くしなる |
| II層 | 褐色砂質土 | 硬くしなる。暗色粒子、鉄分を含有 |
| III層 | 暗灰色粘質土 | 硬くしなる。地山ブロック、鉄分を含有 |
| IV層 | 暗灰色粘質土 | 暗色粒子、鉄分少量含有 |
| V層 | 暗灰色粘質土 | 鉄分含有 |
| VI層 | 明褐色粘質土 | 地山ブロック |
| VII層 | 暗灰色粘質土 | 地山ブロック多量に含有 |
| VIII層 | 黒褐色粘質土 | 硬くしなる。地山ブロック含有 |
| IX層 | 暗灰色粘質土 | 地山ブロック、鉄分を含有 |
| X層 | 暗褐色粘質土 | 硬くしなる。地山ブロック多量に含有 |
| X I層 | 黒褐色粘質土 | やわらかく、暗色粒子を多量に含有 |
| X II層 | 灰色粘質土 | 硬くしなる。暗色粒子を多量に含有 |
| X III層 | 灰白色粘質土 | 硬くしなる。暗色粒子を多量に含有 |

第66図 SD28平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)



第67図 SD28出土遺物 (Scale : 1/3)

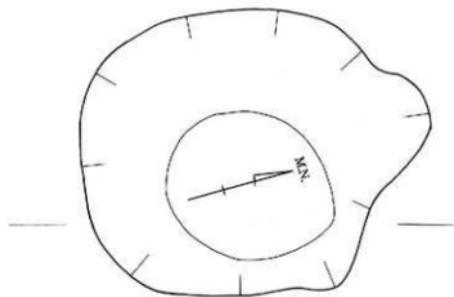
デ、胴部はタタキののち、ハケが施される。また内面にもハケ（5本/cm）を認めることができるが、外面調整に用いられたものとは別の原体を使用して施している。

時期比定の資料となり得る 174・178・179 は松永編年 2 期（弥生時代後期後葉）前後の所産と見受けられるが、いずれも X 層以上での出土であり、土坑本来の時期を示すものとして扱うには、厳密性に欠ける。

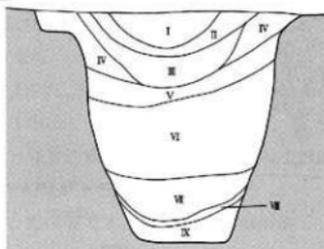
SD30 (30号土坑) (第68図)

調査区のほぼ中央（C区北東部）において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径は 1.45m、底面の最大径 0.71m、深さは最大で 0.96m である。最下層である IX 層まで、地山のブロックが混入している。

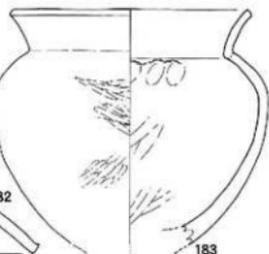
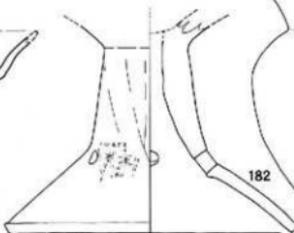
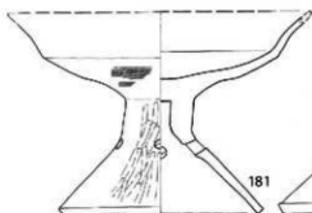
180 は粗製の甕の口縁部であり、外面に煤が付着する。外面の調整はタタキ、内面はハケによる。181 は高坏である。口縁部を一部、欠損するが、器高 12.5cm 程度の小型のものと考えられる。外反する口縁部と直線的な受部による坏部、直線的で短めの脚柱部、ハの字形の脚部からなる。脚部の上方、脚柱部との境には円形の透かし孔が四方向に穿孔されている。182 は高坏である。口縁部は欠損しており形状不明であるが、直線的な脚柱部とハの字に開く脚部を持つ。脚部の上端、脚柱部との境に、円形の透かし穴が三方向に穿孔される。脚柱部、脚部の



8.300m



- | | | |
|-------|--------|---------------------|
| I層 | 褐色土 | 硬くしまり、地山ブロック含有 |
| II層 | 褐色土 | やややわらかく、地山ブロック多量に含有 |
| III層 | 黒褐色土 | やわらかく、地山ブロック多量に含有 |
| IV層 | 黒褐色土 | 硬くしまり、含有物殆どなし |
| V層 | 黒褐色土 | 粒子粗く、やわらかい |
| VI層 | 黒褐色土 | 硬くしまり、含有物殆どなし |
| VII層 | 黒褐色粘質土 | やややわらかく、地山ブロック多量に含有 |
| VIII層 | 黒褐色粘質土 | しまりあり、含有物殆どなし |
| IX層 | 灰褐色粘質土 | 硬くしまり、地山ブロック含有 |



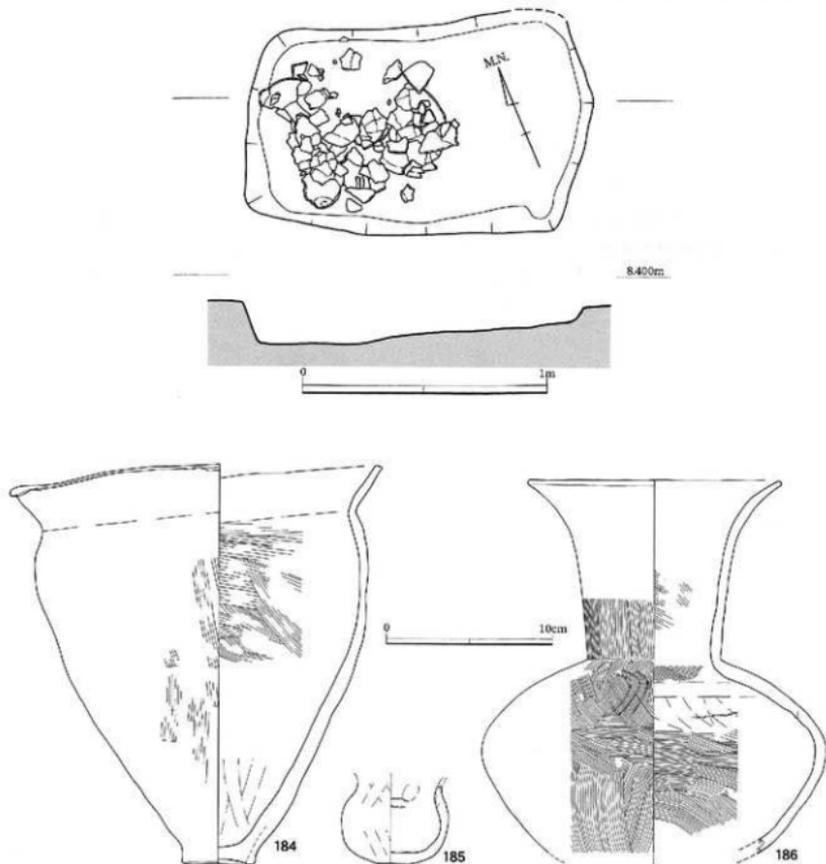
第68図 SD30平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)、出土遺物実測図 (Scale : 1/3)

外面はハケを施したのち、丁寧なナデ調整が行われている。183は小型の直口壺である。頸部のしまりは広めで、心もち外反する口縁部を持つ。表面の摩滅が激しいが、外面の調整にはミガキ、内面の調整にはナデが用いられている。

180は松永編年2・3期（弥生時代後期後葉～庄内1式並行）、181は松永編年3期（庄内1式並行）、182・183は松永編年2期（弥生時代後期後葉）に比定される。

SD31（31号土坑）（第69図）

調査区のほぼ中央（C区北東端）において検出された浅い土坑で、平面形は長方形に近い。上端の長軸は最大で1.42m、短軸は最大で0.91m、底面は長軸1.22m、短軸0.80m、検出面から底面までの深さは最大で0.19mである。土器焼成土坑のようにも思われるが、埋土中にお



第69図 SD31平面実測図 (Scale: 1/20)、出土遺物実測図 (Scale: 1/3)

ける焼土、炭等の検出はなく、判然とししない。なお本遺構の検出された地点には遺物包含層の堆積がなかったため、遺構上部は多少なりとも削平を受けている可能性がある。

遺物は遺構西半の底面においてまとまって検出された。184は中型の甕である。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。底部はやや上げ底気味で、全体的に作りは粗いが、外面調整、内面調整ともにハケののちナデを施している。185は小型の甕である。口縁部を欠損するが、胴部部分は完形である。全面ナデによって仕上げられている。186は長頸甕である。底部を欠損するが、器面の残存状態は良好である。胴部中ほどが大きく膨らむ扁球胴で、口縁部は上半部で大きく外反する。外面は全面に細かなハケを施したのち、口縁上半部はナデを施す。口縁部内面も同じくハケののちナデを施すが、胴部上半においては、ナデ調整のみが施されている。また外面の胴部上半には3本の弧線が線刻される。

184は松永編年2期(弥生時代後期後葉)に比定され、本遺構の構築、使用の年代も、これに近いものと思われる。

SD32 (32号土坑) (第70図)

調査区のほぼ中央、南西寄り(C区中央)の地点において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径1.36m、底面の最大径0.76m、深さは最大で1.21mである。埴土中XVI層は壁面から崩れたと思しき地山のブロックによって形成された層であり、XVI層以上においては二次的な堆積の可能性がある。

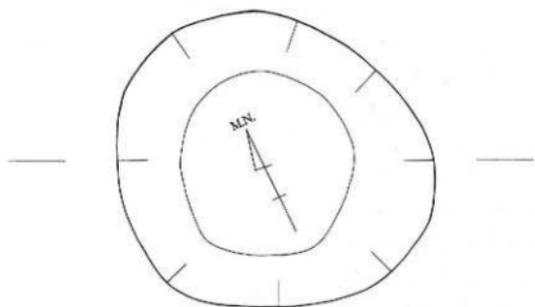
187は大型の短頸甕である。表面の摩滅が激しいが、外面、内面ともにナデ調整によるものと思われる。188は二重口縁甕の口縁部片である。外面には波状文が施されている。189は二重口縁甕の第2口縁である。全体に摩滅が激しいが、外面には線刻された波状文の痕跡が残る。190は小型の土器の胴部および底部である。おそらくは長胴の甕を模したものかと思われる。内面、外面ともに調整は判然とししない。191は形状および用途不明の土製品である。出土した部位は中空の円筒形で、柄のような部分かと思われる。

二重口縁甕の第2口縁である188・189は、傾きを復元したところ、その内傾度に大きな差が生じる。これを時期差と捉えれば、188は松永編年1期(弥生時代後期中葉~後葉)、189は松永編年2期(弥生時代後期後葉)に比定される。

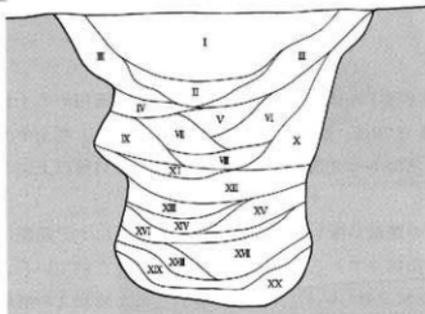
SD33 (33号土坑) (第71・72図)

調査区のほぼ中央、南西寄り(C区中央)の地点において検出された平面円形の土坑である。上端最大径1.56m、底面の最大径は1.22mである。検出面から底面までの深さは最大で0.86mであるが、底面には深さ6~7cm、径10cmほどの窪みが設けられている。底面近く(XI層)より中型の甕が完形に近い形で3つ検出されており(192・193・195)、底面のピットは、これら甕を据え置くためのものとも考えられる。なお埴土中、X層は地山のブロックそのものである。

192は平底の単口縁短頸甕である。外面の風化が激しいが、底部近くには板状工具によるナデの痕跡が見てとれる。193は単口縁の短頸甕である。口縁部は上方において外反し、胴部は倒卵形で上半部においてU字条の線刻が施される。調整は内面、外面ともにハケであるが、外面

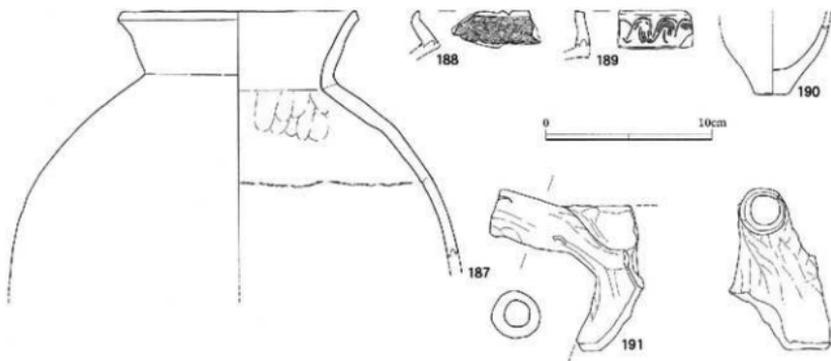


8,000m

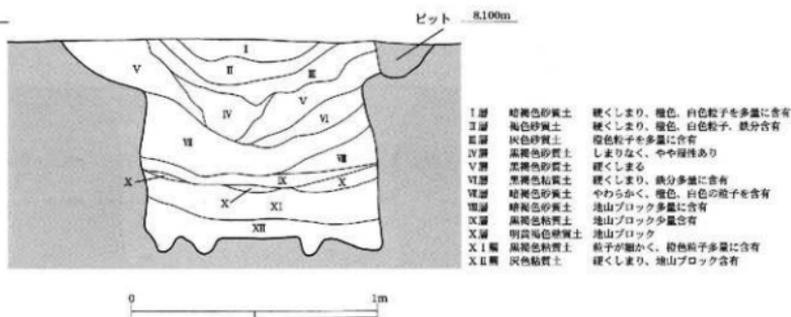
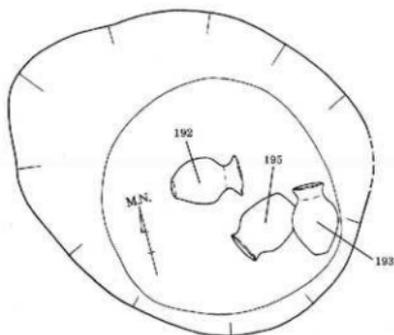


- | | | |
|--------|--------|-------------------|
| I層 | 緑褐色砂質土 | しまりあり |
| II層 | 緑褐色砂質土 | しまりあり、白色、黒色粒子を含有 |
| III層 | 灰褐色砂質土 | しまりあり、鉄分を少量含有 |
| IV層 | 紅紫色砂質土 | しまりあり、黒色、褐色粒子を含有 |
| V層 | 緑褐色粘質土 | しまりあり、鉄分を少量含有 |
| VI層 | 緑褐色砂質土 | しまりあり |
| VII層 | 緑褐色粘質土 | しまりあり、鉄分を少量含有 |
| VIII層 | 緑褐色粘質土 | しまりあり、塑性高い |
| IX層 | 黒褐色粘質土 | しまりあり、黒色、褐色粒子を含有 |
| X層 | 暗褐色砂質土 | 硬くしまり、埋山ブロック含有 |
| XI層 | 黒褐色粘質土 | 硬くしまり |
| XII層 | 緑褐色砂質土 | 硬くしまり、埋山ブロックを少量含有 |
| XIII層 | 緑褐色粘質土 | 硬くしまり、埋山ブロック、鉄分含有 |
| XIV層 | 暗褐色粘質土 | 硬くしまり、鉄分を少量含有 |
| XV層 | 暗褐色砂質土 | 硬くしまり、灰白ブロック、鉄分含有 |
| XVI層 | 灰白色粘質土 | 硬くしまり |
| XVII層 | 黒褐色砂質土 | 硬くしまり、灰白ブロック、鉄分含有 |
| XVIII層 | 黒褐色粘質土 | 硬くしまり、鉄分を少量含有 |
| XIX層 | 黒褐色粘質土 | 硬くしまり、灰白ブロック、鉄分含有 |
| XX層 | 灰白色粘質土 | しまりあり、鉄分を多量に含有 |

0 1m



第70図 SD32平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)、出土遺物実測図 (Scale: 1/3)



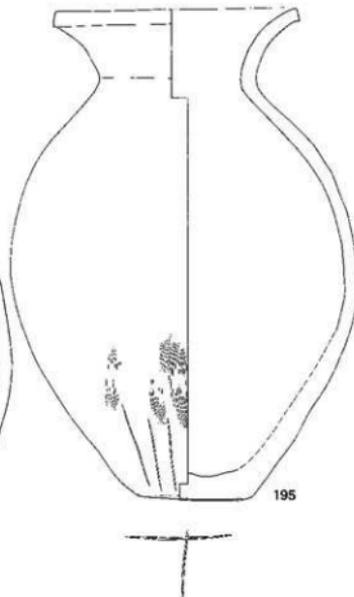
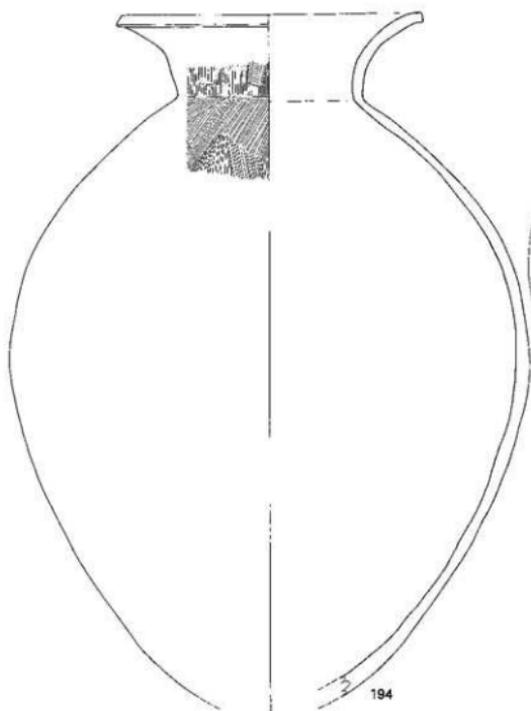
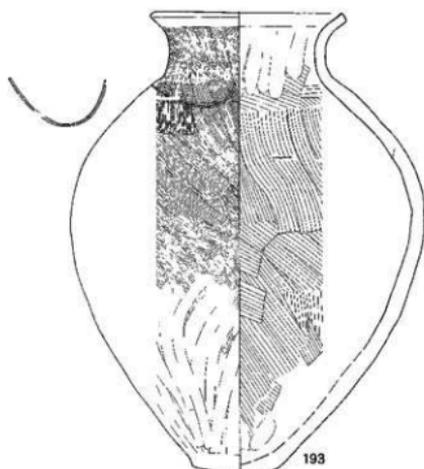
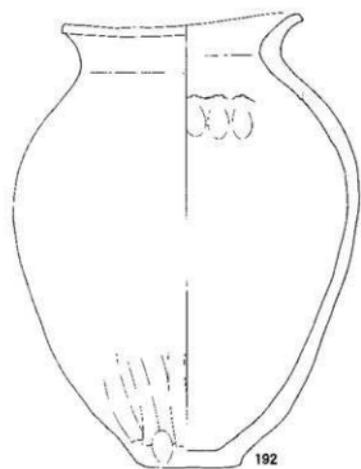
第71図 SD33平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)

の調整には9条/cmの施工原体を用いるのに対し、内面には5条/cmと、内面、外面の別によって原体を使い分けている。194はIX層より出土した大型の広口壺である。胴部は倒卵形であるが、張りはあまり明瞭ではない。口唇部は面が形成されている。外面調整、内面調整ともにハケの上からナデを施していると思われ、外面の肩部および口縁部において一部ハケメが残る。195は平底の単口縁短頸壺で、完形である。表面の摩滅が激しく、調整は判然としないが、外面においてはかすかにハケ調整の痕が残る。また外面の底部近くには縦位の沈線が3条、底面にはT字形の沈線がそれぞれ刻まれる。

いずれも最大径を胴部上半に持つ長胴の壺であり、弥生時代後期前葉～中葉の枠内で捉えられる。

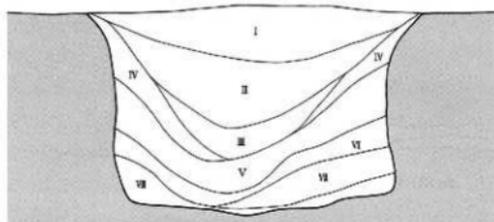
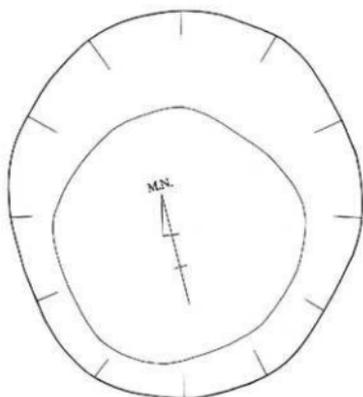
SD34 (34号土坑) (第73～75図)

調査区の中央、やや南西寄り (C区中央、やや東寄り) の地点において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径1.60m、底面の最大径1.06m、深さは最大で0.86mである。埋土中IV層は地山のブロックそのものによって形成される層であり、IV層以上においては二次的な堆積である可能性がある。196はV層出土の長胴壺である。口縁部が欠損するが、胴部最大径38.7cmと大型で、底部は平底である。表面の摩滅は極めて激しく、調整はほとんど残って



0 10cm

第72図 SD33出土遺物 (Scale : 1/3)



8,100m

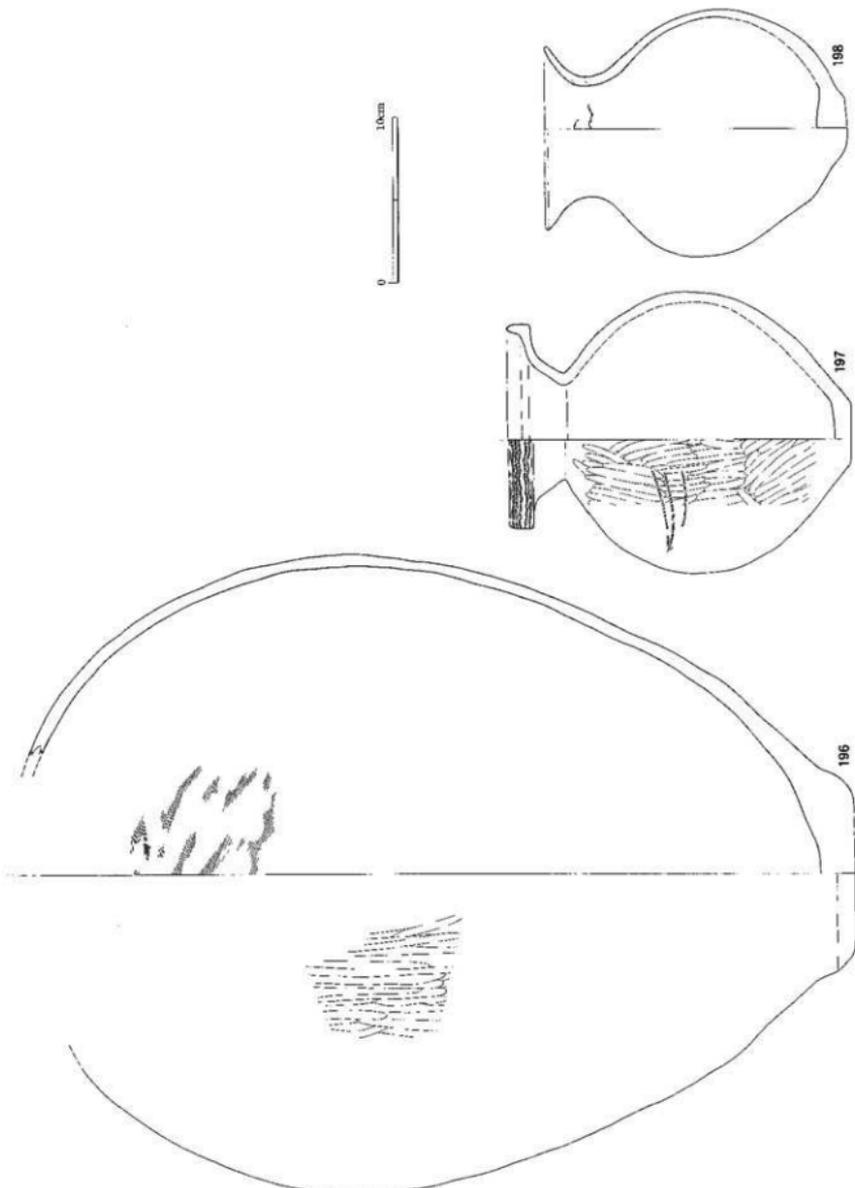
- | | | |
|-------|--------|------------------|
| I層 | 暗褐色砂質土 | しまりあり、鉄分少量含有 |
| II層 | 黒褐色砂質土 | しまりあり、鉄分含有 |
| III層 | 暗褐色砂質土 | しまりあり、鉄分含有 |
| IV層 | 黄褐色砂質土 | 緩くしまり、炭酸の塊が入る |
| V層 | 黒褐色粘質土 | しまりあり、地山ブロックを含む |
| VI層 | 灰褐色粘質土 | しまりあり、地山ブロック含有 |
| VII層 | 黒褐色粘質土 | しまりあり、地山ブロック少量含有 |
| VIII層 | 灰褐色粘質土 | しまりあり、地山ブロック含有 |

0 1m

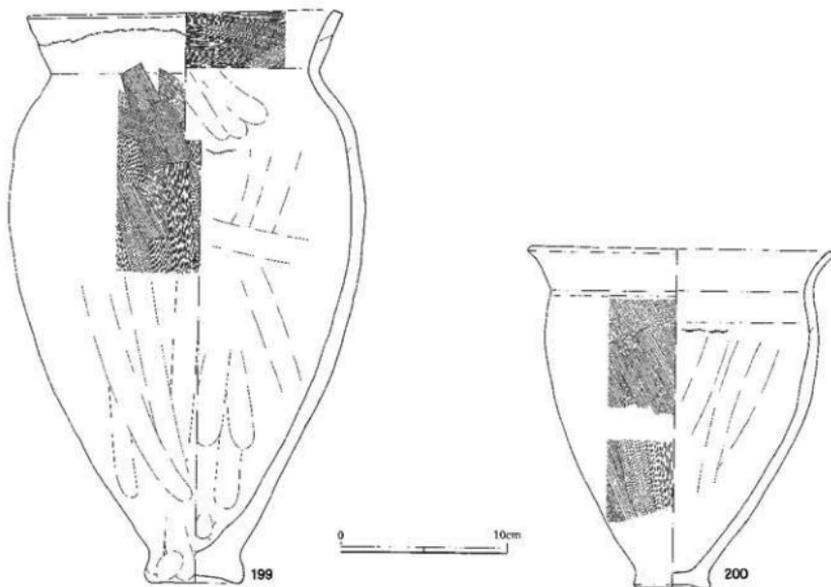
第73図 SD34平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)

いないが、外面ミガキ、内面ハケ調整であることがかろうじて見て取れる。197はVIII層より出土した二重口縁壺である。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。球形の胴部に、ほぼ直立に近い形で短めの第2口縁がつく。胴部には三本の弧を描く沈線が刻まれる。外面の調整はミガキである。198はVIII層より完形で出土した、やや小振りな広口壺である。摩滅が激しく、調整は不明である。199は甕である。完形ではないが、全形は復元できる。外面および口縁部内面ともに目の細かいハケが施されるが、用いられている施工原体は異なっており、口縁部内面の調整に用いられているハケ原体では、両端の櫛目が、他に比べて深くまで及んでおり、一見、沈線状のラインを描く。また、口縁部外面においてはナデ調整があまり丁寧に行われてはおらず、粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。200は完形の甕である。外面調整はハケ、口縁部はナデ、内面調整はナデである。

VIII層出土の二重口縁壺197は松永編年2期(弥生時代後期後葉)を遡るものではなく、また甕2点(199・200)は松永編年2期に比定される。これにより、本遺構は弥生時代後期後葉に位置づけられる。



第74図 SD34出土遺物① (Scale : 1/3)



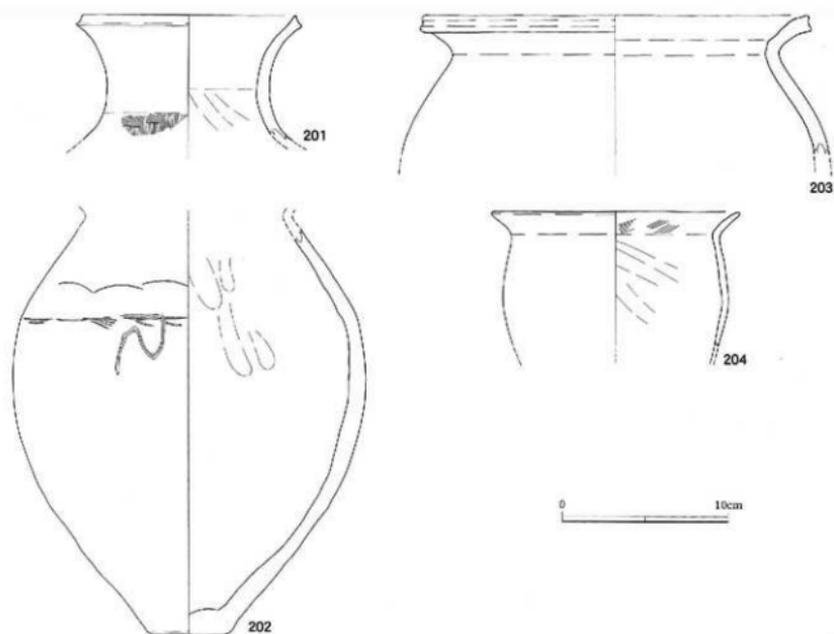
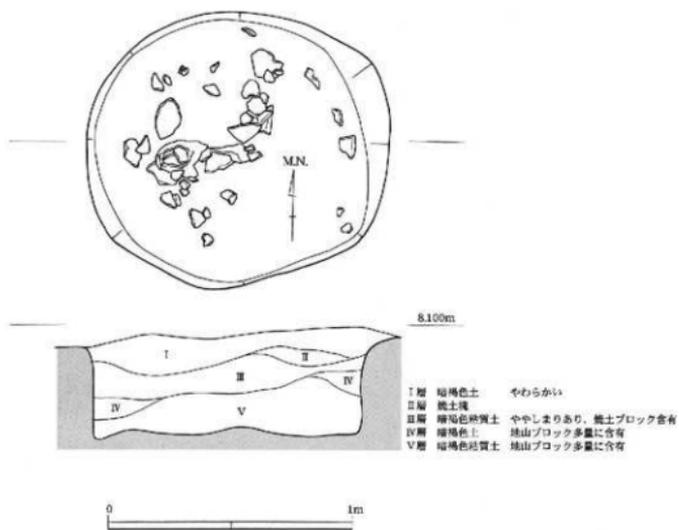
第75図 SD34出土遺物② (Scale : 1/3)

SD35 (35号土坑) (第76図)

調査区の中央、やや南西寄り（C区中央、やや東寄り）の地点において検出された平面円形の土坑である。底面は平坦に近く、壁面の立ち上がりは垂直に近い。上端の最大径1.30m、底面の最大径1.19m、深さは最大で0.45mである。近世の溝SE7の底面より検出されたため、遺構上部は多少なりとも削平されているものと思われる。埋土中Ⅱ層は焼土そのものであり、本遺構は土器焼成土坑の可能性が高い。最下層であるⅤ層は地山のブロックから形成されているが、ブロックの入り方は、文字通り隙間のないほどであり、土坑の床面として、意図的に入れられた「貼り床」に類似する構造かと思われる。

遺物の出土はⅠ層（201～203）とⅢ層（204）に限られる。201は単口縁壺の口縁部である。外面は全面にハケを施したのち、口縁部は横ナデ、内面調整は口縁部横ナデ、胴部斜め方向のナデである。202は壺の胴部で、201と同一個体と思われる。内面、外面ともに調整はナデによる。胴部上半において、連続する弧線、断続的な直線、N字上の曲線の、3種類の文様が見られる。いずれも線刻ではあるが、連続する弧線は刻み方が浅く、かつ線自体も極めて細い。203は壺の口縁部および胴部である。内面、外面ともに調整はナデによる。204は小型の壺の口縁部および胴部である。外面は摩滅により調整が判然としなが、おそらくはナデと思われる。内面においては、口縁部にわずかにハケの痕が残る。

Ⅲ層より出土した壺204は口縁部の屈曲度合いが大きく、弥生時代後期中葉の所産かと思わ

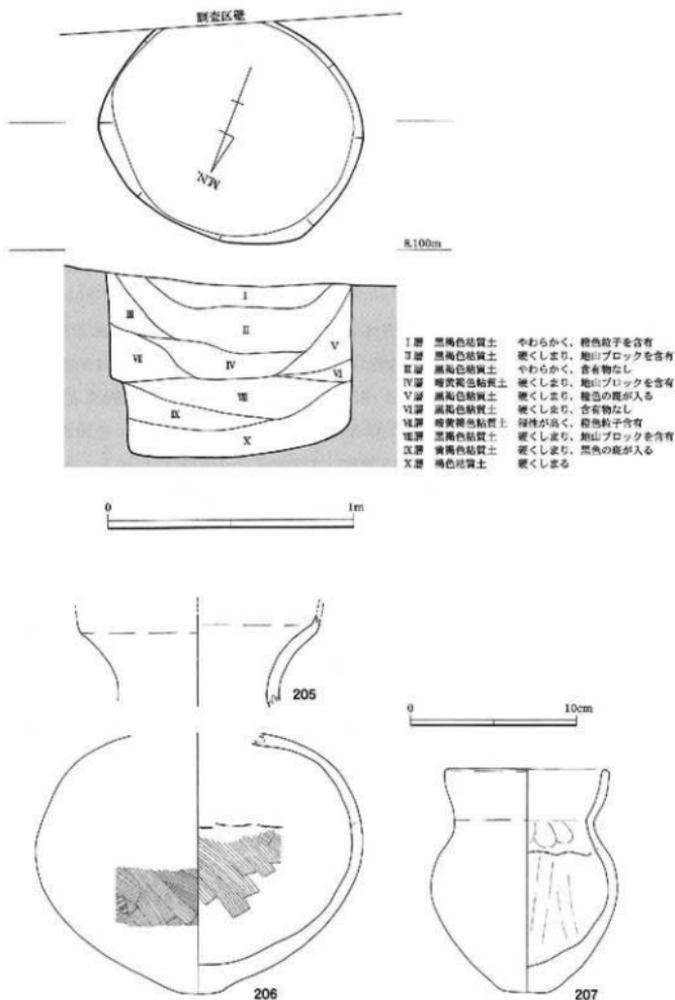


第76図 SD35平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)、出土遺物実測図 (Scale : 1/3)

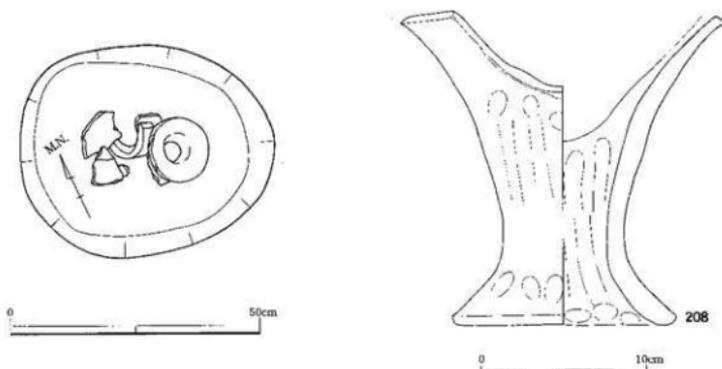
れる。I層出土の長胴壺 202 も最大径が胴部上半にあり、弥生時代後期前葉～中葉の枠内に収まり、矛盾はない。よって本遺構は弥生時代後期中葉に比定される。

SD36 (36号土坑) (第77図)

調査区のほぼ中央(C区南西端)において検出された平面円形の土坑で、壁面の立ち上がりは垂直に近い。一部は調査区外に出、全形は確認しえなかった。上端の最大径 1.09m、底面の



第77図 SD36平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)、出土遺物実測図 (Scale: 1/3)



第78図 SD43平面実測図 (Scale : 1/20)、出土遺物実測図 (Scale : 1/3)

最大径 1.00m、深さは最大で 0.74m である。埋土中Ⅶ層以上においては壁面より崩れたと思しき地山のブロックが入る。

X層より出土した 205 と 206 は同一個体と思われる。二重口縁壺で摩滅が激しいが、胴部においては内面、外面ともにハケ調整が確認できる。外面調整のハケメは 10 条/cm、内面調整のハケメは 8 条/cm で、異なる原体が用いられている可能性があるが、判然としない。また、内面においてはハケ調整の開始点が明瞭である。207 は小型の壺である。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。内面、外面ともに調整はナデによるものと思われる。

二重口縁壺 205 については、第 2 口縁部を欠損するものの、残存部より第 2 口縁の内傾度はあまり大きくない印象であり、弥生時代後期後葉を遡ることはないものと思われる。

【F区】

SD43 (43号土坑) (第78図)

調査区南西部 (F区東部、中ほど) において検出された、上端最大径 0.52m、底面の最大径 0.45m、深さ最大 0.15m の小型の土坑である。

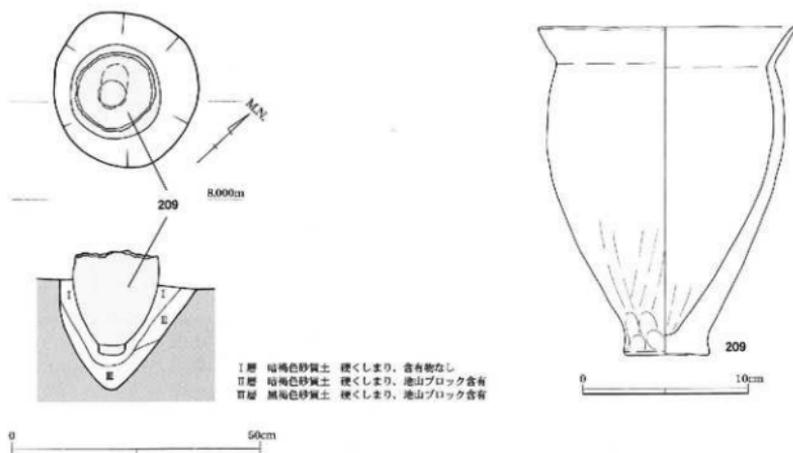
杵形器台 208 が出土した。通常の杵形器台は口縁部の片面が弧状に大きく切り取られているものを指すが、本遺構出土の杵形器台は口縁部の両面が弧状に切り取られている。外面、内面ともに調整はナデおよび指オサエによる。

SD44 (44号土坑) (第79図)

調査区南西部 (F区東部、中ほど) において検出された断面すり鉢状の小型土坑である。上端の最大径 0.33m、深さは最大で 0.22m である。

平底の甕 209 が埋設されていた。やや小振りな甕で、口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形に近い。外面、内面ともに調整はナデによる。また、外面には煤が付着する。

甕 209 は接地面がかすかに浮くものの平底の範囲に入り、松水編年の 3 期 (庄内 1 式並行) に比定される。



第79図 SD44平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/10)、出土遺物実測図 (Scale: 1/3)

SD 46 (46号土坑) (第80図)

調査区の南西端(F区南西部)において検出された平面円形の土坑である。上端の最大径1.34m、底面の最大径0.86m、深さは最大で0.70mである。遺構埋土中、北壁側のⅢ・Ⅴ・Ⅶ層には地山のブロックが含まれ、本遺構が北壁側より崩落したことが伺える。

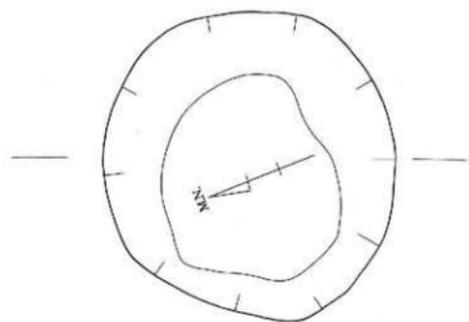
図示した遺物中、210はⅥ層出土、他はすべて最下層であるⅧ層出土である。210は直口壺である。器壁は極めて薄く、底部は完全な丸底で、接地位位におけるわずかな押圧すら認められない。外面は摩滅が激しく調整は不明であるが、内面には目の細かなハケの痕が残る。211は小型の直口壺である。摩滅が激しく、調整は判然としなない。212は壺の胴部である。口縁部を完全に欠損するが、胴部に限って言えば完形である。扁球胴で、おそらくは二重口縁壺と思われる。内面、外面ともに摩滅のため調整は不明である。213は二重口縁壺の口縁部と胴部である。緩く内湾し丸みを持つ第2口縁と、算盤玉状に近い形状であろう屈曲する胴部で、本遺跡出土の土器の中では異質な様相である。表面の摩滅が激しいが、第2口縁外面には波状文等の文様の痕跡は見受けられない。214は大型の壺の胴部下半および底部である。底部は完全な平底で、丁寧な成形がなされているようである。摩滅が激しく調整は不明であるが、内面においては指ナデの痕跡は確認できる。

最下層であるⅧ層出土の二重口縁壺213は第2口縁の内傾度が大きく、松永編年1ないし2期(弥生時代後期中葉～後葉)に比定される。

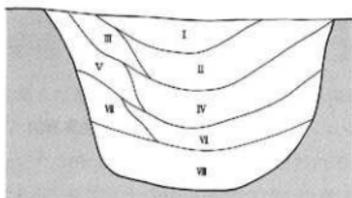
c. ビット(P) (第81図)

第81図はビットより出土した弥生時代の遺物である。これら遺物出土ビットについては、いずれも住居としては抽出しえなかった。また、各ビットにおける遺物の伴伴はない。

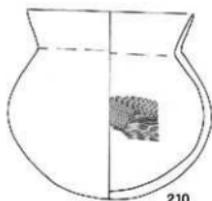
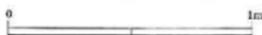
215は甕の口縁部および胴部である。シャープな稜を持ったくの字形口縁に、口縁直下にキザミの入った突拵を回す、所謂「中溝式」である。内面、外面ともに調整はナデである。216



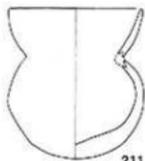
7.500m



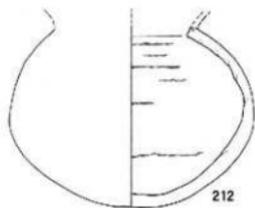
- I層 黒褐色粘質土 スコリア多量に含有
- II層 暗褐色粘質土 硬くしまり、粒子が細かい
- III層 暗褐色粘質土 硬くしまり、透山ブロック多量に含有
- IV層 黒褐色粘質土 硬くしまり、粒子が細かい
- V層 黒褐色粘質土 硬くしまり、透山ブロック多量に含有
- VI層 暗褐色粘質土 硬くしまり、粒子が細かい
- VII層 暗褐色粘質土 硬くしまり、透山ブロック多量に含有
- VIII層 暗褐色粘質土 硬くしまり、粒子が細かい



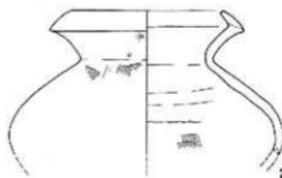
210



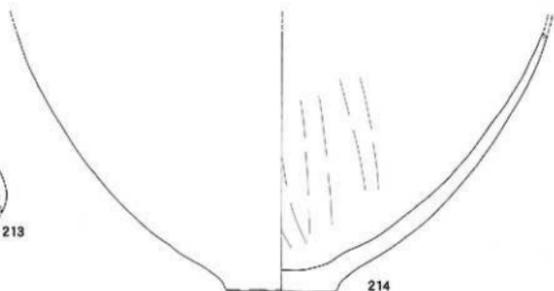
211



212

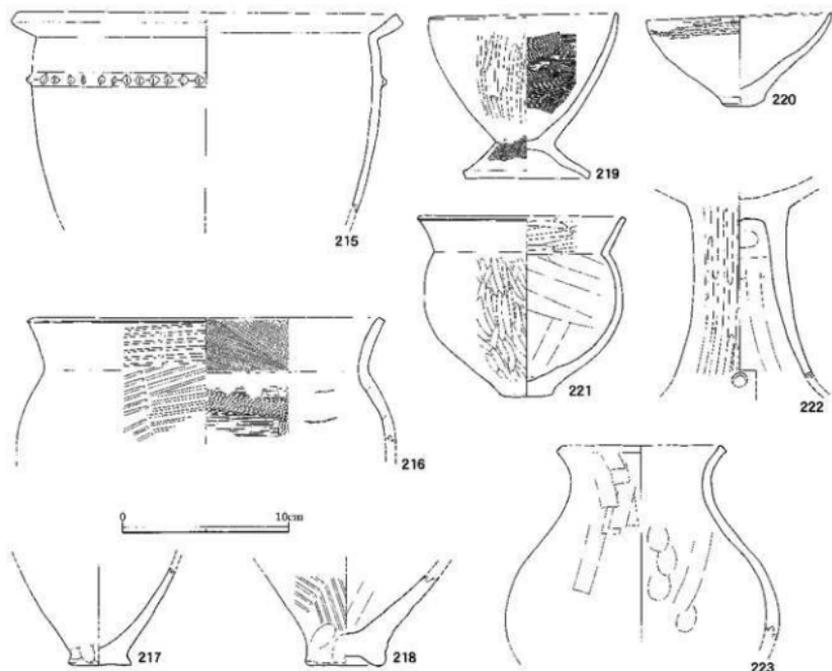


213



214

第80図 SD46平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/20)、出土遺物実測図 (Scale: 1/3)

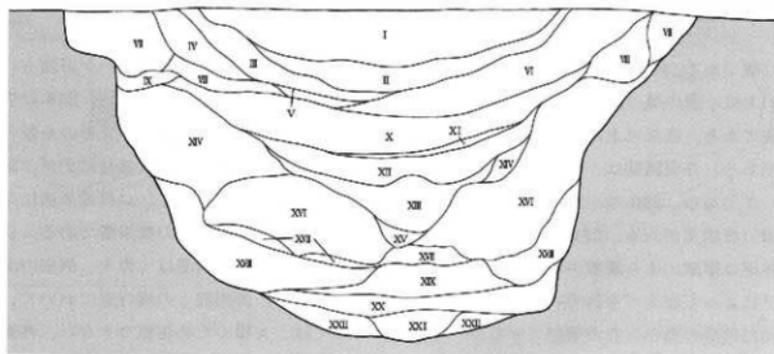
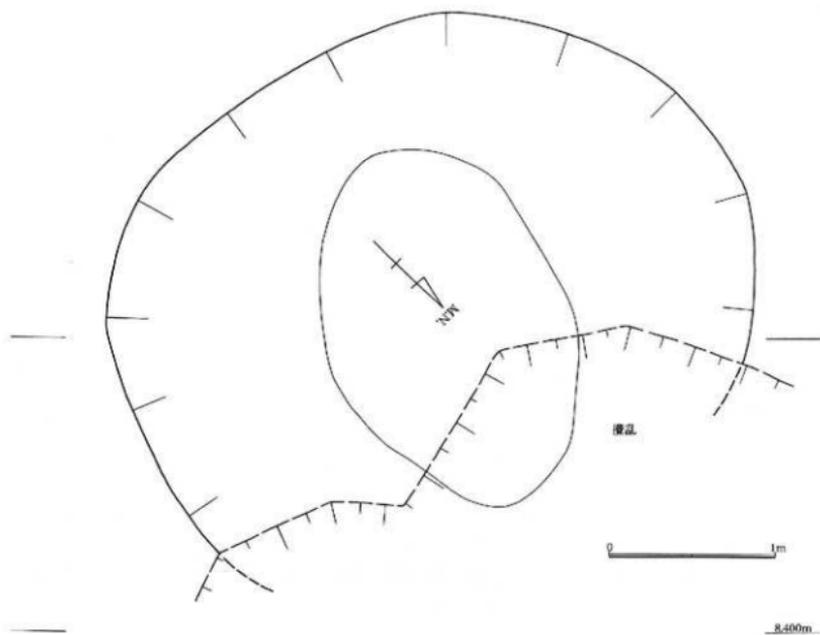


第81図 ビット出土遺物 (Scale : 1/3)

は甕である。外面には口縁部までタタキが施され、内面は、同じく口縁部までハケが施される。217 は小型の甕の胴部および底部である。摩滅が激しく、調整は確認できない。218 は甕の底部である。底部は上げ底状で、胴部外面にはタタキが施される。219 はほぼ完形の小型の深鉢である。外面調整は、脚台部分はハケ、胴部はミガキ、内面調整は、脚台部分はナデ、胴部はハケである。220 は小型の浅鉢である。内外面ともに調整はナデにより、口縁部外面に条線の細い波状文が入る。221 は、きわめて丁寧な製作がなされている小型の直口壺である。口縁部外面は摩滅により調整が判然としないが、胴部外面および口縁部内面はミガキ、胴部内面はナデによって仕上げられている。222 は高杯の脚柱部である。脚据部との境付近において、1方向に円形の透かし孔が確認できるが、他方向については、欠損のため確認できない。外面調整はミガキ、内面調整はナデである。223 は壺の口縁部および胴部である。外面調整は板状工具によるナデ、内面調整は指ナデおよび指オサエである。

第3節 古代・中世の遺構と遺物

古代に属するものとしては、土坑3基、竪穴住居1軒、掘立柱建物9棟、溝状遺構6条および各遺構ともなう遺物がある。遺構の分布は調査区の全面におよび、特定の地点における偏重等はない。なお中世に属するものは土坑1基（SD25）およびそれに伴う遺物のみである。



- | | | | | | |
|-------|---------|----------------------|--------|---------|-----------------------|
| I層 | 明赤褐色砂質土 | 粒子が細かくやわらかい。白色粒子を含有 | XII層 | 暗灰色砂質土 | 硬くしまり。暗色粒子を多量に含有 |
| II層 | 明黄褐色砂質土 | 粒子が細かくやわらかい | XIII層 | 暗灰色砂質土 | XIIに近似するが、やや硬度が増す |
| III層 | 黄褐色砂質土 | 粒子が細かくやわらかい。白色粒子を含有 | XIV層 | 灰白色砂質土 | やややわらかく、地山ブロックを多量に含有 |
| IV層 | 赤褐色砂質土 | 褐色。白色粒子を多量に含有 | XV層 | 暗灰色砂質土 | XIIIに近似 |
| V層 | 明赤褐色砂質土 | IIに近似 | XVI層 | 黄褐色砂質土 | 地山ブロック |
| VI層 | 褐色砂質土 | 硬くしまり。暗色。白色粒子を多量に含有 | XVII層 | 暗褐色砂質土 | XIIIに近似 |
| VII層 | 赤褐色砂質土 | やややわらかく、地山ブロックを多量に含有 | XVIII層 | 明赤褐色砂質土 | 地山ブロック |
| VIII層 | 褐色砂質土 | VIに近似 | XIX層 | 暗灰色粘質土 | 硬くしまり。暗色粒子を含有 |
| IX層 | 黄褐色砂質土 | 暗色粒子を多量に含有 | XX層 | 灰白色粘質土 | 硬くしまり。褐色。赤褐色の粒子が層状に入る |
| X層 | 灰白色砂質土 | 明褐色の塊が入る | XXI層 | 暗灰色粘質土 | XIXに近似 |
| XI層 | 黄褐色砂質土 | 硬くしまり。地山ブロックを多量に含有 | XXII層 | 暗灰色粘質土 | XXIに近似するが、赤褐色の粒子を含有する |

第82図 SD5平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)

a. 土坑 (SD)

古代に属する遺物を出土した土坑は3基 (SD 5・10・11) で、いずれも井戸である可能性が高い。これら井戸遺構については、SD 10とSD 11が直線距離で6mと近接している。またSD 5、SD 10においては、遺構埋土上層から下層まで大量の土師器、陶磁器を含有し、井戸廃棄時の井神祭祀の存在を伺わせる。また、SD 25では上層より中世の陶磁器が出土している。

【A区】

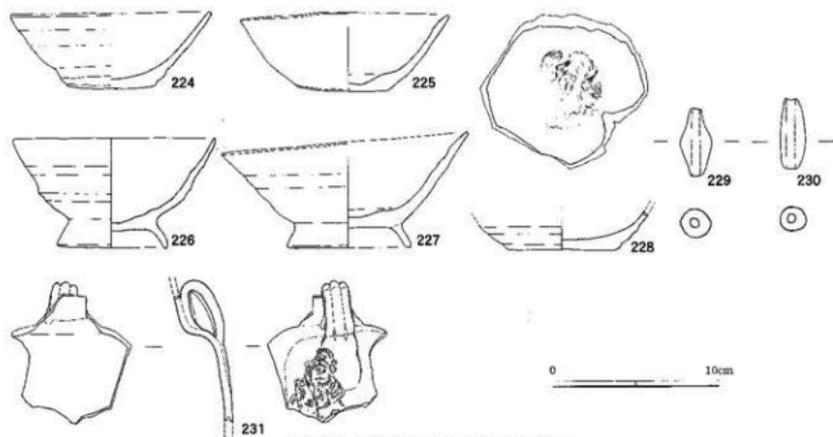
SD 5 (5号土坑) (第82・83図)

調査区の北側 (A区南西部) において検出された大型の土坑である。遺構上部の半分近くを攪乱によって飛ばされているが、上端の平面形は真円に近いと思われ、最大径は4.02mを計る。底面の平面形は楕円形で、径は1.50～2.32mである。遺構検出面から底面までの深さは最大で2.05mであるが、この土坑が検出された地点には遺物包含層の堆積がなく、遺構上部は多少なりとも削平を受けている可能性がある。現状では、遺構の断面形はすり鉢状に近いが、遺構埋土中には、地山のブロックが大量に認められ (VII～XVII層)、使用時に、壁面の大規模な崩落のあったことがうかがわれる。また遺構底面には暗赤褐色で砂質の硬化面が存在する。厚さ1cmほどの板状で、蛍光X線分析の結果、鉄分の沈殿によって形成されたものであることが判明した (第IV章第6節)。これにより、本遺構が恒常的ないし度々、水を湛えた状態にあったことが知れる。

埋土中には、上層から下層まで大量の土師器が入っており、他に土錘、輸入陶磁器も出土している。224、225、228はともにヘラ切り底の土師器坏で、224はVII層出土、225はIII層出土である。224は体部と底部の境が面として整えられており、高台の貼り付けが意図されていたものと思われるが、如何なる理由からか高台は付与されず、碗ではなく坏として焼成されている。228は見込みに墨の痕跡が残っており、墨を入れる器として使われたものかとも思われる。226、227は土師器碗である。V層出土の226は表面の凹凸が激しく、各所に稜が立つ。227はXX層より出土し、高台のあること以外は、上記、土師器坏と同じ製作手法による。231は遺構最下層であるXXI層より出土した施釉陶器片で、中国長沙銅官窯の黄釉褐彩貼花人物文水注の一部である。頸部から胴上部にかけての部位で、頸部と肩部の境に三紐状横穴の耳があり、その直下に人物を現した型押しした貼花が貼り付けてある。耳および貼花部分には褐釉がかけられ、その上から外面全体に黄釉がかけられる。内面は、口縁から頸の部分までは黄釉がかけられているが、以下は無釉である。貼花のモチーフは人物ないし神仙の像で、冑をかぶり、錫杖を持っているかのようにも見受けられる。人の字によせた眉に、口をへの字に曲げ、ぼうぼうに伸びた顎鬚を持つ、ユーモラスな表情である。229、230は小型の土錘で、229はXIV層よりの出土である。

遺構底面における鉄分の沈殿層の存在と、これら埋土中における大量の遺物の出土より、この土坑が井戸として使用されたこと、および井戸廃棄時に水神を鎮めるための祭祀行為のあったことがうかがわれる。出土遺物の多くは、先述の地山ブロックによって形成される層よりも上位に集中しており、壁体の崩落が井戸廃棄の契機になったことがうかがわれる。

出土遺物の時期としては、土師器碗 227 が、大宰府における碗分類 (中島 1992) のI-6



第83図 SD5出土遺物 (Scale: 1/3)

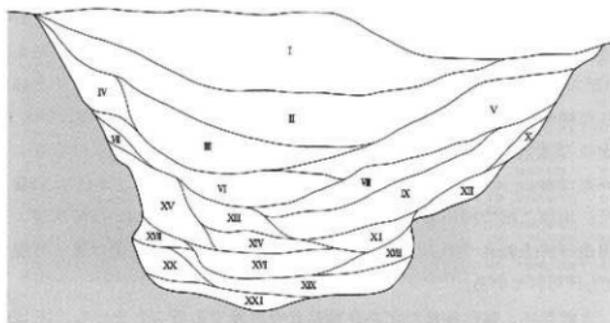
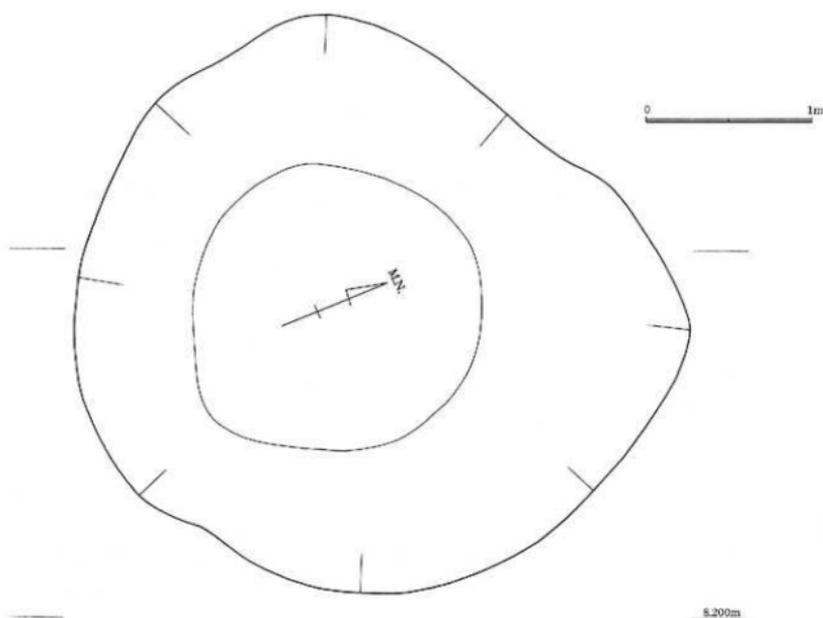
類とⅠ-7類の中間形態にあたり、大宰府の年代観を援用すれば、9世紀末ないしその前後に比定するのが妥当と思われる。土師器坏 224、225 については、碗 227 の体部と同形態であるため、同時期の所産と見て大過なからう。よって遺構そのものも9世紀末前後のものと考えられる。なお遺物中、長沙窯水注片 (231) のみは遺構底面からの出土であり、井戸構築時ないし使用時に入れられたものと考えられる。大宰府においては8世紀末から10世紀の中頃にかけて出土しており (山本 1999)、上記、遺構の年代観とも矛盾はない。

【B区】

SD10 (10号土坑) (第84・85図)

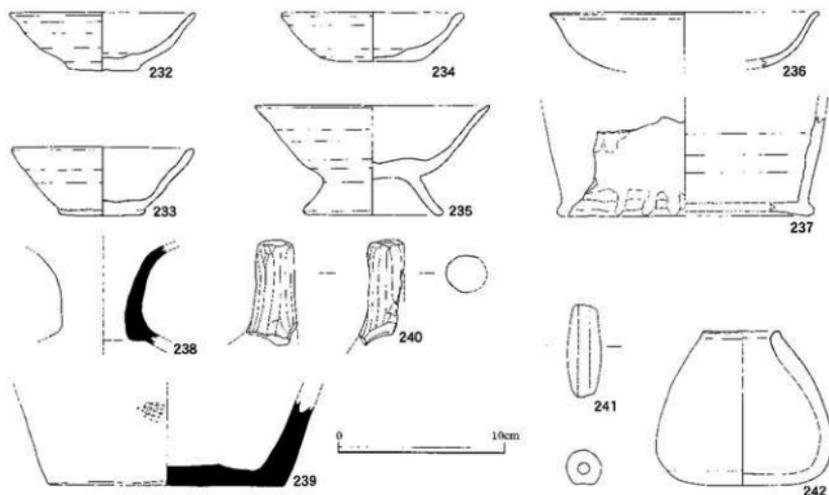
調査区の東側、中ほどの地点 (B区北東部) において検出された大型の土坑である。近世の溝 SE6 に上部北側を削平されているが、真円に近いプランを持つものと思われる。遺構上端の径は最大で 3.79m、底面の径は 1.92m である。検出面から底面までの深さは最大で 1.84m であるが、上記 SD5 同様、遺構上面は削平を受けている可能性がある。遺構底面においては SD5 に検出された鉄分の沈殿層が認められるため、井戸として使用されていたものと思われる。埋土中における地山ブロックの混入は顕著ではなく、上記 SD5 と異なり崩落が起こったと思わせる要素はない。そのため現状が遺構本来の姿に近いものかと思われる。また遺構埋土中には上層から下層まで土師器、陶磁器が混入しており、SD5 同様、井戸廃棄時の祭祀行為の存在が伺われ、同時に遺構埋土を「埋まったもの」ではなく、「埋められたもの」と解釈できるため、遺構内出土遺物を一括資料として評価できる。人工遺物の他にも、埋土中より土中の鉄分が植物体のまわりに付着してできる、所謂「高師小僧」が検出された。径は 3~4cm 程度の棒状で、おそらくは井戸を埋める際に、水神の通り道として挿された竹筒等かと思われる。

232、234 はともにへら切底の土師器坏で、232 はⅧ層、234 はⅥ層からの出土である。233 はⅪ層より出土した円盤高台の土師器坏である。通常の坏を成形したのちに、底部部分を貼



- | | | | | | |
|-------|--------|------------------------|--------|--------|-----------------------|
| I層 | 暗褐色砂質土 | ややしまる | XII層 | 暗褐色砂質土 | やややわらかく、白色ブロックを少量含有 |
| II層 | 暗褐色砂質土 | ややしまり、鉄分を多量に含有 | XIII層 | 暗褐色粘板土 | 硬くしまり、鉄分を多量に含有 |
| III層 | 暗褐色砂質土 | 粗粒があり、鉄分を少量含有 | XIV層 | 黒褐色粘板土 | 硬くしまり、鉄分を多量に含有 |
| IV層 | 黒褐色砂質土 | ややしまり、橙褐色ブロックを含有 | XV層 | 黒褐色砂質土 | しまりあり、鉄分を少量含有 |
| V層 | 黒褐色砂質土 | 硬くしまり、鉄分を少量含有 | XVI層 | 灰褐色砂質土 | しまりあり、橙色、白色ブロック、鉄分を含有 |
| VI層 | 暗褐色砂質土 | 粗粒高く、褐色ブロックを含有 | XVII層 | 灰褐色砂質土 | 粒子が大きく、硬くしまる |
| VII層 | 暗褐色砂質土 | しまりあり、褐色ブロックを含有 | XVIII層 | 灰褐色粘板土 | 硬くしまり、褐色ブロック、鉄分を含有 |
| VIII層 | 暗褐色粘板土 | しまりあり、灰色ブロック、鉄分を含有 | XIX層 | 暗褐色砂質土 | しまりあり、鉄分を多量に含有 |
| IX層 | 暗褐色砂質土 | 硬くしまり、橙褐色、白色ブロック、鉄分を含有 | XX層 | 暗褐色砂質土 | しまりあり、粗粒高く、鉄分を含有 |
| X層 | 暗褐色砂質土 | 硬くしまり、白色ブロック、鉄分を少量含有 | XXI層 | 灰褐色砂質土 | 粒子が大きく、しまりあり、鉄分多量に含有 |

第84図 SD10平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/30)



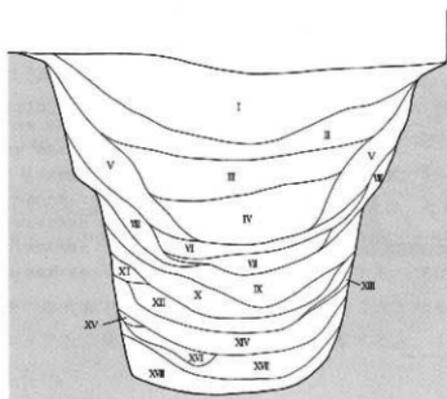
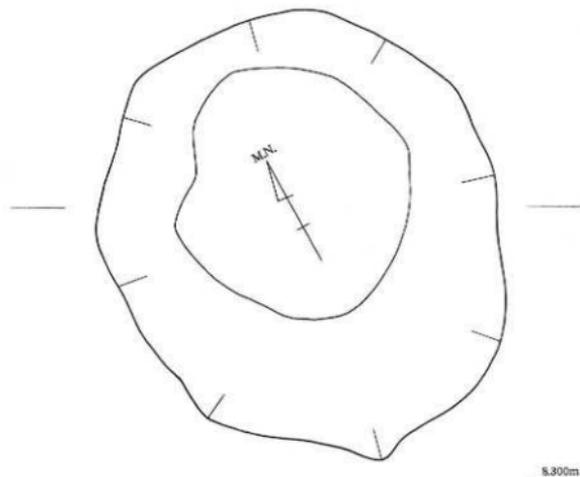
第85図 SD10出土遺物 (Scale: 1/3 ※242のみ1/1)

り付けており、底面の切り離しはヘラによる。なお 232 も貼り付けによる底部であり、円盤高台に連なる系譜のものかと思われる。235 はIV層より出土した脚台状の高台を持つ土師器碗である。236 はIII層より出土した断面須恵質の緑釉陶器口縁部片である。釉はきわめて薄く、一部においては釉が剥がれ胎土が露出する。濃緑色の釉色、須恵質の胎土より、畿内産洛西型の緑釉陶器と思われる。237 はII層より出土した施釉陶器の破片で、先述のSD5出土231と同じく、中国長沙銅官窯の黄釉褐彩貼花文水注の底部部分である。平底で、内面には粘土紐の単位が明瞭に残る。内面および底面は無釉だが、外面には黄釉がかけられ、さらに破片上部には、貼花部分にかけられた褐釉の一部が確認できる。238、239 はともに須恵器片で、238 はXXI層より出土した長胴瓶の頸部、239 はIV層より出土した壺の底部である。240 はVI層より出土した不明土製品の一部である。全体に強めのナデによって成形されている。241 はVI層より出土した小型の土錘で、中程に指で押圧したと思しき浅いくぼみがある。242 はXIX層より出土した器高3.1cmの用途不明土製品である。袋状の魚籠のような形状で、色調は黒、外面は丁寧に磨かれ、平滑に仕上げられている。

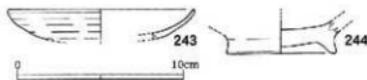
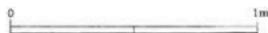
時期については、土師器碗、碗の体部形状が9世紀台の所産であることを示し、坏233については、9世紀後半から10世紀前半にかけてとされる円盤高台を持つため(岡本 1991・1995)、9世紀後半の所産とできる。また緑釉陶器236については、大きく開きながら立ち上がるものの、ある程度の深さを残したその体部形態より、9世紀後半の所産と思われる。以上より、これら遺物群は9世紀後半のものであり、遺構の年代もこれに前後するものと考えられる。

SD11 (11号土坑) (第86図)

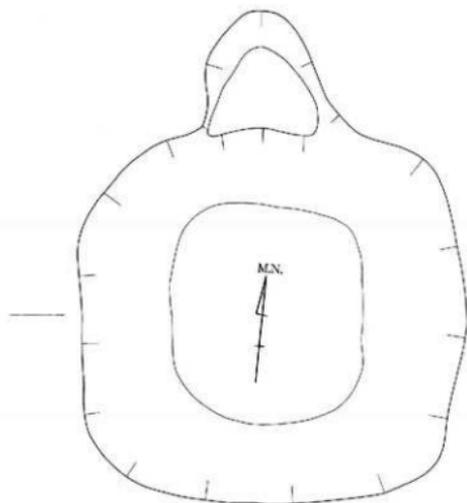
調査区東端、中ほどの地点(B区北東部)において検出された土坑である。平面形は真円に



- | | | |
|--------|---------|-------------------|
| I層 | 暗褐色砂質土 | 硬くしまり、スコリア多量に含有 |
| II層 | 灰褐色砂質土 | 硬くしまり、スコリア多量に含有 |
| III層 | 暗褐色砂質土 | 硬くしまり、スコリア多量に含有 |
| IV層 | 黒褐色砂質土 | やわらかく、スコリア多量に含有 |
| V層 | 褐色砂質土 | 硬くしまり、スコリア多量に含有 |
| VI層 | 暗赤褐色砂質土 | やわらかく、鉄分多量に含有 |
| VII層 | 暗褐色粘質土 | やわらかく、鉄分多量に含有 |
| VIII層 | 暗褐色粘質土 | 硬くしまり、池山ブロック多量に含有 |
| IX層 | 暗褐色粘質土 | 硬くしまり、池山ブロック、鉄分含有 |
| X層 | 暗褐色粘質土 | 硬くしまり、池山ブロック含有 |
| XI層 | 黒褐色粘質土 | 粘性があり、鉄分少量含有 |
| XII層 | 暗褐色粘質土 | やわらかく、鉄分多量に含有 |
| XIII層 | 暗褐色粘質土 | 池山ブロック含有 |
| XIV層 | 暗褐色粘質土 | やわらかく、池山ブロック少量含有 |
| XV層 | 暗褐色粘質土 | 池山ブロック多量に含有 |
| XVI層 | 暗褐色粘質土 | 粘性があり、鉄分含有 |
| XVII層 | 暗褐色粘質土 | 池山ブロック |
| XVIII層 | 暗褐色粘質土 | 粘性が高く、池山との境に鉄分沈殿層 |

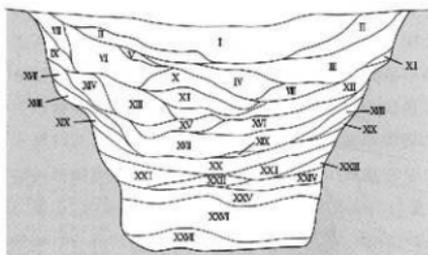


第86図 SD11平面実測図およびセクション図 (Scale : 1/20)、出土遺物実測図 (Scale : 1/3)



- I層 褐色砂質土
やわらかく、スコリアを含有
- II層 灰色砂質土
やわらかく、スコリアを多量に含有
- III層 灰色土
やわらかく、スコリアを多量に含有
- IV層 灰色土
やわらかく、粘土の細かいスコリア含有
- V層 褐色土
やわらかく、スコリアを含有
- VI層 褐色土
Vに近似するが、地山ブロック多量に含有
- VII層 褐色砂質土
硬くしまり、スコリアを多量に含有
- VIII層 灰色粘質土
やわらかく、スコリア、炭分を含有
- IX層 灰色砂質土
硬くしまり、ゾウ状の砂礫含有
- X層 暗灰色粘質土
やわらかく、スコリア、炭分を含有
- XI層 暗灰色粘質土
硬くしまり、スコリアを含有
- XII層 暗褐色土
やわらかく、IXと同様の砂礫を含有
- XIII層 暗褐色粘質土
地山ブロック多量に含有
- XIV層 暗褐色土
やわらかく、IXと同様の砂礫を含有
- XV層 暗灰色粘質土
粘土層かくやわらかい、地山ブロック含有
- XVI層 暗灰色土
硬くしまり、IXと同様の砂礫を含有
- XVII層 暗褐色粘質土
含有物なし、きわめて粘良
- XVIII層 暗褐色粘質土
粘質土、やわらかい
- XIX層 暗褐色粘質土
粘質土、含有物なし
- XX層 暗褐色粘質土
硬くしまり、含有物なし
- XXI層 暗褐色粘質土
やわらかく、褐色、褐色の泥が入る
- XXII層 暗褐色粘質土
やわらかく、砂礫を多量に含有
- XXIII層 暗褐色粘質土
硬くしまり、含有物なし
- XXIV層 暗褐色粘質土
やわらかく、褐色の泥が入る
- XXV層 暗褐色粘質土
硬くしまり、灰色粘土を含有する
- XXVI層 暗褐色粘質土
やわらかく、木炭が少量混入
- XXVII層 暗褐色粘質土
硬くしまり、炭分の沈澱が少量見られる

7.800m



0 1m



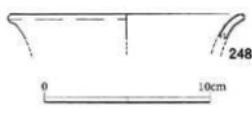
245



247



246



248

0 10cm

第87図 SD25平面実測図およびセクション図 (Scale: 1/30)、出土遺物実測図 (Scale: 1/3)

近く、径は最大で1.88m、底面の最大径は1.10m、検出面から底面までの深さは最大で1.36mである。検出面以上においては遺物包含層の堆積があったため、削平を受けている可能性は低い。遺構底面においては、上記2基の井戸遺構と同じ鉄分の沈殿による暗赤褐色の硬化面がわずかながら確認でき、規模は小さいながらも、井戸として使用されていた可能性がある。ただし、遺構埋土中における遺物の出土はわずかであり、廃棄時の井神祭祀の存在を伺うことはできない。同時に、遺構埋土が「埋まった」ものか「埋められた」ものか、その性格を明らかにすることはできない。

243は施釉陶器の小皿片である。底部は欠損するが、残存部位の状況から、底部部分は露胎であることが知れる。244はXI層より出土した土師器碗の底部である。高台部分をのぞけば、通常の坏と変わるところはなく、坏底面をヘラで切り離したのち、高台部分が付け加えられている。

【C区】

SD25 (25号土坑) (第87図)

調査区西端(C区北西部)において検出された隅丸方形プランの土坑である。上端は一辺が2.39m、底面は1.35m、深さは最深で1.06mである。また上端北辺においては楕円形の突出部があり、段が設けられている。本遺構においては上記3基の土坑に見られた鉄分の沈殿層が見受けられず、遺物の出土も少量であった。遺構の性格については不明とせざるをえないが、その規模から、やはり井戸として使われていた可能性が考えられる。

245はXVII層より出土した糸切り底の土師器坏である。246は須恵器の壺ないし甕の底部である。247はII層より出土した白磁塊の破片である。口唇部のみ釉が削り取られ、露胎となっている。248は龍泉窯青磁の口縁部であり、端反口縁の碗である。

245に見られる土師器の糸切り技法は、宮崎県地域においては12世紀中ごろに導入されると想定されており(岡本 1995)、XVII層出土の245は、それ以降の所産である。247および248の磁器類は、いずれも14世紀の所産に見受けられる。ただしテフラ分析においてI層より霧島高原スコリア(10~13世紀降灰)が抽出されており(第四章 第1節)、I層下のII層より出土した遺物の年代観との間に大きな矛盾が生じることとなる。ただし分析において、I層に含まれるスコリア火山灰が少量であったことを勘案すると、I層が二次堆積層である可能性も考えねばならない。

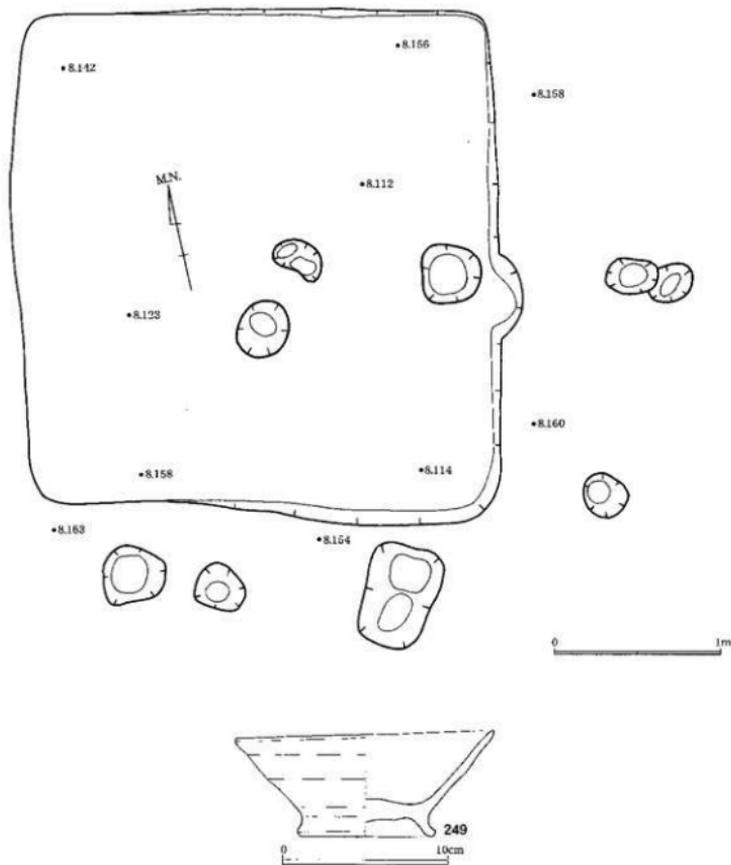
b. 竪穴住居(SA)

今回の調査において検出された竪穴住居は、わずかに1軒のみであり、出土遺物から古代に属するものであることが知れた。

【B区】

SA1 (1号竪穴住居) (第88図)

調査区の中央東寄りの地点(B区北側)において検出された小型の竪穴住居である。古代の井戸SD10と、同じく古代の掘立柱建物SB3とのほぼ中間に位置し、弥生時代の周溝状遺構SL6を切って存在する。調査区東側傾斜面の直前に位置しており、遺構上部は大きく削平



第88図 SA1平面実測図 (Scale: 1/30)、出土遺物実測図 (Scale: 1/3)

を受け、最も残りの良い南東コーナー部における遺構上端から床面までの深さは0.10mである。軸をほぼ北-南、東-西に持つ正方形プランの住居で、遺構上端の東-西辺は2.88~2.97m、北-南辺は2.97~3.15m、床面の東-西辺は2.86~2.94m、北-南辺は2.94~3.18mで、床面積は約9㎡である。東辺に半円形の突出部があり、かまどのようにも見えるが、焼土や粘土塊等の検出もなく、その機能については判然としない。また遺構内および周辺において、いくつかのピットが存在するが、明確にこの堅穴住居に伴う柱穴と判断できるものはなく、上部構造については、完全に不明である。

床面より両黒の黒色土器碗249が出土している。体部形状は直線的であり、高台の形状、貼

り付けにやや粗雑化の傾向が見えることから、9世紀後半の所産と思われる。

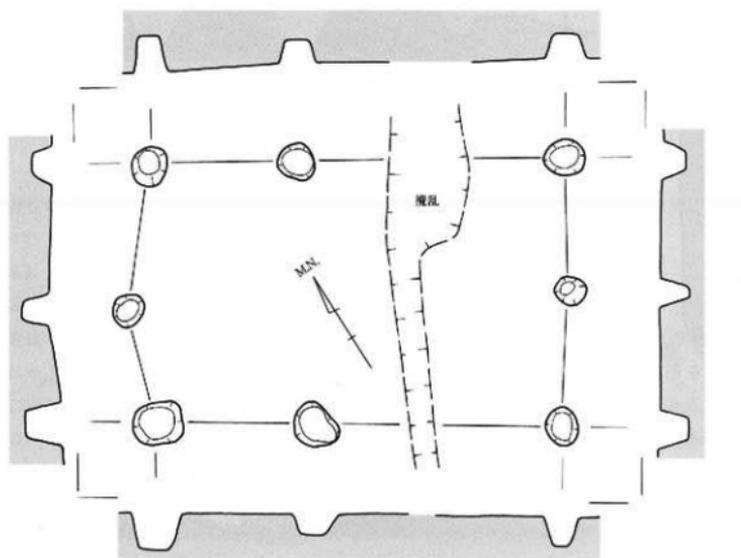
なお本遺構は平面プランが小形で明確な柱穴もなく、厳密には堅穴住居として扱うべきではないかもしれない。そのあり様は、中世の堅穴建物に近いもののようにも思えるが、地方における堅穴建物の出現が、鎌倉幕府による流通路の整備を前提とするものであれば(堂込 2003)、9世紀代の本遺構に「堅穴建物」の名を冠するのはふさわしくなく、誤認のおそれはあるものの、現状では堅穴住居としておく。

なお本遺構同様、一辺がわずかに3m前後で、明確に伴う柱穴を持たない古代の堅穴住居は、桜町遺跡の東方2kmに位置する第2砂丘(下田島Ⅱ面上)上の、山崎上ノ原第2遺跡においても検出されている(南正覚他編 2003)。

c. 掘立柱建物(SB)

掘立柱建物は調査区の全面にわたって9棟検出された。規模は様々であるが、棟方向は東一西に持つものが7棟と圧倒的に多く、残り2棟については南一北を棟方向とする。棟方向からSB1とSB8、SB2とSB7およびSB9にはそれぞれ共通性が感じられる。またSB3、SB4、SB5は棟方向ないし桁方向に共通性がある。

いずれの掘立柱建物においても、柱穴中からの遺物の出土はなく、厳密には時期不定である。ただし、近世の遺構検出面となる遺物包含層上面において検出された柱穴がないこと、および



※標高はすべて8.700m

0 2m

第89図 SB1平面実測図 (Scale: 1/60)

近世の溝に切られて存在しているものが多いこと（SB2、SB3、SB4、SB6、SB9）から、少なくとも近世の掘立柱建物ではない。弥生時代の掘立柱建物である可能性もないとは言いきれないが、調査区内においては弥生時代の竪穴住居の検出は一軒もなく、掘立柱建物のみによって構成される弥生時代集落というのも、少し考えにくい。古代の井戸（SD5、SD10、SD11）や竪穴住居（SA1）に伴うものである可能性が高い。

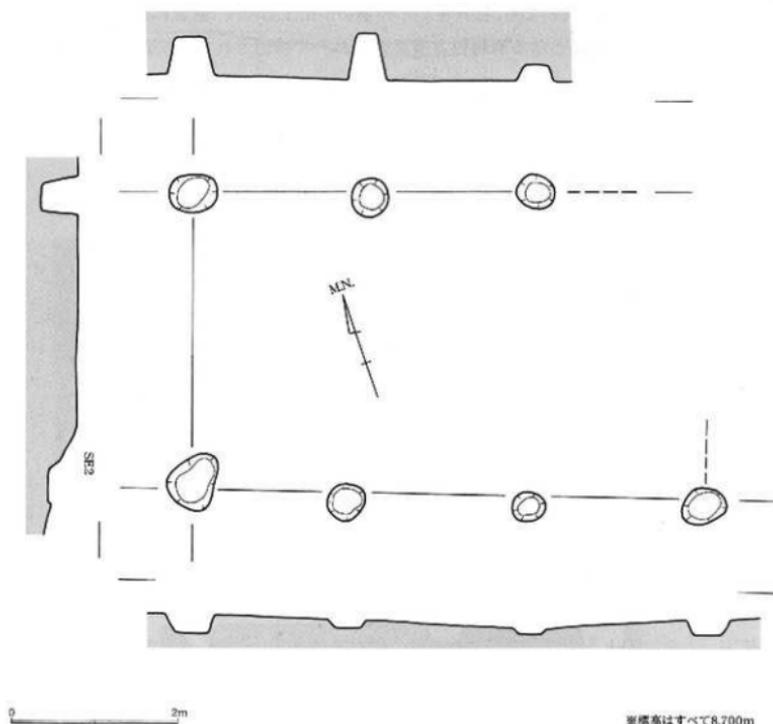
【A区】

SB1（1号掘立柱建物）（第89図）

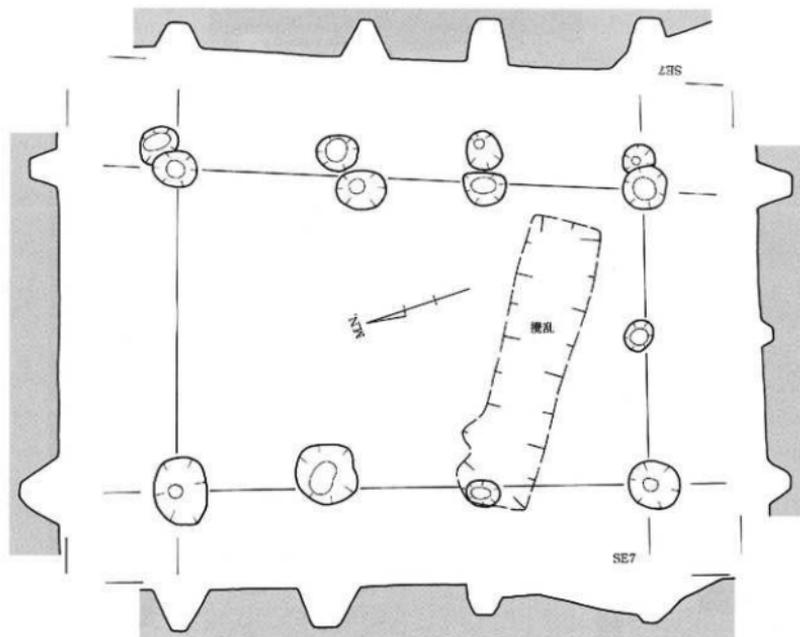
調査区北端（A区北西部）において検出された桁行き2間（西辺3.25m、東辺3.31m）、梁行き3間（北辺5.10m、南辺4.93m）の掘立柱建物である。面積は約17㎡で、一部を攪乱に切られる。検出面からの柱穴の深さは25～47cm、棟方向はN-58°-Wである。

SB2（2号掘立柱建物）（第90図）

調査区北端（A区北西部）において、SB1の東に隣接して検出された桁行き1間（西辺3.64m）、梁行き3間（南辺6.30m）の掘立柱建物である。棟方向はN-71°-Wで、建物の南半



第90図 SB2平面実測図 (Scale: 1/60)



※標高はすべて8.300m

0 2m

第91図 SB3平面実測図 (Scale : 1/60)

分を近世の溝SE2に切られる。北東コーナ部の柱穴は削平を受けたものと見え、抽出できなかった。検出面からの柱穴の深さは8~57cm、面積は推定で23㎡である。

【B区】

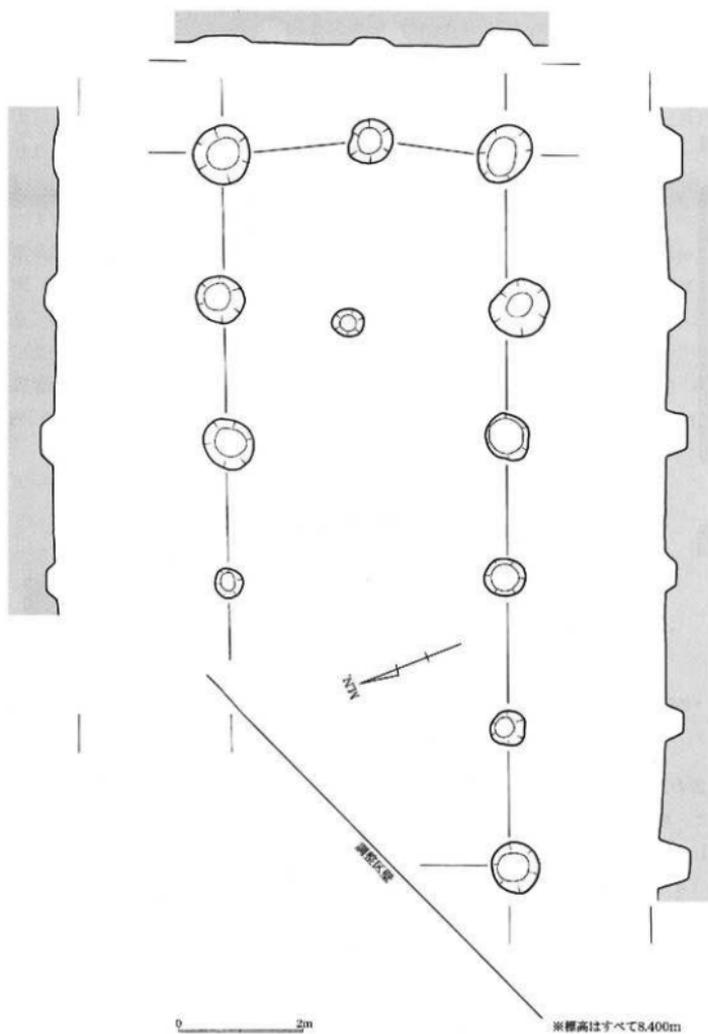
SB3 (3号掘立柱建物) (第91図)

調査区のほぼ中央 (B区北部) において検出された掘立柱建物で、南部を近世の溝SE7に切られる。桁行きは北辺1間 (3.96m)、南辺2間 (3.63m)、梁行きは3間 (西辺5.84m、東辺5.72m)、面積は約22㎡、柱穴の深さは17~57cmで、棟方向はN-19°-Eである。

東辺の梁に沿ってもう一列の柱穴群があるが、底部分と考えるには東辺と近接し過ぎており、また明瞭な切りあい関係も存在することから、建て替えに伴うものと考えられる。後述のSB4と軸を直交させて隣接する。

SB4 (4号掘立柱建物) (第92図)

調査区のほぼ中央 (B区北部) において検出された大型の掘立柱建物で、西方は調査区外に出るため、全形を抽出することはできなかった。桁行き2間 (東辺4.56m)、梁行き5間以上



第92図 SB4平面実測図 (Scale : 1/80)